

ふ。大正十三年三月鴉尋常高等小學校高等科を卒へ、四月鴉農業補習學校に入學、昭和二年三月卒業せり。此間二年一月鴉青年訓練所に入所、五年十二月修了、資性濃厚、頭腦明晰にして模範青年たり。六年六月一日徵兵として近衛歩兵第三聯隊第二中隊に入營、一意軍務に勉勵し其成績優秀にして精勤章二回、射撃、銃劍術の優秀賞各一回を受け、七年六月上



等兵に昇進、伍長勤務を拜命、十一月三十日善行證書及び下士適任證書を受けて歸休除隊せり。
翌八年三月一日陸地測量部地形科に採用せられ、八月一日滿洲派遣の爲東京を出發、二日下關港を出帆、三日釜山港に上陸、七日昂々溪に到着、地形測量班幹部組に編入せらるゝや、日夜測地に進入の諸準備に努め、十九日より富拉爾基附近の測量作業に奮勵し功を顯はせしが、不幸細菌性赤痢に罹り二十三日齊々哈爾衛戍病院に入院、手當を盡したれ共其甲斐なく、遂に三十日公病死を遂ぐるに至れり。克く困苦缺乏に堪へ

任務に邁進せるは、軍人精神を發揮せる者と云ふべし。之より先八月十日陸地測量手に任ぜらる。(加藤)

陸軍技手勲八等 松村多三郎



松村多三郎は、東京府豊多摩郡大久保町大字東大久保の出身にして、父を庄之助、母をハマと云ひ、明治四十年二月二十五日生なり。品川鮫洲小學校を卒業し、後明治大學に學び次で東京中央工學校建築科を卒業し、大正十二年十二月陸軍東京經理部に職を奉じ、後第一師團經理部に轉職せり。此の間出身工學校の高等科を卒業し、昭和四年六月關東軍經理部に轉じ、同八年四月陸軍技手に任ぜらる。

昭和六年九月十九日より關東軍經理部留守部に在りて、滿洲事變に關する業務に従事せしが、同年九月二十九日奉天に到着し、事變勃發當初の混雜時に於て經理部管下の諸建築物の建設、諸設備の設計、現場監督に従事し、翌七年四月に至る間、奉天及び齊々哈爾の間を屢々往復して、兩爾に於ける多數駐屯部隊の兵舎、其の他の臨時工事に關する設計並に工事の實施を監督し、日夜精勵、不眠不休連日に亘るもの數々にして、恪勤精勵、功績優秀と認めらる。

同七年四月中旬より同年七月末に亘りては錦州駐屯部隊のため兵營假設備、建物の設計並に工事の監督に任じ、爾後九

月末に至る間は工務課にありて勤務せしが、偶々虎疫病の流行と匪賊の横行地を通過して通遼に至り、同地に於ける緊急設備の工事を了し、以て同地駐屯部隊の軍事行動に支障なからしめたる功績は、特筆に値すべきものなり。爾後翌八年二月に至る間奉天派出所にありて勤務し、精勵日夜寢食を忘るゝが如く、殊に最も至難と目せられたる奉天野戦兵器廠並に火薬庫の工事を監督し、措置宜しきを得て、良好なる成果を収めたるは、功績特に優秀とす。

同八年二月以降は工務課に在りて、獨立守備隊兵舎其他の工事設計に従事し、次で熱河作戦に伴ふ第二野戦建築班第一作業班主任として錦州に至り、兵站に屬する諸建築を監督指導し、後朝陽に進出して多數の職工苦力等を指揮し、朝陽、大平房、承德等に於ける各種の建築業務に執筆し、晝夜兼行東奔西走、迅速なる竣工を計り、軍事行動に貢献せる所多なり。八年七月下旬以降は吉林派出所附として精勵渝らざりしが、吉林省團們に於て工事監督中賜チブスに侵され、滿鐵團們分院に入院し、九月四日病歿せり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

多三郎性質温順にして氣概に富み、事に當りて熱心奮勵、一事は必ず之を完うせざれば已まざる美風あり。常に長上に服従の道を守り、同僚に交誼厚く、上下の信頼厚かりき。(佐藤)

陸軍警査兼陸軍監獄看守勳七等 掛巢貞治郎

掛巢貞治郎は千葉縣海上郡瀧郷村松ヶ谷の出身なり。昭和六年九月二十日關東軍法務部に屬して旅順を出發奉天に出動、爾來多端なる庶務に従事し被告人を監守する等日夜率先業務に精勵、十月十一日旅順に歸還を命ぜらるゝや、軍法務

部及び軍法會議檢察部の勤務に服し、少數の勤務員に伍し常時の勤務に倍せしも、強盜殺人等の重大被告人を含む二十餘名の被告人の戒護等、何等の事故を發生せしめず克く留守勤務を遂行せり。以上は其の功績の主要なるも其の勤勞は大なるものと認められ、又成績優秀なるものと認められたり。四月八日病の爲め旅順衛戍病院に入院するに至り、同月十四日敗血症にて死亡せしは哀惜に堪へず。

功により勳七等に叙せられ、其の勳功を賞せられたり。

貞治郎性質温厚篤實、事に當り熱心精勵、上下皆其の病歿を惜みたり。(佐藤)

陸軍事務囑託勳六等(陸軍歩兵少尉正八位) 日下繁夫

日下繁夫は岡山縣倉敷市沖の出身なり。明治四十年五月一日兼松の男として生る。大正九年三月大高等常高等小學校尋常科を、十五年三月天城中學校を夫々卒業し、十五年四月より滿洲公主嶺大口鴻仁堂合資会社に勤務し、傍ら同月南滿洲鐵道株式會社實業補習學校に入學、十月三十日華語科を修了せり。昭和二年十二月一日幹部候補生として松江歩兵第六十三聯隊に入隊、翌三年十一月末日退營後、大高青年團副團長、軍人會倉敷南分會役員、同市消防組南部小頭等として活動し、六年四月一日歩兵少尉に任じ、正八位に叙せられたり。資性剛毅にして剛氣に富み、人に對して親切、寡言實行を旨とし、柔道二段の資格を有し、兼ねて滿洲の事情に通ぜざるを以て、滿洲事變突發するや活動の好機到來せりとなし、滿洲國軍官候補生を志願せり。

斯くて七年十二月二千數百名の志願者中最も優秀なる成績を以て採用せられ、翌八年六月一日滿洲國歩兵上尉に任官、

吉林省警備軍綏寧地區司令部附となり、八月二十三日第十師團に協力し、綏寧地區肅清の爲、吉林省討伐部隊を指導する顧問歩兵少佐久保勝春を輔佐し、兵力二百五十の敵を攻撃す。討伐軍は午前九時虎林城外に展開し、戦闘を開始するや、日下は彈雨中を馳驅し、同少佐の命令を各部隊に傳達して戦闘指導を容易ならしめたり。かくて敵を撃退して虎林入城後

は掃蕩班を指揮し敗殘匪を検索捕縛し、且つ吉林軍の軍紀を取締り、尙ほ城外の築城並に退却せる敵情の偵察に従事せり。



次いで十一月二日綏寧地區討伐中、占領せる東山好匪約二百五十攻撃の爲、久保少佐の命に依り第七討伐隊を指導し、午後三時半展開を了り攻撃を開始せしむ。敵の熾烈なる銃火を受くるや討伐軍の氣勢頓に衰へ、動もすれば現地に膠着し攻撃前進過々として振はず。此時日下は敵彈を冒し陣頭に立ち叱咤激勵其士氣を鼓舞して前進せしめ、漸次戦闘を有利に進展せし

め、頑強に抵抗する敵に多大の損害を與へ遂に之を撃退し、爾後二十七日迄日本軍の討伐に策應して敗殘匪の北走を拒止する爲、北鐵沿線守備の任を果せり。

翌九年一月四日關東軍司令部囑託、滿洲國軍政部服務を拜命、同日吉林省警備軍騎兵第四旅團司令部に配屬精勤中、高玉山匪約二千は虎林北方縣境附近の天險を擁し暴逆を逞しうするを以て、一月中旬日下は軍事教官向日少佐以下坂田囑

託、坂口少尉等と共に虎林に到着し、第十師團の討伐に協力する爲、曩に一月八日以來顧問砲兵少佐辻演武が黒咀子に到り、蒐集せる情報及び楊木崗の戦闘に於て得たる捕虜の言を綜合して立案せる討伐計畫に基き工作を進め、二十三日及び二十六日には敵情地形を明にする爲強行偵察を敢行し、二道亮子に於て劉營長以下十六名を捕虜とせり。

近く日滿軍の大討伐開始せらるべきを察知せる高玉山は、王勇、孫寶鼎、揚占山、袁甫山、徐司令等部下約千五百を率ひ一舉虎林を奇襲し、之を奪取すべく二十八日夜陰に乗じて城外正面を包圍し、午前三時半哨線を突破して其約三百を間道より進め、谷地を利用して密に城内に侵入し、同四時不意に第十四團本部を襲撃して之を占領す。當時顧問處に宿營せる向日少佐、日下坂田囑託、坂口少尉は敵襲と共に警備に就き、暗中情況不明なるも飛彈の方向に依り顧問處の包圍せられしを知り、團本部と連絡の爲同部を包圍する敵に機關銃を猛射す。同五時前天明となるや、虎林北半部は既に敵手に落ち、第十四團各部隊は敵の重圍に陥れるも、尙ほ各孤立して防戦中なるを知り、向日少佐は日下囑託に對し「顧問處員を指揮し機を見て出撃すべし」と命令し、自己は飛彈中を疾驅して未だ敵に占領せられざる補充營の戦闘指導に赴けり。

爾後日下は同處員を指揮し、彈雨下に自ら輕機關銃を執つて殺到せる敵に猛火を浴びせ其數十を斃し奮戦中、同六時團本部を占領せる敵は一團となり同處に向ひ突進するを目標し、集中火を以て之を制壓し多大の損害を與へ、敵後退するを見るや敢然銃を擡げて之を追跡し、敵の占領せる團本部に突入せんとする刹那、不幸腹部貫通銃創を受けて倒れ、之を收容せんとせし坂田囑託は胸部貫通銃創を被り、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。日下囑託は重傷に屈せず意氣軒昂、少數處員を指揮激勵して防戦に努め、他團實に五時間、此間味方は坂田囑託及び張營長以下七十三名の死傷者を出だし戦況凄慘を極めしも、奮戦克く種勢を挽回し敵を殲殺し城内に遺棄せる敵屍二百五十三として虎林奪取の企圖を粉碎し、遠く蘇滿

國境外に驅逐せり。日下は其後顧問處に於て應急手當を施し加療に努めたるも、邊疆の地にして軍醫の手當を受くる事を得ず、二月三日遂に戦傷死を遂ぐるに至れり。

戦傷死に先だち二月一日滿洲國歩兵少校に任ぜらる。功に依り勳六等單光旭日章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍勳託勳八等 緒方武雄



緒方武雄は熊本縣菊地郡岩村大字山崎の出身にして、明治三十三年五月三十日仲二の男として生る。母をついと云ふ。大正四年三月岩尋常高等小學校高等科を卒業、爾後講義録に就いて勉學、中學第四學年課程を修了せり。資性豪膽率直にして淡白、幼少より頭梁たるの傾向を有し、長ずるに及び勇敢なる事を好み、沈着にして事に動ぜざりき。

昭和六年十月中旬より翌七年三月上旬に亘り、謀報及匪賊の状況偵察に活動せり。抑事變突發するや奉天及長春附近の支那軍は、皇軍の一撃に依り潰走せりと雖、支那東北軍閥は錦州に新政府を樹立し、防備を固め敗殘兵を糾合して反撃の機を窺ひ、且錦州一帯に蟠居して隱然勢

力を持する老北風、青山等の匪賊を使喚し、我後方を擾亂せんとするの狀顯著なるものあり。偶々錦州政區を襲撃し且之等匪賊の状況偵察の目的を以て、特志調査班編成せらるゝや、武雄は六年十月十五日に關東軍事務勳託として之に加はり、同志十四名と共に二十日盤山縣に向ひ奉天を出發し、高坨子に於て更に軍旅を整へ、十一月上旬遼河を渡りて三道溝に前進せしが、突如として消息を絶つに至れり。爾後極力搜索に努めし結果、倉岡班長と共に一行は三道溝に於て、老北風、青山等の率ある千餘の匪賊と奮戦力闘せしも、武雄は遂に重傷を受けて捕へられ、三月七日盤山縣九臺子に於て銃殺せられたる事判明せり。

武雄は倉岡班長と共に錦州政府襲撃の企圖を以て勇躍之に赴きしに、不幸雄圖は中途にして挫折せりと雖、其盡忠報國の至誠は往時の志士の夫れに比すべく、其勇戦奮闘は大和民族の特性を遺憾なく發揮せるものにして、其功績は甚だ大なり。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。誠に餘榮ありと謂ふべく、英靈以て瞑すべし。遺族は姉ふきにして出身地に居住す。(加藤)

陸軍々屬勳託勳八等 服部 實

服部實は三重縣四日市市濱ノ一色の出身にして、父を義一、母をマツと云ひ、明治三十七年二月二十八日に生る。大正六年三月四日市第一高等小學校を卒業し、四月三重縣立四日市商業學校に入學、大正八年同校中途退學、東京正則中學校に入學し、大正十二年九月上海に渡り上海復旦大學に特別聽講生として入學し、同十三年同大學に在籍しつゝ上海陸軍駐

在武官岡村寧次中佐の下に謀報勤務に服し、十四年岡村駐在武官轉出せしも、引續き後任岩松義雄中佐の下に同任務に服し、その後黒襲會關西支部に勤務し、特命を帯びて渡支渡滿すること數回に及べり。資性濃厚にして膽太く、果斷にして憂國の念厚く、弱冠の頃より軍部大官の知遇を受けたり。昭和五年三月某中將の麾下となりて渡滿し、或は蒙古或は支那本部に於て謀報勤務に従事し、同六年九月十八日滿洲事變勃發するや、滿洲里特務機關にありて同事變に關する勤務に服し、十月一日より關東軍司令部總務課勤務となり七年三月關東軍司令部事務囑託となれり。



昭和六年九月十八日より七年八月七日に亘りては、謀報及び內蒙古自治軍指導部勤務に服せり。事變突發當時、海拉爾に於て滿洲里機關の謀報勤務に任じありしが、この間昭和六年十月末齊々哈爾方面情勢逼迫するや、片倉參謀の指示を受け、哈爾濱を経て齊々哈爾に進入し、十一月初旬同地林少佐並に清水領事引揚げ後に於て齊々哈爾南方支那人民家に潜伏して支那軍の行動を偵知し、第二師團の齊々哈爾に進出し來たるや、直ちに柴山中佐に連絡し、情報を書し、其の行動を容易ならしめたり。

七年一月以降は屢々軍の特命を受け、呼倫貝爾方面に到り、呼倫貝爾獨立運動に關し、該地方蒙古政廳と連絡し、二月末松井大佐の戦歿するや、片倉參謀の指示を受け、該方面との連絡に任じ、四月以降內蒙古自治軍の改編に際しては、本

間大尉、磐井囑託を補助し、或は又齋藤少佐の區署を受けて內蒙古自治第一軍の集結に努力する等屢々彈雨を冒し、單身敵地に出沒して軍の行動に貢献、偉功を樹てたり。

次で七年八月八日より九月二十七日に亘りては、謀報及び內蒙古自治軍指導部勤務並に滿洲國興安省調査補助業務に服せしが、此の間內蒙古自治軍指導部にありて勤務中、九月中旬以來、富拉爾基以西中東鐵道西部線一帯に駐劄せる蘇炳文及び張殿九配下の護路軍中に義勇軍及び蘇聯方面の使喚に依り、兵變を起さんとする兆ありとの情報頻々として至れるを以て、其の真相調査の爲め命に依り、同九月十八日長春發、齊々哈爾に出張し、着後各關係方面と連絡し鋭意調査中の處、事態愈々急を告ぐるに至りしを以て、海拉爾、滿洲里、富拉爾基、於蘭屯方面に派遣せし密偵の歸來を待たず、同二十七日齊々哈爾發、軍用機に便乘し、海拉爾、滿洲里方面に向ひ、滿洲里に一旦着陸せしも、同地駐屯護路軍の兵變勃發せる爲め直ちに齊々哈爾に向け引返へし、途中於蘭屯碾子山附近に於て有力なる蘇炳文軍の射撃を受け、機關部に故障を生じ、五徳連子附近に不時着陸の已むなきに至り、着陸後該地附近に在りし張殿九軍の攻撃を受け、搭乗せし將校等と協力奮闘、大に努めたるも衆寡敵せず、遂に同日夕壯烈なる戦死を遂ぐるに至れり。滿蒙の奥地に於て苦難を嘗めて皇國のため盡瘁し、滿洲國建設成るや、滿洲國政府興安總署屬官として重大使命を遂行し、國事に執掌すること約十年、遂に任務に邁進職に殉じたり。實の勳功又偉大なりと謂ふべきなり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。實短軀なりしと雖も滿身是れ膽、興亞の志業に勵み、一介の私心なく、私慾なし。行動神出鬼沒、常に勞苦を厭はず慄悍無比、機略ありて死地に活を求むるの如法を體得しありしも、惜むべし天命を假さず、遂に興安嶺の露と消えたり。然れども實の勳業は永く東亞永遠の平和の礎石たるべく、其の遺烈は後世志士仁人の嘆仰の的とならむ。(澁川)

陸軍々屬囑託勳八等

赤間 政勝

赤間政勝は福岡縣嘉穂郡稻築村大字岩崎の出身にして、父を政十、母をセキと稱し、明治四十二年八月七日に生る。大正十三年三月稻築高等小學校を卒業し、昭和五年六月朝鮮龍山歩兵第七十八聯隊に入營せり。性質温厚にして情誼に厚く體格頑健にして運動を好み、マラソンは特に其の長ぜる所、常に青年團開催の陸上競技會等には必ず優秀なる成績を挙げたりと云ふ。



昭和六年九月十二日滿洲事變勃發し、編成下令せらるゝや、政勝勇躍之れに加はり、九月十九日龍山を出發、同二十三日よりの鄭家屯附近の守備に當りては、大隊傳令として敵正規兵又は敗殘兵の鄭家屯を襲撃するの風評専らなる市内に於て、常に周到なる警戒心を以て活動し、克くその任務を完うせり。殊に九月二十三日午後六時過、衣笠中隊との連絡に際しては、大隊書記の命に依り、迅速に情況を大隊本部に報告して功あり。

九月三十日より十月六日に及びては、清河々谷敗殘兵の掃蕩に参加し、十月七日よりは奉天に轉じて同地附近の警備に任じ、十一月十三日に及びり。次いで同十七日より十九日に亘りては、昂々溪及び齊々哈爾附近の戦闘に参加し、爾後七

年一月三十一日に亘りて繞陽河附近、長春、鄭家屯、法庫門、錦州、遼西、北鎮縣、黑山縣、大凌河下流地區等の各地に轉じて討伐及び警備に任じ、常に勇敢沈着に行動して任務を完全に遂行し、赫々たる偉功を樹てたり。

斯くて四月三十日龍山歸還のため奉天を出發、同五月一日龍山に歸着、同六日復員完結歸休除隊せり。八月二十五日通譯として歩兵第三旅團司令部に雇傭せられ、爾來東葦子溝守備隊通譯として勤務中、九月一日午後七時十分當守備隊に敵匪約二百名襲撃し來れり。政勝は守備兵と共に交戦四十分にして之れを撃退し、爾後警備隊と共に至嚴なる警戒に服せしが、同日午後九時再び該匪賊南方西方東方の三方面より襲撃し來たり、敵彈我が山上の守備隊監視家屋附近に雨況せしも、勇敢なる政勝は何等意に介することなく、時恰も敵の一集團は勇敢に暴進し、鐵條網を破壊し、陣地に侵入せんとせり。

政勝之れを發見自己の危険を顧ず、奮然身を陣地より露出し、狙撃を以て敵を斃し、其の侵入を防止し、遂に敵を撃退せしめたり。然るに不幸一彈飛來咽喉部を貫通し、遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至れり。政勝は二回の敵匪の來襲に當り沈着機敏に行動し、敵の鐵條網破壊を防止して其の侵入を防ぎ、守備隊の危急を救ひたり。政勝の功績又拔群なりと謂ふべきなり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。(澁川)

陸軍々屬囑託勳八等

増田 政二郎

増田政二郎は明治三十九年三月三日佐賀縣佐賀郡北川副村大字江上に呱呱の聲を擧げ、尋常小學二年を修業後、居を佐

賀縣東松浦郡唐津市に轉せり。幼少の頃より性淡泊にして剛毅、眞面目なる半面に大人も及ばざる膽力を備へたり。其の長ずるに従ひ、此の草深き平和郷に安閑たる生を送る能はずとし、單身渡滿、大連工業學校に入學し、刻苦勉勵して之を了り、錦を飾りて歸郷後、朝鮮龍山歩兵第七十三聯隊に入營せり。除隊後滿鐵系の某會社に入り實業に従事する傍ら、奉

天を中心とする各地を涉獵し、植民開發に没頭せり。



昭和六年九月十八日突如として滿洲事變勃發するや、愛國の情禁する能はず、志願して十月十五日關東軍司令部事務囑託に採用せらる。これより先き滿洲事變突發と共に奉天及び長春附近の支那軍は、皇軍の一撃により潰走せりと雖も、支那東北軍閥は錦州に新政府を樹立し、防備を固め、收殘兵を糾合して反撃の機會を窺ひ、且つ錦州一帯に蟠居して隱然勢力を持せる老北風、青山等の匪賊を使喚し、我が後方を擾亂せんとするの狀顯著なるものありしかば、我軍は錦州政府を襲撃し、匪賊の狀況偵察の爲め特志調査班を編成せり。政二郎は勇躍之れに加はり、同志十四名と共に十月二十日奉天を發し、萬山縣に向ひて前進し、高坨子に於て軍旅を整へ、十一月初旬遼河を渡りて三道溝に前進せしが、突如として消息を絶つに至れり。爾後極力搜索に力めたる結果、一行は三道溝に於て老北風、青山等の率ゐる千有餘の匪賊と奮戦力闘せしも、衆寡敵せず、みな重傷を蒙りて捕へられ、萬山縣九臺子に於て銃殺、悲壯の戦死を遂げたること判明せり。

政二郎、功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。政二郎は昭和二年一月十日徴兵として朝鮮龍山歩兵第七十三聯隊に入營、昭和三年十二月歸休退營せしこと前記の如きも、在營中銃劍術に於ては隊中其の右に出づるものなく、又一兵にして屢々分隊の指揮を托せられ、殊に昭和三年若林大尉が馬賊の毒刃に斃れたるとき、之れが討伐隊に加はり、匪賊の跳梁する密林を而かも夜間單獨斥候として、重大任務を果たしたる時の如きは、隊員悉く其の豪膽と機敏に驚嘆せざるはなかりしと、又以て人と成りの片鱗窺ふに足るべし。(濃川)

陸軍々屬囑託勳八等 大村省三

大村省三は、香川縣丸龜市北平山町の出身にして大村富五郎の三男なり。母をエイといひ明治二十四年十一月九日を以て生る。三十五年三月、丸龜市立高等小學校第一學年を修業、幼にして父を亡ひ、商人たらんとして大阪に出で商家に勤めしが、性來冒險を好めることゝて後新聞社に入り、夜學校に於て法律經濟學を學びたり。大正三年大望を抱いて渡鮮、京城に到り、新聞記者として國境の奥地を跋渉、滿蒙の匪賊、馬賊の動靜を調査、遂に京城に國境企業調査會を起し、其の主事となれり。昭和五年九月「馬賊と其の真相」を著せり。省三は又大正十四、五年の頃、閑院元帥官殿下の朝鮮御巡視の砌り拜謁を賜はり、北鮮警備及び滿洲事情に就き、御下問に奉答の光榮に浴したりといふ。

昭和六年九月十八日滿洲事變勃發するや、報國の至誠禁するに由なく、挺身志願十月十五日關東軍司令部事務囑託となれり。これより先き滿洲事變の突發と共に、奉天及び長春附近の支那軍は皇軍の一撃に依り、潰走せりと雖も支那東北軍閥の錦州に新政府を樹立し防備を固め、收殘兵を糾合して反撃の機會を窺ひ且つ、錦州一帯に蟠居して、隱然勢力を持せ



る老北風、青山等の匪賊を使囑し我が後方を擾亂せんとする状顯著なるものありしかば、我が軍は錦州政府襲撃と匪賊の
 状況偵察のため、特志調査班を編成す。省三即ち勇躍、
 之れに加はり同志十四名と共に、十月二十日奉天を出
 發して盤山縣に向ひ、高坨子に於て更に軍旅を整へ十
 一月初旬、遼河を渡り三道溝に前進せり。それより消
 息を絶つに至りしが、極力搜索に力めし結果、一行は
 三道溝に於て老北風、青山等の率ゐる千有餘の匪賊と
 奮戦せしも、みな傷つきて捕へられ、盤山縣九臺子に
 於て銃殺せられたること判明せり。

省三、功により勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

(渡川)

陸軍々屬囑託勳八等 藤原寅一

藤原寅一は鳥根縣仁多郡横田村大字横田村の出身にして、父を乙次郎、母をツネと云ひ、明治三十五年十二月四日に生
 る。大正四年三月横田尋常小學校を卒業し、大正十三年一月徴兵として松江歩兵第六十三聯隊に入隊、翌十四年十一月歸
 休除隊せり。昭和二年一月渡滿、引續き在住活動中、昭和六年九月十八日、滿洲事變勃發するや、十月十五日關東軍司令



と判明せり。

寅一は功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。(渡川)

部事務囑託として採用せられたり。是より先き同事變の勃發と共に、奉天及び長春附近の支那軍は皇軍の一撃に依り潰走
 せりと雖も支那東北軍閥は、錦州に新政府を樹立し防備を固め敗殘兵を糾合して反撃の機を窺ひ且つ錦州一帯に蟠居して
 隱然勢力を持せる老北風、青山等の匪賊を使囑し、我
 が後方を擾亂せんとするの状、顯著なるものありしか
 ば、我が軍は錦州政府襲撃と匪賊の状況偵察のため、
 特志調査班を編成せり。寅一之に加はり同志十四名と
 共に、十月二十日奉天を發して盤山縣に向ひ高坨子に
 於て更に軍旅を整へ十一月初旬、遼河を渡りて三道溝
 に前進せり。それより消息を絶ちたれば極力搜索に力
 めたる結果一行は三道溝に於て老北風、青山等の率ゐ
 る千有餘の匪賊と奮戦力闘せしも、衆寡敵せず重傷の
 まゝ捕へられ盤山縣、九臺子に於て銃殺せられたること

陸軍々屬囑託勳七等

松本德松

松本德松は、福岡縣福岡市小金町の出身にして、父を熊吉母をウメと云ひ、共に故人なり。明治十八年を以て生れ、昭和二年渡滿、奉天因幡町に在住中六年九月十八日、滿洲事變勃發するや、十月十五日關東軍司令部事務囑託に採用せられ同日より諜報及び匪賊狀況偵察に任じたり。



是より先き滿洲事變の突發と共に、奉天及び長春附近の支那軍は皇軍の一撃に依り潰走せりと雖も、支那東北軍閥の錦州に新政府を樹立し防備を固め、敗殘兵を糾合して反撃の機を窺ひ且つ錦州一帯に蟠居して、隠然勢力を恃せる老北風、青山等の匪賊を使喚し我が後方を擾亂せんとするの狀、顯著なるものありしかば、我が軍は錦州政府襲撃と、匪賊の狀況偵察のため、特志調査班を編成せり。德松之れに加はり、同志十四名と共に、十月二十日奉天を出發して盤山縣に向ひ高子に於て、更に軍旅を整へ、十一月初旬遼河を渡りて、三道溝に前進せり。而もそれより消息を絶ち爾後、極力、搜索の結果一行は、三道溝に於て老壯風、青山等の率ゐる千有餘の匪賊と奮闘力闘し、衆寡敵せず一行は重傷のまゝ捕へられ、盤山縣、九臺子に於て銃殺せられたること判明せり。

德松、功に依り勳七等瑞寶章を授け賜はりたり。德松は、下ノ關重砲兵聯隊出身の在郷軍人にして、資性温厚情誼に厚く、能く懇切、人を世話して徹底し、御黨の信望、極めて厚かりき。(澁川)

陸軍々屬囑託勳七等

板倉功郎

板倉功郎は東京府西多摩郡三田村澤井下分の人、父を正己、母を鈴と呼び、明治三十八年六月十一日に生る。大正十三年三月、東京府立工藝學校精密機械科を卒業し、十四年二月、逓信省航空局委託操縦生として、所澤陸軍飛行學校に入校、十月同校を修了し、二等飛行機操縦士、豫備役航空兵伍長に任官せり。同年十一月より昭和四年一月まで、下志津陸軍飛行學校雇員として勤務し、此の間一等飛行機操縦士、二等航空士の免許状を受け、昭和四年一月、日本航空輸送株式會社に入り、福岡支所詰として太刀洗、蔚山間の海峡横斷飛行に従事せり。

昭和六年十二月二十三日よりは關東軍々用定期航空奉天飛行場附操縦士として、滿洲事變に關する勤務に従事し、二十八月關東軍囑託となれり。爾後七年八月八日に亘りては、奉天飛行場に勤務し、關東軍々用定期航空奉天飛行場附操縦士として、軍用定期航空業務に従事して精勵し、二月五日よりは勤務員輸送及び地形偵察に任じて、三月二十一日に及びしが、此の間二月五日には五雙城前進飛行場に地上勤務員を輸送し、三月二十一日には哈爾濱、齊古塔、嘎呀河方面の地形偵察に従事して功あり。三月二十八日には、烏吉密より哈爾濱に至る患者空輸に任じ、四月十日より同三十日に亘りては飛行機改造及び寫眞測量飛行に任じ、七月二十八日より同二十九日に亘りては、馬占山討伐隊にする糧食空輸に任じ、歩兵第十五聯隊に糧食を空中より投下補給し、偉功を奏せり。

八月四日より同十九日に及びても、糧食の空中輸送に任ずること、前後十回に亘りしがその都度、完全に任務を遂行し八月二十日より軍需品、戦傷患者の空輸並に連絡、匪賊偵察に従事し海線守備隊に協力、十數回に亘りて任務を完うし常に精々たる偉勳を収めたり。九月二十七日には、齊々哈爾、滿州里間軍用定期航空操縦士として渡邊少佐以下五名を搭乗せしめ、滿州里飛行場に着陸せしが、時恰も同地に兵變勃發し、危機切迫せるの急報に接し、搭乗將校以下を安全地に移す目的を以て、直ちに引返へせしも途中叛軍の射撃を受け、飛行機の機關部に故障を生ぜし爲め、五徳連子附近に不時着の已むなきに至り、着陸後該地附近にありし張殿九軍の攻撃を受け、搭乗將校等と協力して奮戦せり。而も衆寡敵せず、同地に於て遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至れり。

功に依り勳七等青色桐葉章を授け賜はりたり。

功郎、資性素朴にして恬淡、正義を尙び責任觀急



強く、研究心に富み忍耐力旺盛なりき。(游川)

陸軍々屬囑託勳八等 宮崎 藤助

宮崎藤助は長崎縣南高來郡布津村の出身にして、明治十六年藤壽の男として生れ、母をテイといふ。妻はしげと云ひ、富實、盛實、大三、壽美子、美代子の三男二女あり。明治二十三年九月尋常小學校に入學し、二十七年八月同校を卒業、同八月高等小學校に入學、三十年三月第三學年を修業せり。人格圓滿にして克く學業に勵み友情厚かりき。

明治三十六年徴兵として大村歩兵第四十六聯隊に入營し、日露戦争に従軍して戦功を樹て、除隊後奉天に在りて電氣器具販賣業に従事せしが、後巡查に奉職せり。

昭和六年十月十五日より關東軍司令部事務囑託として、諜報及匪賊の状況偵察に従事す。而して事變突發に際し、奉天及長春附近の支那軍は、皇軍の一撃に依り潰走せりと雖、支那東北軍閥は錦州に新政府を樹立し、防備を固め敗殘兵を糾合して反撃の機を窺ひ、且錦州一帯に蟠居して隱然勢力を保持する老北風、青山等の匪賊を使囑し、我後方を擾亂せんとするの狀顯著なるものあり。偶々錦州政府を襲撃し且之等匪賊の状況偵察の爲、特志調査班を編成せらるゝや、藤助は進んで之に加はり、同志十四名と共に十月二十日盤山縣に向ひ奉天を出發し、高鈍子に於て軍旅を整へ、十一月初旬遼河を渡りて三道溝に前進せしが、突如として消息を絶つに至れり。爾後極力搜索に努めたる結果、倉岡班長と共に一行は三道溝に於て老北風、青山等の率ゐる千有餘の匪賊と奮戦力闘せしも、藤助は遂に重傷を受けて捕へられ、盤山縣九臺子に於て七年三月七日銃殺せられたるものと判明せり。

要之、藤助は倉岡班長と共に錦州政府襲撃の企圖を有し、勇躍其任に就き、不幸雄圖中途にして挫折せりと雖、其盡忠報國の至誠は往時の志士の夫れに比すべく、其勇戦力闘は大和民族の特性を遺憾なく發揮せるものにして、其功績は著大なり。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬囑託勳八等

齋藤佳一

齋藤佳一は、福井縣坂井郡加戸村池上の出身にして、昭和六年十月十五日關東軍司令部事務囑託に採用せられたり。之れより先、昭和六年九月十八日滿洲事變勃發するや、奉天及び長春附近の支那軍は皇軍の一撃に依り潰走せりと雖も、支那東北軍閥の錦州に新政府を樹立して、防備を固く敗殘兵を糾合して反撃の機を窺ひ、且つ錦州一帯に蟠居して隱然勢力を持する老北風、青山等の匪賊を使喚し我が後方を擾亂せんとするの狀顯著なるものあり、依つて錦州政府攻撃及び之等匪賊の狀況偵察のため特志調査班を編成せらるゝや、佳一は之れに加はり、同志十四名と共に、年十月二十日盤山縣に向ひ勇躍奉天を出發し、高坨子（鞍山東方）に於て更に軍旅を整へ、同年十一月初旬遼河を渡りて三道溝（双臺子東六里）に前進せしが突如として消息を絶つに至れり。

爾後極力搜索に力めたる結果、倉岡班長と共に一行は、三道溝に於て老北風、青山等の率ゐる千有餘の匪賊と奮闘力戦せしも、衆寡敵せず佳一は、重傷を受けて捕へられ、盤山縣九臺子に於て、萬解の恨を呑んで銃殺せられたること判明せり。噫々佳一は、倉岡班長と共に錦州政府襲撃の企圖を有し、勇躍其の任に就き、不幸雄圖中道にして挫折せりと雖も、其の盡忠報國の至誠に至りては、往時の志士の夫れに比すべく、其の勇戦力闘は大和民族の特性を遺憾なく發揮せるものと謂ふべく、其の功績顯著なりと認めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

附記、佳一の生年學歴其他に關し遺族に照會したるも回答に接せざるを以て、以上戦歴の概要を記するに止む。（註川）

陸軍々屬囑託正七位勳六等

富永三生

富永三生は熊本縣上益城郡津森村字小谷の出身なり。明治十八年熊本濟々營に入學し、二十三年卒業、直に東京有斐學校に學び、三十七年日露戰役に從軍し功に依り勳八等白色桐葉章を賜はりたり。大正六年十一月奉天の張作霖に招聘せられ、七年二月新彊省に出張し、九年十二月歸朝、此間同年十一月勳七等瑞寶章を授けられ、次いで濟南事變に際し、昭和三年五月三日福田師團長の命に依り、軍使として停戰勸告の任を完うし、功に依り勳七等青色桐葉章を下賜せらる。

六年九月十八日滿洲事變突發するや、二十二日より十一月十五日迄通譯事務囑託として、關東軍參謀部第二課に在りて支那語通譯事務に勤み、其間十月八日より十二日に亘りて哈市に出張し、一般情況を調査せし等功を著せり。翌七年六月一日より第十師團事務通譯囑託を拜命し、司令部參謀部特務班に屬して密偵事務に服し、同日東部線に威を逞うせし兵匪招撫の爲、支那人四名を連行し東部一面坡方面匪賊の頭目に密に連絡し、七月五日極めて困難なる招撫の任を完うせり。又七月二十日より八月三日に亘り軍參謀和知少佐の命に依り、綏化木蘭通化鐵山包地方に於ける馬占山の行動探査の爲、同方面に支那人十名を連行して綏化城支那市街に宿り、専心其任務を遂行し、軍作戦上に多大なる貢獻を致し、八月四日より綏化並に東部線方面の警備に當り、五日より十五日迄和知少佐に同行、綏化に駐屯し馬占山探査中、十日哈市に歸り支那人三十名を連行、齊々哈爾城に入り進んで拉哈訥河に通ずる線に至ると共に、地方に於ける馬占山の討伐に關し、困難なる探査を進め、以て有力なる資料を得、再び東部線の兵匪招撫に任じて之を果し、次で參謀長の命に依り、阿城地方に於て兵匪の行動探査に努め、克く支那人を使役して確實なる諜報を入手し、軍作戦上に寄與せし所多大なり。斯くて十月一日より九年三月末日に至る長期間、吉林省警備に服し、引續き參謀部の命に依り外勤に當り、専ら密偵を

操縦して哈市並に吉林省警備作戦上必要なる諸情報の蒐集を擔當し、尙吉林軍と連絡し省内治安維持確立の爲、常に挺身危険を冒して日夜奔走し、幾多の功を奏せしが、其主なるもの下の如し。七年十一月八日より十五日迄哈市南方地區討伐に加はり、中村支隊の別働隊たる吉林軍團長の指揮する兵二百が、拉林鎮附近の敵を攻撃するに方り、命ぜられて



單身未だ背反圖り難き吉林軍の中に入りて之を指導し、同支隊と行動を共にせしめ、十一月九日正旗屯に於て約二十、正藍旗屯に於て約八十、新甸南方に於て約百二十の敵を撃退し、十三日中村支隊の背陰河附近の戦闘に於ては、王士育屯北方に在りし大刀會匪約百を撃破して之に多大の損害を與へ、以て同支隊の戦闘を有利に遂行せしめて偉功を奏し、翌八年一月第十師團吉林省東境方面の作戦に方りては、始終情報主任參謀に従ひ、第一線に活動して敵情諜知に努め、屢々單身匪賊の蟠居地帯に潜入して匪首の懐柔内情の偵知等に任じ、四日綏芬河附近に在りし關慶祿以下約二十の反軍を歸順せしめて武裝を解除し、又東寧の王德林の討伐に際しては、第一線部隊と共に東寧縣城内に進入して王德林の本部及兵器廠を襲ひ、重要書類及兵器製造具を押收し、越えて五月上旬歩兵第六十三聯隊の長澤大隊の阿汗河右岸地區討伐に於ては、櫻井參謀に従ひ、二日拂曉後前進に際し危険を冒して常に尖兵の前方に在りて状況を諜知し、爾後張發屯、周家、火燎崗附近の敵匪約二百を攻撃する爲、多大の資料を致せ

り。八月三日飛行第十大隊第二中隊田中中尉、西ヶ谷曹長は哈市西北方十軒及口面附近に不時着陸し、匪賊の手に落つるや、四日以来自ら現場附近に出張調査を遂げ、爾後一面に於て匪賊と連絡を断たざる如くし、他方九江匪を懐柔し、之を以て奪還を企圖し、危険を冒して匪首九江及双龍に面會し、田中中尉に連絡を取り、九月二日以後櫻井參謀を案内し、松浦、呼蘭間の地區を數回偵察し、七日夜廟臺子に於て、九江匪の頭目以下七百名を歸順せしめ、十日以後包圍攻撃を行ふ準備を完うし、櫻井參謀と共に十日九江に廟臺子に於て面會し、同夜匪賊連絡者と共に宿營し、十一日包圍圈を縮小せり。然るに同夜半密偵崔子訓西ヶ谷曹長と共に脱出歸來し、匪賊の位置判明せしを以て、三生は櫻井參謀の區署せし工兵憲兵約五十名と共に、終日追撃を續行し、同夜八時半松浦驛西南方一軒に於て、約五十の匪賊に遭遇し、遂に田中中尉に脱出の機會を與へたり。其後匪賊歸順の爲、數回各地に入り、同二十二日及口面に櫻井參謀を案内し、匪賊七百十四名を乗船せしめんとせしに、誤解を生じたる爲不調に終り、十月一日以來之が討伐を實施して撃破四散せしめ、十日迄に二虎平心双龍等百五十名を歸順せしめ、此間數回死地に入り、克く其目的を達成せし功績は偉大なり。翌九年一月中旬より二月中旬に亘れる吉林省冬季討伐の爲、濱田參謀に屬し北境警地隊の討伐に加はり、初め參謀の命を受け饒河虎村兩縣下煙匪區の調査に任じ、自ら富錦に先行し單身匪賊地帯に潜入して煙匪と連絡を圖り、外國人未踏の地帯を踏破して煙匪地帯内の狀況を明にし、全般の討伐計畫を的確ならしめ、次で饒河攻撃に方りては、自ら部隊の先頭に在りて情報の諜知に努め、以て饒河急襲の目的を達成せしめ、直に豫め連絡しある附近の匪賊を懐柔して十二頭目合計約五百の匪賊を歸順せしめ、四百餘挺の銃器を武裝解除し、以て饒河縣下の治安恢復を迅速容易ならしめ、此間屢々單身匪賊地帯に進入して情報の蒐集に任じ、或は蘇國側の情況を明にせし等、偉大なる功績を残せり。次いで二月二十日より三月末日に亘り、一面坡地區隊が同地附近森林匪賊頭目五省等を討伐するや、頭目の逮捕、匪賊の切崩を策し、單身屢々山中匪賊の根據地に潛

入し、約一ヶ月間不眠不休其足跡を辿りて五省を追及し、遂に一面破、石頭河子附近主なる頭目青山我西川双軒新來外三名計七名を逮捕し、五省は之を逸したるも、其連絡先たる木材商を偵知し、潜伏中の五省の妻を逮捕し、同方面の匪賊百五十を全く解消離散せしめ、王維文以下四十を歸順せしめて武装を解除し、森林匪賊處理に一大曙光を與へたる功績は偉大なり。

引續き四月一日より吉林省警備に服し、五省其他の匪賊頭目の踪跡を探索中なりしが、其献身的努力と、事情に精通せる手腕とに係り、年來捕縛壓迫せられし彼等匪賊の怨恨の的となり、遂に同二十一日哈市に於て襲はれ、格闘の末不幸頭部貫通銃創を受けて斃るゝに至れり。

顧みれば、明治三十三年以來我帝國の對國事變には、毎に一身を献げて君國の爲陰に陽に活躍し、其功績實に赫々たりしが、今茲に殉職するに至りしは、誠に皇國の爲惜しき事乍ら、三生等の奮闘努力に依り、新興滿洲國は健全なる發達を遂げつゝあり英靈以て瞑すべし。

此日正七位に叙せられ、勳六等單光旭日章を授け賜はれり。誠に餘榮ありと謂ふべし。
遺族は妻はつ子惟生の一子にして、熊本市池田町新屋敷五四一に現住す。切に將來の多幸を祈る。(加藤)

陸軍々屬囑託勳八等 内田音藏

内田音藏は山口縣豐浦郡田耕村の出身にして、父を太三郎母をウメと云ひ、明治十九年三月二十四日に生る。大正七年頃志を立て、渡滿、奉天に於て菓子營業に従事して成功す。居中君國の爲めに盡さんと念願旺盛なり。昭和六年九月十八

日滿洲事變勃發するや、宿望を果し、赤誠を披瀝するは、此の時にありとし、從軍を志願して、昭和六年十月十五日關東軍司令部事務囑託に採用せられたり。事變の勃發と共に、奉天及び長春附近の支那軍は、皇軍の一撃に依り、潰走せりと雖も、支那東北軍閥は、錦州に新政權を樹立し、防備を固め、敗殘兵を糾合して、反撃の機を窺ひ、且つ錦西一帶に蟠居

して隱然勢力を持せる老北風、青山等の匪賊を使喚し、擾亂せんとするの狀顯著なるものありしかば錦州政府を襲撃し、且つ之等匪賊の狀況偵察のため、特志調査班を編成せらるゝや、音藏は勇躍之れに加はり、同志十四名と共に十月二十日盤山縣に向ひ、奉天を出發し、高坨子に於て更に軍旅を整へ、十一月初旬遼河を渡りて三道溝に前進し、遂に消息を絶つに至れり。

爾後極力搜索に努めたるに、一行三道溝に於て、老北風青山等の率ゐる千有餘の匪賊と奮力闘し、音藏は遂に重傷を受けて捕へられ、盤山縣九臺子に於て、銃



殺せられたること判明せり。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。(渡川)

陸軍々屬囑託勳七等 長尾 信 榮



長尾信榮は青森縣北津輕郡長橋村大字松野木字花笠の出身なり。明治三十九年一月一日與太の男として生れ母をサキと云ふ。大正七年三月松野木尋常小學校を卒へ、九年三月野里農業補習學校を卒業、十二年三月縣立五所川原農學校を卒業せしが、資性濃厚剛毅にして果斷質素を旨とし同情心深く、且正義の爲には死をも辭せざるの概あり。

昭和二年一月徵兵として歩兵第五聯隊に入營、専心軍務に勉勵し其成績優秀にして伍長勤務上等兵に累進し、此間中隊銃劍術競技會に於て二回、中隊並に聯隊特別射撃に於て三回表彰せられ、同三年七月普行證書並に下士適任證を採與せられて歸休除隊せしが、四年十二月志を立て、渡鮮し、朝鮮總督府巡查を拜命せしも、六年五月辭職して渡滿せり。

昭和七年四月一日關東軍司令部事務囑託(判任官待遇)として興安省警備軍に配屬せられ、爾後八月十八日迄蒙古兵教育係に精勤す。而して四月内蒙軍に内争ありて第二第三軍間に於て殊に熾烈なり。時に同軍先任指導官警井少佐要務を以て奉天に赴くに際し、信榮は命ぜられて其留守を守り居りしが、同月二十三日夜第二軍司令韓色旺は、第九軍が攻勢に轉じ

たりと報告し同時に、護衛兵を増加し且彈藥の配給を督促し來れり。信榮は時の形勢情況を觀察して此報告の詐りなるを看破し、斷乎として其要求を拒絶し、身を以て克く彈藥監守の任を果せり。同軍内争擴大の危機に瀕せる際、之を未然に防止し、延いて遂に終息するに至らしめたる動機は、蓋し信榮が細心豪膽に其任を完うせるに依る事大なり。

斯くて八月十九日匪賊約五百我通遼守備隊の後方連絡線たる鄭通線の運行を妨害するや、興安軍々事顧問歩兵少佐齋藤恭平は、其軍隊を以て之を討伐するに決し、信榮を中隊長として蒙古乘馬兵百五十騎を指揮せしむ。討伐隊は午前十一時以後、少數の匪賊を驅逐しつゝ前進し、昆都花部落に於て敵の一團約百と交戦し、之を大席棚部落に擊退せり。同部落は匪賊約五百の占據する地點たりしが、信榮は最左翼中隊長として克く部下を掌握し、指揮適切無隊の行動宜しきを得て敵を包圍し、彈雨下に漸次敵壘に近接し、敵前二百米に達す。折柄戦闘激烈を極めしが、信榮は更に地形を利用して遂に敵前約三十米に肉迫し、率先敵壘に突入せんとするや、敵亦逆襲に轉じ白兵戦を惹起せり。信榮は猛闘自ら二敵を斃し、更に奪戰中、不幸頭部貫通銃創を受け、遂に午後四時二十分壯烈なる戦死を遂げたり。

然れ共此決戦を契機として討伐軍の戦勢大に振ひ、頑強なる敵を擊破驅逐し、之を遠く通遼西方に收退せしめ鄭通線を安全ならしめ得て、其功績甚大なり。

功に依り勳七等青色桐葉章を授け賜はれり

前途有爲の士の戦死は誠に痛惜に堪えざるも、信榮等の奮戦努力は空しからず、今や滿洲國は健全なる發達を遂げつゝあり。英靈以て瞑すべし。(加藤)

陸軍々屬囑託勳八等 緒方末太

緒方末太は、熊本縣菊池郡西合志村大字合生の出身にして、父を滿作、母をサミと云ひ、明治十六年五月二十七日に生る。三十年三月、西部高等小學校を卒業、明治三十七八年戰役には工兵二等兵として、従軍、昭和六年九月十八日滿洲事變勃發するや、同十月十五日關東軍司令部事務囑託に採用せらる。事變突發と共に、奉天及び、長春附近の支那軍は、皇軍の一撃に依り、潰走せりと雖も、支那東北軍閥の錦州に新政府を樹立し、防備を固め、敗殘兵を糾合して、反撃の機會を窺ひ、且つ錦州一帯に蟠居して、隱然勢力を持せる老北風青山等の匪賊を使喚して、我が後方を擾亂せんとするの狀顯著なるものありしかば、我軍は錦州政府襲撃と匪賊の狀況偵察の爲め、特志調査班を編成せり。末太は勇躍之れに加はり同志十四名と共に十月二十日奉天を出發し、盤山縣に向ひ高坨子に於て軍旅を整へ、十一月初旬遼河を渡つて、三道溝に前進せり。それより消息を絶つに至りしが極力搜索に力めたる結果、一行は三道溝に於て老北風青山等の率ゐる、千有餘の匪賊と奮闘力戦し、重傷のまゝ捕へられ盤山縣九臺子に於て銃殺、悲壯の戰死を遂げたること判明せり。

末太功に依り、勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。(濠川)

陸軍々屬囑託 (豫備役陸軍 歩兵少尉) 正八位勳七等 小路万太郎

小路万太郎は、長崎縣佐世保市八幡町の出身にして、父を次郎といふ。明治三十四年二月十三日を以て生れ、四十一年四月一日長崎縣北松浦郡依ヶ浦尋常小學校に入學し、四十四年九月滿洲鐵嶺尋常小學校に轉校、大正四年三月同校高等科

第一學年を修業後、公立大連商業學校に入學し、同十年三月之を卒業せり。十一年十二月一日一年志願兵として、大村歩兵第四十六聯隊に入隊し、十四年三月歩兵少尉に任官、正八位に叙せられたり。後關東廳巡查となれり。

昭和六年九月滿洲事變勃發するや、十一月十二日陸軍囑託として、獨立守備歩兵第一大隊に採用せられ、同十五日第一大隊が、掃蕩隊を編成し、大黒村子附近の兵匪掃蕩のため、午前七時陶家屯發出動するや、掃蕩隊本部通譯として隨行し、



途中克く各部落に於て、情報の蒐集に努めたり。之れが爲め、豫め大黒村附近の情況を確むることを得て、同地への入城を容易ならしめたり。更に入城後は、同地附近の支那要人を集め、軍司令官布告の主旨、並に今次、出動の目的等、通譯説明の任に當り、民心を安定し、皇軍に信頼するの念を高むる上に於て、大いに効果を擧げ、爾後同地に於て編成したる吉田大尉を長とする掃蕩乘馬隊に屬して懷徳の情況偵察に赴く途中午後一時三十分頃大黒村子西北方約二邦里附近に於て、四百名の騎馬賊と交戦するや、下馬攻撃のため凹地に集結せし際、其の方向に對ひ、蔽蔽して、突如乘馬襲撃し來たれる約十餘騎の匪賊に對し、同行せる十二名の支那巡警は逸早く逃走せしも原通譯と共に、勇敢、之れに應戦して牽制中偶々敵彈不幸万太郎に命中し、胸部に貫通銃創を蒙りて遂に壯烈なる死を遂ぐるに至れり。然れども乘馬隊を安全ならしめ、下馬攻撃に準備の餘裕を與へ、爾後の戰鬪に効果

を齎らしたる功績は實に偉大なりと謂ふべきなり。

功に依り勳七等青色桐葉章を授け賜はりたり。

万太郎、資性濃厚孝心、強く寫眞に興味を有せり。遺族は旅順市桃園町一番地に現住せりと。(澁川)

陸軍々屬囑託勳八等 諫山準一



諫山準一は福岡縣浮羽郡大石村大字古川の出身なり。明治四十三年七月四日八百吉の男として生る。母をコノと云ふ。大正十四年三月大石尋常高等小學校高等科を卒へ、四月大石實業公民學校に入學、十六年三月同校を卒業せり。性質濃厚にして熱心、模範青年として青年團長より表彰せらる。

此方面に我軍出動するや、張學良の使囑に依り之を妨害せんとする匪賊の横行は、沿線一帶に亘り頗る甚だしきものあり。

昭和六年九月二十六日滿鐵大官屯驛准備員を拜命せしが、翌七年一月二日より奉山線大凌河驛に勤務し、十日より關東軍事囑託として臨時鐵道線區司令部勤務を命ぜられ、滿洲事變に従事日夜精勵しありしが、

一月二十五日午前四時頃約五百の兵匪大舉して大凌河驛東方約一杆の地點に在る大凌河鐵橋を襲ひ、同四時半頃には其數益々増加し既に千五百を算するに至れり。敵は勢に乗じ愈々猛威を振ひ、電線を切斷し、且つ大凌河驛を包圍攻撃し來る。當時同地の警備に任じありし歩兵第七十三聯隊歩兵大尉中村四郎の率ゐる中隊は、敵の重圍に陥り全く孤立無援の狀態となるや、準一は敢然同隊と行動を共にし、彈雨中或は軍部との連絡に或は彈藥の運搬に、或は中村大尉以下死傷者の續出するに方りては之が手當收容に任ずる等、其勇敢なる行動は眞に準一の崇高なる犠牲的精神の發露にして、鬼神をも哭かしむるものあり。而して敵の抵抗は益々猛烈にして大凌河驛舎の周圍約二百米迄接近し、民家の煉瓦壁或は土壁等に據りて我に猛射を浴びせつゝある中に、克く中隊の行動を援助しありしが、中隊長より連絡の命を受け、驛舎に至りて其命を果し、再び戦線に向はんとする剎那、不幸敵彈左肩より右肩に貫通し、同五時四十分遂に壯烈なる戦死を遂げたり。準一の此勇敢なる行動は友軍の士氣を益々鼓舞し、遂に克く中隊が優勢なる兵匪を撃攘し、鐵道妨害を未然に防遏せしに貢献する所多大にして、其勇戦力闘は眞に大和民族の特性を遺憾なく發揮し、其功績赫々たり。功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。餘榮之に過ぎざるべし。遺族は出身地に居住す。切に多幸を祈る。(加藤)

陸軍々屬囑託勳七等 中山繁樹

中山繁樹は、高知縣高知市北新町の出身にして早く父を失ひ、母雪江に養育せらる。南滿洲鐵道株式會社員たりしが、滿洲事變に依り、陸軍囑託を拜命し、昭和七年九月十一日派遣員として克山に到着し、同地驛長として服務し、九月

十一日より同年十月十八日に亘り、軍事輸送業務に當り、十月一日臨時鐵道線區司令部囑託を命ぜられて齊々哈爾支部に服務す。此間輸送に關する計畫を補助すると共に、専ら輸送の實施に當り、熱心精勵にして、其功績顯著と認められたり。

昭和七年十月十九日克山驛服務中、克山泰安間の電線不通となり、線路の状況不明となるや、自ら列車に搭乘して線路の状況を偵察しつゝ、泰安驛に至り連絡を了りて歸還せり。當時兵匪來襲の噂頻繁にして、實際其の徴候をも認めたるに依り、鐵道従業員は兵營に退避せんことを慫慂したるも、繁樹は之に應せず、當時の泰安驛長利光正路と共に驛と運命を共にせんことを約せり。然るに翌二十六日兵匪の來復するところとなり、同日午前六時頃砲撃と共に兵匪は驛舎に侵入するや、繁樹は他の日本驛員三名と共に拳銃を以て驛を死守し、更に屈することなく對戦實に二時間に亘りしも衆寡敵せず、彈藥盡き、敵彈のため腹部を貫通せられて、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。此の功績優秀なるものと認められ、後日左の恩賞あり。

戦功に依り勳七等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

繁樹性質温順にして剛毅、責任觀念最も旺盛なり。其の最後に於ては、僅に數名を以て幾十倍の敵に對し、泰然自若、其の全力を盡して、遂に驛と運命を共にし、日本男兒のため萬丈の氣焰を吐けり、其の行や實に壯烈にして其の意氣や軒昂、而して其の精神に至りては實に我帝國の國寶たり。筆者に記して茲に至り瞑目、囑託の眞幅を誇りつゝ筆を擱く。

(佐藤)

陸軍々屬囑託勳七等

原 專 司

原專司は大分縣下毛郡和田村字田尻の出身なり。昭和六年十一月十二日獨立守備歩兵第一大隊囑託となりしが、十五日同隊が掃蕩隊を編成し、大黒林子附近の兵匪掃蕩の爲、午前七時陶家屯出發出動に際し、掃蕩隊本部適任として隨行し、途中各部落に於て情報の蒐集に努め、豫め大黒林子附近の状況を確かむる事を得て、同地への入城を容易ならしめたり。入城後は同部落民衆に對し、軍司令官布告の主旨並に今次出動の目的等宣傳の任に當り、民心を安定し皇軍に信賴するの念を高むる上に於て、大に効果を掲げたり。爾後同地に於て編成したる吉田大尉を長とする掃蕩乘馬隊に屬して、懷徳の情況偵察に赴く途中、午後一時三十分頃杜家店附近に於て、約四百の騎馬賊と交戦するや、下馬攻撃の爲凹地に集結せし際、其方向に向ひ蔭蔽して不意に乘馬襲撃し來りし約十餘騎の匪賊に對し、同行せし十二名の支那巡警は逸早く逃走せしも、小路通譯と共に勇敢に之に應戦して牽制中、偶々敵彈の爲頭部に貫通銃創を蒙り、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。然れ共乘馬隊を安全ならしめ、下馬攻撃に準備の餘裕を與へ、爾後の戦闘に効果を齎らせし事大なるものありて、其功績優秀なり。

功に依り勳七等青色桐葉章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬囑託 (滿洲國陸軍 騎兵上尉) 勳八等

木下謙一郎

木下謙一郎は、和歌山縣日高郡御坊町大字島の出身にして木下邦道の長男なり。明治三十五年六月八日に生れ、母を幸と稱す。大正四年三月、横須賀市立尋常高等小學校尋常科を卒業後、横須賀中學校に入校、第二學年修業と同時に名古屋陸軍地方幼年學校を經、大正十一年三月、東京中央幼年學校を卒業し、近衛歩兵第四聯隊に士官候補生として入隊中、同九

月依病除隊となり爾後自宅にありて療養全快し、豊島小學校、大津小學校の代用教員を勤め、昭和二年退職して専檢受驗準備に勉強を続けつゝありしが、昭和六年九月、突如として滿洲事變勃發するや、一片盡忠の宿志止み難く傳手を求めて、昭和七年十月六日滿洲國義勇隊第一軍請安游擊隊に入隊せり。同月二十日、滿洲國騎兵中尉として請安游擊隊第一軍騎兵隊副官を命ぜられ、十二月十日關東軍司令部事務囑託となれり。

これより先き十月十日より東邊道に於ける日滿協同討伐に参加し、請安游擊隊騎兵隊副官として日本軍騎兵第四旅團及び混成第十四旅團の隷下に屬して協同作戰し、討伐の目的を達成せり。殊に十月十一日の小東州附近の戰鬪及び、翌十二日の救兵臺附近の戰鬪に際しては、命令の傳達報告の聚集、各部隊との連絡通報に任じ完全に任務を遂行して功あり。越えて十二月十二日より三角地帯に於ける日滿協同に依る匪賊討伐に参加す。即ち請安游擊隊騎兵隊は日本軍騎兵第二聯隊長の隷下に屬して出動し、謙一郎は游擊隊騎兵隊の副官として前進路附近の搜索に従事し、同十五日に及びしが、此の間終始献身的努力を以て諸業務を遂行し、十五日には莊河縣河北方土城子に達し、該地の搜索を實施し且つ至嚴なる警戒の下に宿營せり。然るに翌十六日午前四時半頃匪賊約五百名突如本部宿舎を襲撃し來れり。隊長は情況視察のため、單身門外に出でたり。謙一郎は自己の危険を忘れ、隊長の危急を救はんとし、軍刀を振つて敵中に飛込み獅子奮迅、忽ち數名を斃せしも衆寡敵せず、顔面及び腹部數ヶ所に創傷を蒙り遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至れり。嗚呼、謙一郎が死地に身を挺して隊長を救はんとしたるは、日本武士道の精華を發揚したるものと云ふべく且つ其の奮闘に依り、宿營地に於ける戰鬪準備の餘裕を得しめ以て、我が部隊をして敵の奇襲に依る全滅の悲運より、免るゝを得しめたる功績は、實に偉大なりと謂ふべきなり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

謙一郎性質豪放、磊落、義侠心極めて厚く幼時より、他人の爲めには喜んで犠牲となるの美風を有せり。柔道及び劍道は共に其の得意とせる所にして、技倆も亦優秀其の捨身の戦法に至りて、屈せざるものは、なかりしと謂ふ。實弟春次郎も亦陸軍騎兵中尉にして、今次の征戦に參與し獨立飛行聯隊附、偵察將校として活躍而かも同一戰場に於て重傷せり。稀なる陣中美談と謂ふべし。(澁川)

陸軍々屬囑託勳八等

岩本 禎藏

岩本禎藏は山口縣吉敷郡宮野村大字宮野下の出身なり。昭和六年九月十八日夜滿洲事變突發當時より滿鐵線路工長として活動し、引續き吉長、四洗、打通、洗昂、齊克、海克の諸線に派遣せられ、匪賊襲撃に依る線路の破壊、軍事輸送の妨害頻々たるに際し、之が建設修理或は警戒等に當り、以て軍の行動を援助せり。次で齊克、海克兩線新設に際し、滿鐵會社より派遣せられ、建設軌道班員として現場に於て華工を指導督勵して活動す。當時蘇炳文、撲炳珊等北滿一帯に亘る兵匪一齊に蜂起し、克山、泰安の襲撃を始めとし龍江、克山間の鐵道は隨所に破壊交通全く杜絶し、嗣へ、軍の手薄に乗じ兵匪益々跳梁を逞しうし、又未曾有の水害あり、繁劇いふべからざるものありしが、克くこの困苦に耐へて任務に邁進し、軍の行動を援助したる功績は甚大なり。

八月十八日以後鐵道第一聯隊が滿鐵從業員を併せ指揮し、海克線建設に従事す。即ち第二大隊を先頭に進め、第七中隊は大隊命令に依り九月二日王奎政山に位置し、後方中隊として軌道材料の輸送に、或は保線作業に従事せしが、偶々十月十九日禎藏は第七中隊長の指揮下に入り、黑龍江省雜布丹屯附近に於て保線作業に奮勵中、午後一時半頃東北方部落より

突如匪賊來襲し、不幸左胸部に貫通銃創を受け、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。身を捨て、鐵道建設に貢献せし功績は、多大なりと云ふべし。

即日滿鐵技師員に進めらる。功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬囑託勳八等 岩瀬常雄

岩瀬常雄は熊本縣八代郡鏡町大字内田の出身なり。昭和六年九月十八日夜滿洲事變突發當時より滿鐵線路方として奮闘し、吉長、四洸、齊克、海克の諸線に派遣せられ、匪賊襲撃に依る線路の破壊、軍事輸送の妨害等頻々たるに際し、之が建設、修理或は警戒等に任じ、以て軍の行動を援助して功あり、次で齊克、海克兩線新設に際し、滿鐵會社より派遣せられ、建設軌道班員として現場に於て華工を指導督勵せり。當時蘇炳文、撲炳珊等北滿一帯に亘る兵匪一齊に蜂起し克山、泰安の襲撃を始めとし龍江、克山間の鐵道は隨所に破壊、交通全く杜絶し、剩へ軍の手薄に乗じ兵匪益々跳梁を逞しうし、又未曾有の水害あり、困難といふべからざるものありしも、克くこれに耐へて其任務に邁進し、軍の行動を援助し功を奏せり。

八月十八日以後鐵道第一聯隊は滿鐵從業員を併せ指揮し、海克線の建設に従事す。第二大隊を先頭に進め、第七中隊は大隊命令に依り九月二日王奎政山に位置し、後方中隊として軌道材料の輸送に或は保線作業に従事せしが、偶々十月十九日常雄は第七中隊長の指揮下に入り、黑龍江省雜布屯附近に於て保線作業に精勵中、午後一時半頃東北方部より突如匪賊來襲し、不幸左胸部に貫通銃創を受け、克山縣鐵道第一聯隊醫務室に於て加療せしも其甲斐なく、遂に二十一日戦傷死

を遂ぐるに至れり。身を捧げ鐵道建設に寄與せし功績は甚だ大なり。

即日滿鐵員員に進めらる。功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬事務囑託勳八等 吉川龜松

吉川龜松は石川縣石川郡松任町古城町の出身なり。昭和九年一月二十一日滿洲國靖安軍囑託として少尉の待遇を受け、同日二十八日より關東軍司令部事務囑託となり、軍政部服務を拜命、爾後二月上旬に亘り、第十師團の隷下に入り、靖安軍密偵長として吉林省大討伐に参加す。靖安軍右縱隊長は樺甸縣第五區大捕財河に在りし、匪首王桂成を歸順せしめんと工作中、王は向背を決せず且つ所在を晦ましたるを以て、吉川囑託は之が搜索の爲、二月三日滿人兵三名を指揮し王の留守宅を襲ひしに、王の部下五名潜伏し在りて吉川囑託を見るや、拳銃を發射しつゝ逃走を企てしも、勇敢に追撃して之を捕縛し、糺命して王の所在を明ならしめ、遂に之を歸順せしめし基を拓き、附近の肅正に大なる貢獻を致せり。

二月上旬より下旬に亘りては密偵長として情報蒐集に努力し、密偵を使用して敵地の匪情を明にして隊長の作戰上に好個の憑據を與へしが、二十三日平川將校と共に情報蒐集の爲、部隊に先行し磐石縣蘭家網東方約二軒の地點に到るや、土民の舉動疑はしきものありしを以て、囑託は同地に進入調査せんとせしに、部落内に潜伏せし占國軍匪趙營長の指揮する約四十名より猛射を受けしを以て、平川將校外一名と共に直に應戦、孤軍奮闘せしも、遂に左腰部及び右季肋部貫通銃創を受け、茲に壯烈なる戦死を遂げたり。身を捨て、任務に邁進せるは、是克く大和魂を發揚せる者と云ふべし。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬囑託勳八等 小林 正生

小林正生は福井縣豆羽郡酒生村の出身にして、明治三十二年三月二十五日故金造の二男に生れ、母をはるといふ、妻あり、つね子と云ひ、ますこ、稔の二兒を擧ぐ。正生二歳にして父に死別し、母の手に養育せられ、酒生村小學校卒業後、家に在りて克く母に孝養を盡し、農業に勵み、温厚にして模範青年たりき。

大正九年十二月徴兵として鯖江歩兵第三十六聯隊に入隊、翌十年上等兵に進級、西伯利亞に出征、十一年伍長に任官、功により金百圓下賜せられ、翌十二年南滿洲新城子に渡り、兄晴樹の經營せる農場に於て活動し、妻帯後一面坡に移住し、努力五個年、同地日本在留民會評議員に推舉せられ、屢々表彰を受く。昭和四年十二月再び新城子に轉じて農業に従事し、亦同地居留民會副會長に選ばれ、同地の發展を圖れり。

昭和六年九月滿洲事變勃發するや、翌七年一月十九日通譯事務囑託として歩兵第七十六聯隊に採用せられ、先づ第三中隊に配屬せられ、四月一日迄連山、錦州を順次守備し、始終至誠一點の私心なく、其卓絶せる語學と積極的な行動とを以て、中隊の守備勤務を遺憾なく遂行せしめたり。この間二月中旬梨樹溝、白石咀門の討伐に於ては、暗夜人煙稀なる險阻の山地行軍並に討伐に當り、常に勇躍部隊の先頭に行進して其嚮導となり、又部落内の掃匪に際しては、單身勇敢に家屋内に突進し、中隊の討伐掃蕩を容易ならしめ、又三月中旬沈家臺附近の討伐に加はり活動せしが、殊に中隊獨力にて小煙盤溝の掃蕩決行に方りては、始終沈着剛毅、事を處し通譯として其任を全うし、下旬新臺門附近、東岔溝及黒水河、狗河々谷附近の討伐に在りても、第一線に立ちて活動せり、是より先三月二日錦州より、蛟蟻屯に至る進路、並に同地附近の地形偵察に従ひ、變裝し其巧なる支那語に依り詳細なる偵察を遂げ、太嶺子附近に於て自衛團の猛射を受けしも、勇敢に

行動して克く危地を脱して其任を果し、以て翌日大隊の攻撃に資せし事大にして、優秀なる功を奏せり。

四月二日より第十中隊に屬し、前所の守備に服し、常に積極的に而かも迅速確實に服務し、同月二十八日より五月十一日に亘りて一面坡警備間、匪賊四周に蟠居し、危険なる中に在りて、連日討伐掃蕩に多忙なるに始終警備並に治安恢復の爲地方關係、諸方面との折衝其他に任ぜしが、曾て同地に約五個年間居住せしに依り、同地の事情に通じ居るを以て、警備隊の任務達成に貢献せり。此間三十日一面坡西南方高地附近の戦闘に参加し、勇敢なる積極的行動に依り、保衛隊の連絡等迅速且適切にして、中隊の戦闘を有利に展開せしめたり。

五月十二日、十二段兒附近の討伐道案内として、尖兵中隊たる第九中隊に臨時配屬せられ、午前三時四十分一面坡西方約二軒鞍部附近に於て、既に道路上及各周圍の稜線を占領しある約百五十の匪賊と不意に遭遇し、敵陣地前約五七米に於て俄然猛射を受く。當時尖兵長と同行し尖兵の前方に在りて奮戦中の正生は、道路北方高地より射撃せし敵彈の爲、左胸部に盲管銃創を受け、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。

正生は永く一面坡に在住し、其附近の地形に通曉しあると、軍人としての經驗に基き、勇敢積極的に斥候を輔佐推進し、意見を上申して兵尖長の動作に有効なる憑據を與ふる等、克く在郷軍人の本分を遂行し、尖兵の士氣を鼓舞し、警備隊をして速に敵陣地を占領して敵全線の退却を開始するに至らしめ、正生の木戦闘緒戦に於ける活動と其犠牲とは、友軍全員の士氣を鼓舞し、通譯として、又在郷軍人として、將又曾て一面坡在住邦人として、誠に意義ある犠牲者にして其功績偉大なり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。誠に餘榮ありと云ふべく、英靈以て冥すべし。(加藤)

陸軍々屬囑託勳八等

古川年定



古川年定は岡山縣淺口郡金光町大字大谷の出身にして明治二十六年十二月四日芳吾の長男に生る。妻を久枝と云ひ、文啓、清、うめ子、みや子の二男二女あり。三和村透南高等小學校を卒業し、大正五年より岡山憲兵隊に書記として奉職する事二年にして、七年渡滿し十一月南滿洲鐵道株式會社に入社し、安東驛荷物係として精勵し居りしが、滿洲事變に際し、昭和七年九月十四日より派遣員として泰安驛に在りて軍事輸送に従事す。

斯くて十月一日臨時鐵道線區司令部囑託を命ぜられ、齊々哈爾支部服務となり、依然泰安驛に在りて服務中、同中旬に至るや兵匪襲來の噂頻々にして、避難を慫慂せられしも驛務の重要なるを自覺して、之に應ぜず、二十日午前六時優勢なる兵匪砲撃と共に驛舎内に侵入するや、驛長利光正路の命を奉じ、拳銃を以て應戦死守する事、實に二時間に及びしも、衆寡敵せず遂に彈丸盡き、身に數彈を被り、驛と運命を共にし、茲に壯烈なる戦死を遂げたり。驛員として衆敵と奮戦猛闘し、遂に職に殉するに至りしは、克く大和魂を發揮せる者なり。功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。誠に餘榮ありと謂ふべし。

年定は性質温順にして責任觀念強く、會社に勤続する事十五年、始終精勵し模範社員として推賞せられたり(加藤)

陸軍々屬囑託勳八等

實崎三次

實崎三次は大分縣別府市大字濱臨の出身なり。明治十四年二月四日生なり。明治三十三年三月同縣國東私立中學習說校准教員養成所卒業後、郷里に在りて前後五年間教職に勤み、次いで門司市役所財務課に奉職、又轉じて日本救濟會門司長崎兩出張所に勤務し居りしが、父の病氣危篤に依り辭職歸國し、大正四年五月より別府市宿屋業組合事務所の書記となり、次いで同市泉都自動車株式會社の支配人となり、又九年三月より同縣九州沖繩協進會協賛會書記たる事三個月にして、營口に渡りて雜貨商を營み、能く居留民國の事業に参劃し、終始帝國の立場を顧慮して活動し、報國の念強く、温順にして衆人の信任厚く、居留民國の重鎮たりき。

斯くて昭和六年九月滿洲事變突發するや、奉天及長春附近の支那軍は皇軍の一撃に依り潰走せりと雖、支那東北軍閥は新州に新政府を樹立し、防備を固め敗殘兵を糾合して反撃の機を窺ひ、且金州一帯に蟠居して隱然勢力を持つる老北風、青山等の匪賊を使喚し、我後方を攪亂せんとするの狀顯著なるものあり。偶々金州政府を襲撃し、且つ之等匪賊の狀況偵察の爲、特志調査班を編成せらるゝや、實崎は同年十月十五日より、關東軍司令部事務囑託として、同志十四名と共に二十日盤山縣に向ひ奉天を出發し、高埤子に於て更に軍旅を整へ、十一月初旬遼河を渡りて三道溝に前進せしが、突如として消息を絶つに至れり。爾後極力搜索に努めし結果、倉岡班長と共に一行は三道溝に於て老北風、青山等の率ゐる千有餘の匪賊と奮戦力闘せしも、實崎は遂に重傷を受けて捕へられ、盤山縣九臺子に於て銃殺せられたる事判明せり。

遺族は妻まつ、長女千代子なり。
功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬事務囑託勳八等 上坂慶治

上坂慶治は兵庫縣川邊郡東谷村山下字魚屋町の出身なり。昭和七年十一月二十五日滿洲國靖安軍歩兵少尉に任官、翌八年三月下旬熱河作戦進捗し、皇軍長城線に進出するや、後方警備の爲日本軍と協力し奉天線に出動中、溝帮子站に在りて日本軍獨立守備隊と協同して滿洲國建國軍の武裝解除並に鐵道輸送の警備に服し、機關槍連排長として滿人部下を指導し其任を果せり。

又獨立守備隊岩田部隊と協同し石門寨の支那正規軍攻撃の爲、三月末日夜溝帮子站を出發し、惡路を急行軍して四月一日拂曉總攻撃を行ふや、第一線排長として彈雨中沈着剛膽に部下を督勵し、最も有効に機關銃の威力を發揮し、敵に多大の損害を與へたり。

熱河省東部肅正の爲、阜新に向ひ新立屯より前進中、四月六日哈利器附近に於て擊破せる敵匪を追撃し、七日哈把氣より前衛と共に行動し七家市に向ひ前進中、敵匪に追及するや機關銃の威力を發揮して敵に大打撃を加へ、遂に之を擊退し阜新占領を容易ならしめしが、阜新縣入城後附近部落には尙ほ多數匪賊殘存し之を警戒中、十日午前四時約二千の匪賊大舉して阜新に來襲するや、機關銃隊を指揮して反撃し、克く敵勢を制壓し之を西北方に擊退するに至らしめし等、幾多の功を奏せり。

翌九年一月二十八日關東軍司令部事務囑託軍政部服務を拜命、爾後日本軍吉林南部警備隊長佐藤中將の隸下に在りて吉磐、安敦地區討伐に出動するや、靖安軍本部に在りて人馬の給養を擔任し、其作戰行動に遺憾なからしめしが、二月二十三日黑石鎮朝陽鎮間討匪の爲輝法江に向ひ前進中、上坂は平川、吉川兩囑託と共に鯨魚溝より蘭家網に至る間の匪情偵察並に兵要資源調査及び設營指導の任務を以て、滿人軍需官二名を伴ひ部隊より先行し、輝法河上を前進中、蘭家網東方約二軒附近に於て部落内に潛伏せし占國軍匪趙營長の指揮せる約四十名より攻撃包圍せらるゝや、兩囑託と共に敵中に突入し、奮闘數敵を殺傷せしが、不幸左大腿部貫通及び右眼管銃創を受け、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。挺身、衆敵の中に突入格闘、遂に殲る。是克く皇國軍人精神を發揚せる者と云ふべし。
即日滿洲國歩兵中尉に進めらる。功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬事務囑託勳八等 坂田與一郎

坂田與一郎は兵庫縣武庫郡大庄村東字弓場ノ先の出身なり。昭和八年十二月十三日滿洲國陸軍歩兵上士となり、吉林省警備司令部に配屬、同日より滿洲事變に従事し、日本軍と協同作戰を以て綏寧地區匪賊掃蕩の爲密山に出動中、十二月二十日匪首高玉山の、參謀長陳平林の率ゐる匪賊約五百騎楊木崗を襲撃し、同地壯丁團の武裝を解除し、掠奪を志にせりと之の急報に接し、軍事教官向日砲兵少佐の命に依り、第四旅附滿洲國歩兵少尉坂口純男と共に、密山駐屯の吉林軍の一小隊及び警察隊若干を率ゐる暗夜急行し、二十一日拂曉前楊木崗に到着直に地形敵情を偵察の後、敢然攻撃を開始せり。
然るに敵は我に五倍する優勢を恃みて出撃し、包圍の態勢に出でたるを以て、吉林軍は漸次苦境に陥り、戦況憂ふべき

状態を呈するに至りしが、坂田は坂口少尉と呼應して部下を叱咤激勵し、猛然敵の一方を撃破し以て其鋭鋒を挫折し、漸くにして吉林騎兵第四旅第十二團増援に来るや、再び攻撃に轉じて奮戦、遂に敵を潰走せしめ楊木崗を奪回するを得、其沈毅剛膽克く吉林軍を掌握し、其士氣の核心となり、以て戦勝に導きしものにして、其功績甚だ大なり。

翌九年一月四日關東軍司令部事務囑託、軍政部服務を拜命、同日虎林に在る吉林省綏寧地區顧問處に配屬、二十八日虎林に宿營中、高玉山は部下匪賊約千六百夜陰に乘じ、撃虎林を奇襲し之を奪取せんと、其約千三百を以て城外正面を包圍し、約三百を間道より進め谷地を利用して密に城内に侵入し、午前四時不意に吉林軍第十四團本部を襲撃し之を占領するや、直に顧問處を包圍亂入せんとす。當夜同處に宿營中なりし坂田、日下兩囑託及び其部下吉林軍士兵四名は敵襲を知るや、直に出で、機關銃を操作し、殺到せる敵と勇戦奮闘、死守防戦し、顧問處前に屍山をなし、敵撃退後屍體實に七十を算す。以て著しく敵の氣勢を奪ひ、且つ其企圖を挫き、遂に同處を抜く能はざらしめ、健闘實に五時間、此激戦中團長以下死傷五十四、日下上尉重傷を負ひ、坂田囑託亦不幸敵彈の爲遂に壯烈なる戦死を遂げたり。坂田等の奮戦猛闘は大に味方の士氣を鼓舞激勵し、遂に敵の虎林奪取を断念せしめ、無慮二百五十三の屍體を遺棄して敗退するに至らしめ、其功績大なりと云ふべし。

即日滿洲國陸軍歩兵少尉に進めらる。功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬囑託勳七等

利光正路

利光正路は、大分縣速見郡日出町の人にして、豫備役陸軍歩兵伍長なり。昭和七年滿洲事件に關し、同年六月二十一日

より關東軍司令部囑託を命ぜられ、同日泰安驛に到着して、同驛々長の任務に服し、主として皇軍の輸送に關する事務に執掌し、其の功績顯著なり。斯くて同七年九月十日十一日の兩日は、第十四師團の内地歸還部隊の輸送業務に當り、熱心精勵にして其任務を完うし、次で九月三十日に亘り、各種の軍事輸送に參與し、此間の勤勞多大なるものあり。同年十月十五日より同十九日に亘りては、齊克線の補修を督し、迅速に之れが開通を得て其功勞を認められたり。以上の功績を綜合して、優秀なるものと認めらる。

同七年十月中旬頃、泰安驛附近に於て、匪賊來襲の噂高かりし爲、驛の従業員は一時兵營に避難を勧められたるも、正路は驛業務の重要性に鑑み、其の任地を離るゝことを肯せず、毅然として其の業務を繼續したりしが、十月二十日優勢なる匪賊の包圍攻撃する所となり、兵匪は同日午前六時頃、砲撃と共に驛舎に侵入せり。此時正路は三名の日本驛員と共に拳銃を以て抗戦し、頑強に抵抗を續くること約二時間に亘りたるも、衆寡敵せず、彈藥も亦全く之を使用し盡し、胸部に貫通銃創を受けて、驛と運命を共にし、壯烈なる戦死を遂げたり。功績優秀と認められ、後日左の恩賞あり。

戦功に依り勳七等に叙し青色桐葉章を授け賜はりたり。

正路性質温厚にして剛勇なり。事に當りて熱心奮勵、一事を貫徹せざれば已まざるの概あり。又進んで難事に當る美風を有せり。而して其の最後に於ては、責任の重大なるを知りて、一身の安危を顧るの暇あらず、遂に其の任地を死守して職務に殉じたり。犠牲的精神の旺盛なること斯の如く、眞に懦夫をして慚死せしむるに足る。嗚呼此の眞個日本男兒今や亡し。痛恨切々。嗟々。(佐藤)

陸軍々屬囑託勳八等 小林正之

小林正之は、茨城縣那珂郡木崎村大字北酒出の出身にして、滿洲鐵道株式會社々員たりしが、昭和七年九月一日軍囑託を命ぜられ、同日より臨時鐵道線區司令部哈爾濱支部勤務として綏化線區派出所に在りて服務せり。然して努敏河橋梁新設工事の現場に於て、同工事に附帶せる測量を爲し、又は工事の監督に任じ、終始一貫熱心眞面目にして、日夜精勵工事の完成を圖りたり。

同七年九月二十五日夜半より、翌二十六日拂曉に亘り、康金井驛以南に於て、鐵道及電線數箇所、匪賊の爲破壊せられ、列車不通と同時に通信全く杜絶の状態となるや、正之は作業員の指揮者として、歩兵第五十聯隊第一中隊長加島大尉の令下に入り、裝甲列車に同乗して、二十六日午後一時綏化を出發し、午後三時過ぎ被害現場に到着し、正之は線路工二十三名を指揮し、復舊工事の作業を開始せり。偶々被害場所の東方約五百米の無名部落に乘馬匪賊約三百騎潛入せるを以て、加島大尉は直に之を攻撃せんとし、其部隊の一部を被害現場に残置し、主力を以て裝甲列車に依り北上し、將に匪賊に向て砲撃を開始せんとしたる際、匪賊は被害現場に向て發砲せしを以て、工夫は修理用器材を現場に放棄して將に逃走せんとせり。此時正之叱咤之を制止し、且激勵しつゝ敵彈下に在りて復舊作業を續行せり。加島大尉は被害現場に向て匪賊の南下中なるを認め、直に裝甲列車を以て引返し、被害現場に歸着するや、正之は直に敵情を大尉に報告し、敵の現在する位置を指示中、沈家驛方向より飛來せる敵の一彈は正之の右胸部を貫通し、遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至れり。時に午後三時四十三分なり。正之の壯烈なる動作は將兵以下の志氣を鼓舞し、大尉は直に敵に猛射を加へ之を撃退すると共に、工事作業を續行し遂に修理を完成し、正之の遺骸を收容して歸還したり。正之、功績優秀と認められ、後日左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

正之性質温順にして氣概に富み、常に其の責任を重んじ、任務遂行の爲には水火をも辭せざるの概あり。上官の信用特に厚かりき。(佐藤)

陸軍々屬囑託勳七等 岩村佑治

岩村佑治は、廣島縣芦品郡驛家村萬能倉の人にして、父を武雄、母をおくまと云ひ、明治三十八年八月十九日生なり。驛家尋常高等小學校高等科を卒業、次で神戸以文館卒業、大正三年三月兵庫縣立工業學校電氣機械科を卒業し、京都奥村電氣會社に勤務したるも、昭和一年大刀流飛行第四聯隊に入營し、同二年末伍長に任ぜられて退營す。昭和四年四月逓信省飛行機關手依托生となり、昭和六年三月卒業、日本航空會社勤務となり、後奉天支所員に轉じ、次で滿洲航空株式會社に入社し、昭和七年一月十五日より關東軍々用定期航空奉天飛行場附機關士として、滿洲事變の勤務に従事せり。

昭和七年一月二十一日より三月十一日の間、勅語傳達のため侍從武官搭乘奉天——金州——打虎山の飛行に方り、操縦に任じて任務を完うし、同年六月通河警備隊、七月中楊樹附近戰闘の戦傷者を空中輸送し、七月八月の兩月間は馬占山討伐に参加し、糧食補給並に連絡勤務に服すること前後十一回、八月九月の交は瀋海線守備隊に協力し、常に難局に當りて格勳精勵、其任務を完うし此間の功績優秀とし、九月二十六日關東軍囑託を命ぜらる。

昭和七年九月二十七日齊々哈爾濱、滿定里間軍用定期航空機關士として、渡邊少佐以下五名を搭乘し滿洲里飛行場に着陸せしが、佐山駐在員の報告に依り同地に兵變あり危機切迫しあるを知り、佐山駐在員をも同乗せしめ、重任を帯べる渡邊

少佐以下保護の責任上、直に引返したるも途中札蘭屯嶺子山附近に於て、蘇炳文配下部隊の射撃を受け、機關部に故障を生じ、五徳連子附近に不時着陸の已むなきに至り、着陸後敵匪の攻撃を受け、搭乗將校等と共に奮戦して、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。佑治、技倆特に優秀、就任以來危険なる第一線の重要任務に服し、常に其任務を完うせり、今次も特に



選まれて此重任に服し、其の責任の重大なるに鑑み、身命を賭して奮闘したる行爲は、其旺盛なる犠牲的精神の發露ならずんばあらず、功績特に優秀と認められ左の恩賞あり。

戦功に依り勳七等に叙し青色桐葉章を授け賜はりたり。

佑治性質温厚にして剛毅、寡黙沈忍なり、父母に至孝、同胞を懐ふの情深く、弱を扶け強を挫くの特性を有する一方にはハイモニカを能くし、美文短歌に巧なりき。幼時父母に秘して多額の資を以て、漢英和の辭書を購入す、蓋し教師の教へに満足せざりしものなり、父母責むれ共答へず、後日に至り事情開明せりと、其の篤學と熱烈驚嘆に値す。其他美談善行多きも紙數自ら限り、悉く之を記述し能はざるを遺憾とす、七年十二月二十二日郷里に於て村葬行はれ、參謀總長、陸相、關東軍司令官、滿洲航空會社等より贈られたる花環、式場狭しと飾られ、官民多數の會葬あり、近來稀なる盛儀なりしと、關東軍司令官武藤大將弔辭の一節左の如し。

抑々叛將蘇炳文の行動は天人共に許さざる所、而して滿洲里事件の解決は滿洲史上の一異彩たり、君は本事件當初の犠牲者として事件解決のため殉節せられたるなり。興安嶺下誰か其壯烈に泣かざらん、殉節後七十餘日結氷を碎ひて君の忠骨を拾ひ今その英靈を弔ふ感慨切々として胸に迫り恨恨に堪へざるなり庶幾くば瞑せよ(佐藤)

陸軍々屬囑託勳八等 廣瀬吉盛

廣瀬吉盛は、鹿兒島縣始良郡福山村の出身にして、父を製炭八、母をイトと云ひ、明治二十七年六月二十五日生なり。明治四十二年三月福山尋常高等小學校を卒業し、大正五年十二月滿洲鐵道會社に入社、奉天に在りて勤務し、昭和六年八月海城電業工長を拜命し服務中、同七年十一月二十五日軍の事務囑託として臨時鐵道線區司令部に配屬せられ、同日より事變に關する業務に従事せり。

昭和七年十一月二十六日より同年十二月二十八日に亘り大興安嶺方面に出動す。十一月中旬以降呼倫貝爾附近の情況急を告ぐるや、單は之が討伐に出動するに方り吉盛は鐵道修理班に加はりて、専ら通信線の確保に任じ、十二月二日朱家崗西方地區及び哈拉蘇、傳克圖附近に於ける電信の破壊十數所を補修し、軍の通信實施に支障なきを得せしめ、次で臨時調査班に屬して滿洲里に進出し、鐵道電信の調査を行ひ軍將來のため、有力なる作戰資料を提供し功績優秀なり。

同七年十二月二十九日より翌八年一月六日に亘り、吉林省東境方面討伐に参加して活動せり。即ち第十師團中東東部線國境方面作戰のため出動するに方り、哈市線區司令部長の指揮下に入りて、電信電話線の架設補修等に従ひ、熱心精勵にして其の任務を完うし、軍の作戰指導を便ならしめたり。殊に一月六日匪賊のため破壊せられたる鐵道電信線修理のた

め、線區司令部員青村少佐の指揮を以て、修理班長として自ら線路を點検するため、装甲單車に乗り午前八時下城子驛を出發、遂次作業をなしつつ前進し、午前十一時三十分頃下城子北方約十八軒の地點に差しかゝるや、敗殘兵匪の襲撃する所となり腹部に貫通銃剣を受け「修理を完了せずして斃るるは残念だ」と叫びつゝ壯烈なる戦死を遂げたり。然れ共吉



盛の献身的努力に依り、午後二時頃電話線の修理完成し、線區司令部の業務を圓滑ならしめたるのみならず、師團の通信連絡上裨益する所甚大にして、其功績優秀と認められ、同日陸軍技術員を拜命し、後左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

吉盛性温順にして責任觀念強く、常に業務に精勵す。妻モイと云ひ、一子を遺し良信と呼び、旅順高砂町に現住す、吉盛滿洲里に向て出動するに方り、良信宛一信を寄せ、第一線に出動時の決意を示し、且つ中學校入學試験にパスする様に將來を勵ましたりと、良信よ父の遺訓を嚴守し、立派に立身して國事に盡せ、是れ孝道の最大なるべし。(佐藤)

陸軍々屬囑託勳八等 河部熊市

河部熊市は、宮城縣栗原郡尾松村稻屋敷中屋敷の出身にして、陸軍在郷上等兵なり。父を熊次郎、母をしげと云ひ、明治四十年五月十五日生なり。故ありて養父母養吉、志めに養はる。大正十二年四月郷里尋常高等小學校を卒業し、後年入營して上等兵となり滿期除隊せり。昭和六年渡滿し警官に採用せられしも辭任して同年四月二十三日吉林鐵道守備隊に教官として應聘し、翌七年五月一日關東軍司令部囑託を命ぜらる。七年四月中旬より同年六月中旬に亘りて哈長線守備、長春街及び五常附近の戰闘に参加す。即ち四月中旬大川中尉の指揮する獨立騎兵隊(六百名)の專屬副官として、中尉の側近に従ひ中尉の分身者として、困難なる吉林軍の指導に任じ、時に其の得意とする機關銃を操縦して範を示し、隊内幹部以下の畏敬する所となる。殊に六月中劉寶麟の指揮する滿洲軍騎兵第一旅を援助し、五常に於て海龍、張大成を頭目とする匪賊約三千を潰走せしめ、大勝を博し大川騎兵隊の勇名を轟したる等、其の戦功顯著なり。

昭和七年六月二十二日双楡樹方面の討伐のため、大川支隊として五百騎を以て出動するに方り、同じく支隊副官として参加す。同日拂曉靠山屯附近に於て、優勢なる敵と會戦し緒戦に於ては勝利を得て捕虜二名大行李車輛二馬四十三頭を鹵獲したるも、敵は漸次其の兵力を増加し遂に二千を越へ、遂に敵のために包圍せられ戦況遂次我に非にして死傷續出し、支隊長は壯烈なる戦死を遂げたり。熊市は支隊長の側近にありて奮戦力闘せしも、敵兵愈々肉薄するに及び拳銃を發射して應戦中、拳銃故障を生じたるを以て之を投げ捨て、格闘せんと衆敵を目がけて猛進せるも、腹部胸部其他に多數の弾丸を受けて仆れしが、少時にして再び起き上り、更に前進して敵に取り組みたるも力盡きて敵に反撃せられ、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。功績優秀と認めらる。

戦功に依り勲八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

熊市性質剛毅にして寡黙なり。幼時より軍人たらんことを望みたり。國境警備の警官等にては満足を得ず、其の盡忠報國の念は常に燃ゆるが如く、進んで身を大川騎兵隊に投じ、身命を國に報ぜんとするの堅き決意は夙に胸底に藏せられたるものの如し。六月十五日認め郷里の父に寄せたる書簡の終りに左の句あり。以て其の平常と決意とを窺ふに足るべし。是ぞ熊市最後の絶筆となれり。

大君の小作田作り作男

御年貢拂ふ秋は來し今

熊市の葬儀に際しては滿洲國執政、同國務總理、關係各國團隊長其他より多數の弔辭を寄せられ、弔旗花輪等の供へと共に多數の會葬者あり稀なる盛儀なりしと言ふ。家門の光榮とす。熊市たる者誤して可なり。(佐藤)

陸軍々屬囑託勳六等 村田 岩作

村田岩作は、静岡縣駿東郡大岡村の出身にして、退役陸軍歩兵特務曹長なり。父を鐵造、母をいとと云ひ明治二十二年六月一日生る。明治三十六年郷里の小學校を卒業し、明治四十二年歩兵第三十四聯隊に入營、大正元年果進して歩兵軍曹となり、大正三年四月の交青島戰に参加、次で青島守備に任じ戦功に依り勳七等青色桐葉章を授け賜はりたり。大正七年曹長に任ぜられ、同十年滿洲鐵嶺に駐劄、同十年十二月歩兵特務曹長に任じ依願退職す。大正十二年鐵嶺居留民會書記となり在郷軍人會幹部たりしが、昭和元年辭職し爾後自作農として致々營々相當の成功を挙げ居たり。昭和七年四月鐵嶺保

安隊教官を委囑せられ、次で五月二十六日軍囑託を命ぜられ、獨立守備歩兵第五大隊に配屬せられたり。

是より曩き滿洲事變勃發以降匪賊の鐵嶺を覗ふこと數々なり。岩作同地義勇團の幹部となりて之が指導に専心す。四月鐵嶺縣保安隊指導教官兼獨立守備隊囑託として就任するや、家庭を顧みるの途なく寢食を忘れて縣内の治安維持に盡瘁し、保安隊員も其熱誠に感激せり。五月二十二日匪賊頭目金山好が開原縣より鐵嶺縣二道溝に侵入するや、翌二十三日保安隊員二百餘名を引率して出動し、多大の損害を與へ



て之を撃退し、剩へ數名の捕虜を得て二十五日歸還し、意氣衝天の概あり。然るに翌二十六日金山好は開原縣松山堡に侵入し、賊團を糾合して益々其の兵力を増加し鐵嶺縣を襲撃の計畫ありとの情報に接し、岩作は殆ど休憩の暇もなく、今にして之を殲滅せざれば將來鐵嶺縣の治安を擾亂せらるゝ慮あり。宜しく徹底的に討伐を決行すべしと決意し、二十六日保安部隊員百三十名を率ひて再び出動せり。此時守備隊長より鐵嶺、開原縣境地附近の匪賊搜索の任務を受けたり。斯くて岩作は至誠燃るが如く晝夜兼行して松嶺山に到着せるに、匪賊團は鐵嶺縣北部に之なきことを確かめて之を報告し、次で鄭家屯の山中に有力なる匪賊あるを知り、保安隊は直に之を攻撃するに決す。岩作部下を激勵しつつ敵陣に近逼するや、敵も亦直に應戦し頑強なる抵抗を試む。岩作敵彈雨飛の下に泰然自若として部下を指揮し、將に敵の陣地を突破せんとし

たる利那敵の一弾は岩作に命中し、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。
岩作戦功に依り勳六等に叙し單光旭日章を授け賜はりたり。

岩作性質温順にして剛毅なり。妻をひると云ひ、美和子、太難、玉江、鶴子、水江の五子を遺し、鐵嶺宮島町七ノ一に現住す。ひろ賢にして氣慨あり。克く家庭を整理監督し、夫をして後顧の憂なからしめたり。忠勇顯彰會の照會に應じ、亡夫出勤前後の状況を詳報し越せり。行文滞りなく事態頗る明瞭、本記事の大部は之に依りたるものなり。其の末文に左の如く記したり。

「朝に軍服姿勇ましき征途を送り、夕邊には白骨となりて歸るを迎ふ。……嗚人間の運命程はかなきものはなし。……自分の意志の通りに働き皇國のため戦死を遂げし夫は嗚かし満足して死に就きし事と思はれます。(中略)内地の兄弟は早く滿洲を引上げて歸國する様に勧めてくれますが私としては夫の血を流した土地と思へば離れられぬ氣が致します。又鐵嶺には夫が五箇年間汗によつて築き上げた十八町歩の農場があります。私は夫の意志をついで鐵嶺に止まり事業を繼續しながら子女の教育をなすべく堅き決心を致して居ります。」

何ぞ其の意氣の壯なるや、此の如くにして眞に軍人の妻女たるに恥ぢずと言ふべし。幸に素志を貫徹し遺兒の調育を遂げて亡夫の遺志を完うせられんことと、母子の健闘を祈り筆を留む。(佐藤)

關東軍々屬囑託勳七等 佐山敏生

佐山敏生は、高知縣高知市農人町の出身にして父を茂樹、母を英と云ひ、明治三十六年十月三日生る。高知市立小學

校、高知縣立第一中學校を経て大正十一年四月高知高等學校に入學、大正十五年三月同校卒業、次で京都帝國大學文學部哲學科に入學、昭和四年之を卒業し同年同大学院に入學せしが、昭和七年四月奉天に於て支那語通譯の免狀を下附せられ、同年九月滿洲航空株式會社に入社し、滿洲里飛行場主任として赴任し、直に關東軍囑託を命ぜらる。敏生資性温順にして明朗、在學中教師及び同僚より敬愛せられたり。詩歌を好み、試作少なからざるが如きも一二の外、發表せられたるものなし。同七年九月七日滿洲里駐在員として事變に關する勤務に従事し、同地に飛行場を設置せり。斯くて同年九月二十七日五徳連子附近に於て名譽の戦死を遂げたり。以下其戦歴に就き概要を記す。



昭和七年九月二十七日朝齊々哈爾を發したる軍用定期連絡機(渡邊砲兵少佐以下七名搭乗)は、滿洲里駐屯飛行場に着陸せることを知らずして、午前十時頃該地飛行場に着陸せることを知るや、敏生は反軍の射撃を受けつつ、機油を提げて單身現場に驚進し、危機切迫しあるを以て速に避難すべきことを急報すると共に

機油を補充し、自身も亦之に同情し、同機をして辛ふじて危難を脱せしめたりしが、航行の途中札蘭屯碾子山附近に於て有力なる蘇炳文軍の射撃を受け、機關部に故障を生じたる爲五徳連子附近に不時着陸の已むなきに至り、着陸後敵の射撃を受け、搭乗せる將兵と共に極力奮闘せしも、衆寡敵し難く遂に同日夕全員と共に壯烈なる戦死を遂げたり。敏生の自な

犠牲となりて軍用飛行機を避難せしめたる行動は、實に崇高にして且つ旺盛なる責任觀念の致す所にして、其の機敏勇敢なる處置は日本男兒の本領を發揮して遺憾なきものとす。其功績優秀と認められ、後左の恩賞あり。

戦功に依り勳七等に叙し青色桐葉章を授け賜はりたり。

敏生の遺骸は事件平定後十二月十三日收容し、十二月十八日齊々哈爾に於て關東軍特務機關の主催を以て慰靈祭を行ひ、同十三日新京に於て關東軍主催の關東軍葬、同十六日奉天に於て滿洲航空株式會社々葬、昭和八年二月京都帝大文學部學會主催の慰靈祭等、孰れも盛大に行はれ、後郷里に於て陸軍大臣代理、市長、聯隊區司令官外官民多數參列の下に、埋葬式を行ひ湖江山上に葬りたり、因に長くも兩陛下より祭祀料を下賜せられたることは、死後の譽にして又家門の光榮之に過ぐるものなし。(佐藤)

陸軍々屬囑託勳八等

杉岡 信利

杉岡信利は、福岡縣企救郡企救町宇城野の出身にして、豫備歩兵上等兵なり。父を幸太郎、母をマサと云ひ、明治四十年の生なり。郷里の小學校に入校せしも故あつて半途退學、十一歳にして渡滿し、叔父山下直七に養育せられ、長春室町小學校を卒業し、次で補習學校に學び、成績優等殊に支那語に堪能なり。性質温順にして篤實、絶対に酒煙草を手にせず、事に當りて熱心精勵なり。昭和二年七月長春青年訓練所の業を畢り、翌三年一月徵兵として、小倉歩兵第十四聯隊に入營し上等兵に進む。昭和四年十一月滿期除隊となりて再び渡滿し、叔父の業を助くるの餘暇支那語の研究に勉め益々上達す、滿洲事變勃發するや、昭和七年二月二十九日吉林鐵道守備隊の教官に聘せられ、後吉林獨立騎兵上尉に任ぜられ基幹

隊の副官兼司令部謀報主任の要職に就き、事變に關し貢獻すること多大なり。

昭和七年三月二十七日李海青の兵匪農安を包圍攻撃するや、信利献身的努力を以て、農安にありし關東廳派遣の測量隊を援護し、同二十九日に至り敢然敵の重圍を突破して、測量隊及び居留民を誘導援護し之を窟門方面に護送すると共に、更に日本軍清水支隊に協力し、之が嚮導となりて、農安附近の敵匪を攻撃せしめ彈丸雨飛の下にありて勇敢なる行動を以て日滿兩軍の連絡に従事し、支隊の攻撃を容易ならしめ、遂に敵を擊退して、測量隊の援護を完了し功績顯著なり。

同七年九月七日豫備騎兵大尉日野武雄の指揮する吉林騎兵支隊編成と同時に支隊司令部に在りて謀報勤務主任として職務を命ぜられ、支隊の駐屯地たる松花江驛附近一帶に於ける匪賊の状態及土民の動靜を調査し間斷なく報告して、的確なる判斷の資料を提供し、十月中旬に至り駐屯地西方約八吉米套子裏附近に匪賊出沒するの情報に接し之を偵察したるに約五百の匪賊良民を苦めつつあり。依つて支隊は之を攻撃するに決し、十月二十日多數の日本人を含める基幹隊一中隊及び騎兵三大隊をして各々戰闘準備の位置に就かしめ午前十一時頃攻撃を開始し、午後三時に至り敵を擊退して套子裏を占領せり。本戰闘間信利は基幹隊副官兼支隊長傳令將校として支隊長の命令を各大隊に傳達し、又各大隊の報告を通譯し敵火の下にありて勇敢機敏に活動す。此間偶々敵の一彈は信利の右胸部を貫き壯烈なる戦死を遂げたり。功績優秀と認められ左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。(佐藤)

陸軍々屬囑託勳八等 志垣次平

志垣次平は熊本縣上益城郡乙女村宇世指の出身にして、父を彦三、母をワキとし、明治十五年四月十五日生なり。



明治二十六年三月郷里の小學校を卒業す。次平性質温厚にして義務心強く、殊に奉公の念燃るが如し。後年長く滿洲に在住し、故林大八少將の張作相顧問たりし時其の密偵として勤務し、知遇を受けたり。次平吉林省地理に精通し支那語に堪能にして朝鮮語も相當の技能あり。一度臺灣に移住せしが、上海事變に林少將の戦死を聞くや、遙々上海に渡り其の戦没の跡を尋ね、墓前に頷きて一死報國を誓ひ、再び渡滿して敦化に來れりといふ。其の人物並に經歷につき適任と認められ、昭和七年六月二十三日囑託として採用せらる。然して敦化附近の警備に當りある歩兵第三旅團に配屬通譯として服務し、又密偵となりて單身敵地に潜入して、黒頂子、賸子附近の情況を偵察して歸還せり。旅團長は馬號方面の匪賊を徹底的に掃蕩せんとしたるも、斥候等の同地に進入すると困難にして之が良策を考慮中なりしかば、直に次平に命ずるに馬號附近の情況を偵察すべきを以てせり、次平旅團長より此の重任を托されて痛く感激し、身命を賭して此重任を完うせんことを誓ひ、勇躍して鮮人一名を隨へ二十四日敦化を

出發し、巧に行動して匪賊の警戒網を潜り、紅石砬子を経て同日黃泥河子に到着、同地に於ける情況と地方人民の言に依り綜合し得たる情況を以て報告を製作し、同伴せる鮮人の知人に依頼して之を旅團に送達せしめ、自身は更に太平山に向て前進中、大刀會匪のため發見せられ、遂に其の毒手にかゝりて噎れたり。次平は目的の地點たる馬號に到達することを得ず、従つて其の報告の内容は遺憾なき能はずと雖も、黃泥河子附近の情況を詳報せしため、旅團掃蕩隊の行動は、是に依りて便宜を得たること渺からず。次平の勇敢なる行動は其の悲壯なる決意と共に、大いに賞讃に値するものなり、功績優秀と認められ、後日左の如く恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。(佐藤)

陸軍々屬囑託勳八等 草野敬治

草野敬治は愛知縣岡崎市上六名町字木之座の出身にして、豫備歩兵上等兵なり。父を治助、母をいとのとし、明治四十年八月二十四日生る。大正十年三月東京市瀧の川尋常高等小學校尋常科を卒業し、東京市立商業學校に入學、大正十一年三月同校卒業、大正十三年三月名古屋市熱田實業補習學校に於て簿記科並に英語科を修了し、又同校商業科第二學年の課程を修業す。性質温厚にて沈着、然も機敏にして膽力あり。又進取の氣象に富めり。父母に仕へて至孝、熱田町某店に店員たる時、夜間の休息時間を以て父母の宅に歸省し、之を慰むること數々、郷黨之を推賞せり。昭和三年歩兵隊に入隊し上等兵に進み伍長勤務を命ぜられて、昭和五年十一月滿期除隊せり。

昭和七年二月渡滿し、大川中尉の指揮する吉林鐵道守備騎兵隊に入り、同隊教官として聘せられ、滿洲國軍の將校を以

て待遇せらる。大川中尉は大正十五年士官學校卒業者にして頭腦明晰果斷剛勇の威名噴々たり、中尉馬賊頭目双好を説得して歸順せしめ、之を改編して吉林鐵道守備騎兵隊となしたるものなり。斯くて昭和七年二月二十七日より長大線測量隊の掩護に任じて農安に至り、献身的活動を以て其任務を遂行しありしが、三月二十七日李海青部下の匪賊に同地を包圍せ



られたり。敬治は二十九日測量隊並に居留民を導きて匪賊の重圍を突破し、密門方向に之を護送したり。次で清水支隊の嚮導となり匪賊を撃退し、其功績顯著と認めらる。

四月一日關東軍司令部囑託を命ぜられ、爾來大川中尉の指揮する騎兵隊内に在りて是と行動を共にす。然して四月下旬哈長隊の守備、五月上旬長春衛附近の戰闘、六月上旬五常附近の戰闘に於て、常に大川中尉の分身者として、困難なる吉林軍の指導に任じ、自ら得意とする機關銃を操縦して範を示し、隊員一同の畏敬敵せず、數百名の部下或は死傷し或は潰走し、遂に百餘名を餘せり。然るに敬治、副官阿部上等兵と共に協力して大川隊長を輔佐し隊員を激勵しつゝ奮戦せしも、遂に隊長以下高級幹部たる日本人三名を残すのみとなりしも一歩も退かず、自ら機關銃を取りて敵匪を殲すこと百餘、彈藥既に盡く、即ち阿部と共に敵中に突入し拳銃を發射して奮迅中、遂に敵彈に

中り、大川隊長阿部と共に枕を並べて悲壯なる戦死を遂げたり。

敬治戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

敬治の葬儀は新京に於て盛大に行はれ、遺骨の郷里岡崎市に達するや市民多數の出迎へあり。七月二十五日岡崎市尙武會葬を以て三河別院に於て葬儀行はれ、諸團體諸名士等より贈られたる弔旗花環式場狭きを感じる如く飾られ、滿洲國執政、同國務總理、關係團隊長等多數の弔辭を寄せ、滿洲國軍山田參謀の外岡崎在住官民多數の會葬あり、稀なる盛儀なりしと云ふ。實に家門の名譽なり。敬治たるもの亦瞑すべきなり。(佐藤)

陸軍々屬囑託勳八等 丸井松次

丸井松次は福岡縣遠賀郡大字鬼津の出身にして、父を金吉、母をサグと云ひ、明治二十三年五月十六日生なり。明治三十九年三月島門尋常高等小學校高等科を卒業し、明治四十三年十二月工兵第十二大隊第三中隊に入營し、大正元年十一月工兵一等卒を以て歸隊除隊となり、同日普行證書を授與せられたり。昭和六年九月滿洲事變勃發するや、當時范家屯に居住しあり、直に居留民警備團を組織して同地附近の治安維持を圖り、未だ兵備なき折柄不眠の精勵を以て、警備團を指導し、匪賊の來襲に備へて人心の動搖を防ぎたること約三ヶ月間に及びたり。

昭和八年九月十日より拉賓線建設の爲、南滿洲鐵道株式會社哈市建設事務所より派遣を命ぜられ、鐵道第一聯隊長の指揮下に在りて建設作業に従事す。同年十一月二十三日鐵道第一聯隊囑託、同日拉賓線呼蘭河橋梁架設作業中、公傷に依り死亡す、以下其の勤務の狀態につき其概要を左に記す。

同八年九月十五日より拉賓線南部軌道班長の指揮下に入り、新站方面より拉賓線の建設に作事し、九月下旬鐵道第一聯隊長全線の上部長を統制指揮するに及び、南方作業隊長林少佐の指揮に屬し先頭停車場に於ける材料掛として、苦力を指揮し、軌道材料屬品の點檢積載に任じ、銳意作業の促進に努力しつゝありしが、偶々十一月二十三日呼蘭河橋梁用二〇



米鐵桁搬送の列車長として勤務し、不良なる線路に細心の注意を拂ひつゝ、之が輸送を實施中拉法起點約一〇〇軒一〇〇の地點に於て突如重豪車脱線し、鐵桁轉覆と共に之に壓下せられ、下腹部腰部及兩大腿部に重傷を受け、遂に死亡するに至る。然れども此の間本人は上官の命に服し、酷寒も省みず、銳意作業の進捗に盡力し、聯隊をして豫期の如く作業を完成せしめたるは、一に本人の決死的努力に俟つもの尠しとせず。其の功績優秀と認められ、後日左の恩賞あり。

松次性質温順にして篤實、居住民中信望高かりき。妻ありツルと云ひ、ミトリ、ハルエ、清、辰巳、節子の二男三女を遺し、南滿洲苑家屯榮町に現住す。一同の健在と奮闘を希望し、將來多幸ならんことを禱る、(佐藤)

戦功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍々屬囑託勳八等 大仁田武義

大仁田武義は熊本縣天草郡志岐村大字志岐の出身なり。明治四十一年三月三十一日福市の男として生る。母をナカといふ。妻あり、まつといひ、滿春、美登里の二兒を擧ぐ。大正十二年三月志岐尋常高等小學校高等科卒業後、店員として働み居りしが、渡滿して昭和二年六月二十八日滿鐵に入社し、瓦房店保線區勤務に服す。

昭和六年九月滿洲事變突發するや、同年十月一日以降事變の勤務に従事し、十一月十八日迄鄭家屯驛に在りて軍用モーターカー直接運轉をなし、四洮及鄭通線上を、或は巡察兵を搭乘して線路巡察に、或は裝甲列車、普通列車の先驅をなし、又は匪賊討伐の爲出動する救援部隊の輸送に任じ、幾多の功を奏せり。

翌七年六月十日關東軍司令部事務囑託として臨時鐵道線區司令部勤務を拜命し、十三日より二十四日に亘り呼海線松浦驛勤務に服し、軍用モーターカーを運轉し、各地警備部隊の連絡に、鐵道測量班の掩護に、線路巡察に、線路復舊作業掩護等に任じて功あり。

斯くて同月二十五日綏化克音河間呼海線の連絡警戒の任を有する塚本特務曹長の率ゐる、小銃一分隊輕機關銃一分隊計十三名の歩兵部隊を、モーターカーに依り克音驛に向ひ輸送せんと、途中鐵道線路の破壊點の修理、機體の故障修繕を速に完了し前進中、張維屯北方約七軒の地點に到るや、約五百の敵の急襲を受け、將に其包圍内に入らんとし苦戦に陥る。於茲掘上工兵一等兵小吹歩兵一等兵と共に、直に張維屯に急行し、此狀況を四方臺守備隊に連絡すべき命を受くるや、彈丸雨注下に勇躍任に就きしが、約千米にして原江地三井方面より東進する約二百の敵騎兵の包圍攻撃を受く。其遁れ難きを知りつゝも、其任務の重大なるを自覺し直に之に應射し、百方手段を盡して血路を開かんと努力せしが、衆寡敵せず遂

に敵弾の爲壯烈なる戦死を遂げたり。

其身は軍人に非ざれ共、其勇敢なる戦闘行爲は何等他兵と異なるなく、遂に敵の北進を断念し東走するに至らしめたるものにして、功績偉大なり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。

武義の殉職に際しては、内田満鐵總裁は七年六月二十五日社員の懇鑑として表彰せり。武義戦死當時前方より十二發、後方より五發の彈丸を受け居りて、一見其奮戦を思はしめ、又腹に國旗を巻き居りしが、之はモーターカーに掲げ居りしを、敵襲と同時に取り外して腹に巻けるものにして、鮮血に染み白地には多くの彈痕を止めあり。此日章旗と死屍より抽出せし彈丸は、貴重なる資料として滿鐵に大切に保存せらる。遺族は出身地に居住す。(加藤)

陸軍々屬囑託勳八等

外山 四郎

外山四郎は新潟縣南蒲原郡三條町の人、明治三十四年七月五日に生れ、大正三年三月三條町尋常小學校を卒へ、八年三月縣立三條中學校を、十一年三月秋田鑛山専門學校採鑛科を夫々卒業し、更に東北帝國大學理學部地質學考古生物學教室に學び、十四年三月卒業せり。爾後考古生物學教室に副手として勤務、同年十二月一年志願兵として仙臺工兵第二大隊に入隊し、翌十五年十一月退營せり。昭和四年四月奉天教育専門學校教授に榮轉し、六年六月北樺太石油株式會社の囑託となり、エハバ油田調査に従事せしが、十二月再度前記大學教室の囑託に戻れり。

翌七年六月二十五日より南滿洲鐵道株式會社囑託となり、國防資源調査員として滿洲事變の勤務に従事し、第三班(調

査項目、石油及油母頁岩)に在りて探鑛に關する事項を擔任せり。即ち六月二十五日より七月二十七日迄ジャライノール(石油)、八月九日より十九日迄石門寨(油母頁岩)、九月四日より六日迄吉林(油母頁岩)等に於て、現地調査を實施し、特にジャライノール油田地の調査に際しては、深遠なる學識と豊富なる經驗とを傾倒し、危險場裡に在りて十分技術を發揮し、從來學界及工業界に於て、其存在を疑はれたる滿蒙の石油資源に對し、最初の發見をなし、滿蒙全地域に亘る今後の石油調査探究上の基礎をなしたり。

九月十四日關東軍司令部事務囑託となり、ジャライノール試鑛班の主任として該地の試鑛を實施すべく、十八日齊々哈爾に到着し、二十七日同地發の軍用飛行機に便乗し、滿洲里に向へり。然るに滿洲里に着陸したる際、同地駐屯護路軍の兵變勃發しありし爲、直に齊々哈爾に向つて引返す途中、札蘭屯碾子山附近に於て有力なる蘇炳文軍の射撃を受け、機關部に故障を生じ、五徳連子附近に不時着陸の已むなきに至り、着陸後同地附近に在りし張殿九軍の攻撃を受け、搭乘せし將校等と協力奮闘大に努めたるも、衆寡敵せず遂に同日夕壯烈なる戦死を遂げたる事、其後の調査に依り確實なり。

功に依り勳七等青色桐葉章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬囑託勳五等

安達 隆成

安達隆成は山口縣玖珂郡國町大字錦見の出身なり。昭和六年九月十八日滿洲事變勃發するや、盡忠報國の赤心止み難く、挺身志願、同二十八日關東憲兵隊囑託として通譯に採用せられ、勇躍奉天警備に任じて、十月十三日に及びしが、此の間支那語通譯として支那側警備機關の指導、兵器彈藥の押收、諸情報の蒐集等に任じ、克く憲兵を授けたり。殊に九月

二十八日奉天城内、古樓南、福慶春、他二ヶ所に於ける兵器彈藥等の押収、次いで九月二十九日奉天全省警務所、他三ヶ所に於ける兵器彈藥の押収、十月一日小東門大十字街呂純仁方、他一ヶ所に於ける兵器の押収、十月四日奉海鐵路局に於ける捜索、十月七日城内第一監獄、破獄、囚人の逮捕取調べ、更に十月八日瀋陽市商會の商團の組織並に之れが指導等に際しては、重要な通譯並に翻譯業務を擔任し、憲兵をして奉天省城の治安維持に遺憾なからしめて功あり。次で同十月十三日より同七年三月七日に亘りては、諜報及び匪賊狀況偵察に任ぜしが、曩きに滿洲事變の突發するや、奉天及び長春附近の支那軍は皇軍の一撃に依り潰走せりと雖も、支那東北軍閥は錦州に新政權を樹立し、防衛を固め、敗殘兵を糾合して反撃の機を窺ひ、且つ錦西一帯に蟠居して隱然勢力を持する老北風、青山等の匪賊を使喚し、我が後方を擾亂せんとするの狀況顯著なりき。偶々錦州政府を襲撃し、且つ之れ等匪賊の狀況偵察を命ぜられ、關東軍司令部囑託、倉岡繁太郎以下十四名と共に、特志調査班を編成し、挺身其の任に就くべく、十月十三日盤山縣に向ひ奉天を出發し、高子に於て更に軍旅を整へ、十月三十日三道溝に前進せしが、突如として消息を絶つに至れり。爾來極力捜索に努めたる結果、三道溝に於て老北風及び青山の率ゐる千有餘の匪賊と奮戦力闘し、遂に重傷を受けて捕へられ、盤山縣沙嶺に於て倉岡囑託外一名と共に銃殺せられ、斐憤の最後を遂げたること判明せり。時に同七年三月七日なりき。噫々關東軍囑託倉岡繁太郎等と共に錦州政府襲撃の企圖を有し、勇躍其の任に就き、不幸雄圖中道にして職に殉じたりと雖も、其の盡忠報國の至誠に至りては、往時の志士の夫れに比すべく、又錦州方面の狀況を明かにし、以て軍の作戦に寄與せしこと蓋し甚大なり。隆成の勳功又赫々たりと謂ふべし。

戦功に依り勳五等雙光旭日章を授け賜はりたり。

附記、隆成の生年、學歷、其の他に關し、遺族に照會したるも回答に接せざるを以て、以上戦歴の概要を記するに止

む。(澁川)

陸軍々屬事務囑託勳七等 柴田力藏

柴田力藏は秋田縣雄勝郡駒形村八面の出身、明治三十八年十月一日門兵衛の男として生る。母をアヤノと云ふ。大正九年三月駒形小學校高等科を卒業し、十一年六月一日志願兵として横須賀海兵團に入團、榛名、鳳翔、磐手の諸艦、霞ヶ浦海軍航空隊等に轉勤、昭和三年五月末日海軍三等兵曹に累進して現役滿期後、東京市目黒區碑倉在住の豫備海軍中佐官川浩氏に師事、修養に努めたり。其性質直にして剛邁調達なりき。

昭和七年十一月十五日滿洲國興安省南警備軍囑託を拜命渡滿し、同軍は顧問齋藤少佐及び本間大尉の指導に屬す。所屬軍は日本軍と協力し蘇炳文討伐の爲出動、昂々溪より札蘭屯迄平賀部隊の左側衛となり鐵道線路南側地帯の兵匪を掃蕩しつゝ前進す。柴田は防盾自動車係として自ら之を操縦し、未知の境域に於て酷寒中敵情偵察、日本軍との連絡、軍需品の輸送等其任務を完うし、始終戦況を有利に導きたり。次いで突泉及び高力板方面より西方に退却中の李海青軍の行動偵察の爲、中野指導官の指揮する輕機關銃隊を自動車に搭乘せしめ、道なき達爾宰平府附近の砂地域を操縦前進し、正確なる地形の判断と果敢なる行動に依り遺憾なく其任務を完うせり。

八年一月二十五日行衛不明となれる日本軍飛行機捜索の爲、道兩進札布指揮の輕機關銃分隊を搭乘、通達に到りて日本軍と協力、降雪の爲道路を識別するを得ずして行動困難を極めたるも、熾烈なる責任觀念を以て任務に邁進し、二十六日午後二時頃道徳營子東南方約二十支里の無名部落に於て兵力不詳の匪賊より不意に猛烈なる射撃を受けたり。柴田は機敏

且つ巧に自動車を操縦して一時危険を脱出し、更に敵情を偵察の後急速度を以て敵陣地至近距離に突進し、搭乗せる輕機
關銃分隊の火力を遺憾なく發揮せしめ、遂に敵匪を散亂潰走せしめたり。

二月六日達爾宰平府が修連陞の東北義勇軍に迫撃砲を有せる約一千騎の襲撃を受け、保安隊の防戦効なく至急救援方
要請ありしに依り、警備軍は騎兵三ヶ聯隊及び砲隊よ
り成る討伐軍(約九百騎)を編成し、二月六日早朝出
動せしが、柴田は己の操縦する防盾自動車に輕機關銃
分隊を搭載し、途中敵情偵察及び連絡をなすつゝ八日
敵の本據地たる終寶山窟に至り、第一線に進出し彈雨
中勇敢に活動して防盾自動車及び輕機關銃分隊の威力
を充分發揚し、我軍の戦闘を著しく有利に導き敵敗退
に多大の貢獻を致せり。



更に休養の暇なく遠く兵營に報告に赴き、彈藥補充
に任じ、二月十一日熱河ハルモト方面より東方に脱出
し來れる兵匪討伐の爲、道爾進札布指揮下に蒙古騎兵第三聯隊と共に達爾宰平府西北方約二十五支里バラクスンに宿營
中、修連陞匪約六百の襲撃を受けたるを以て、隊は直に部署に就き應戦するや、柴田の防盾自動車は折柄聯隊本部中庭に
於て變速器故障の爲運轉不能となりしを以て、輕機關銃分隊を下車應戦せしめ、自己は故障修理に従事せり。然るに我が
數倍せる敵は我寡勢を悔り包圍の態勢に出で、我携行彈藥を射耗して火力漸く衰ふるに乗じ攻撃愈々急なり。道爾進札布

は戦況不利にして全滅に陥るべきを察知し一時後退を決意し、當時中庭にて故障修理に専念中の柴田に此旨を告げ後退を
促したるも、頑として應せず修理續行中、午前九時頃輕機關銃分隊の彈藥悉く盡き、全員死傷すると同時に、十數名の敵
庭内に亂入し來れるを以て修理を斷念し、日本刀を振つて阿修羅の如く奮闘敵を殺傷せしが、身も前額部及び腹部貫通
銃創を受け、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。

始終勇敢機敏に自動車を操縦して友軍の戦闘を有利ならしめ、且つ衆敵に對し奮戦格闘。遂に瘡を、に至りしは、克く
帝國軍人の精神を發揚せる者にして其功績甚だ大なり。

功に依り勳七等瑞寶章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬事務囑託勳八等 井手福松

井手福松は、佐賀縣藤津郡五町田村字美濃の人にして、後備役歩兵二等兵なり。父を與助、母をヨシノと云ひ、明治三
十五年十月十二日生る。大正八年郷里の小學校を卒業し、大正十二年佐賀歩兵第五十五聯隊に入營、除隊の後大連市梅本
商會自動車部に入り、同商會自動車運轉手在職中、昭和八年三月九日滿洲國討賊作戰軍通過第一兵站部囑託となり、同年
四月十一日關東軍司令部事務囑託軍政部服務を命ぜられ、同日興安南省警備司令部顧問部に配屬せられて、前線に出動
中の部隊に對する補給の業務に従事し、晝夜を別たす精勵其任務に邁進し、屢々危険を冒して通達より赤峯承德に向ひ軍
需品を輸送せり。又同年四月中旬下旬に亘り康平縣西方地區及び賓圖旗内の匪賊討伐に出動部隊のため、軍需品輸送並に
連絡に任じ、以上の功績優秀と認めらる。



(佐藤)

同八年四月二十七日通遼より軍需品輸送の爲貨物自動車を操縦して錢家店蒙古軍兵營に到り、午後四時通遼に歸還の途

中、孔家窩棚北端に於て自動車に故障を生じ、之を修理中騎馬匪賊七名に襲はれ、數名の護衛兵と共に防戦中、敵弾を下腹部に受けたるも屈せず、奮戦午後七時過ぎ敵匪を撃退し、通遼に歸還、翌二十八日四平街滿鐵病院に入院手術中、死せり。

戦功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。福松、性質温良にして機敏、家に在りて孝道を盡くし、入隊の後特に軍務に精勵にして成績優良なりき。

陸軍々屬事務囑託正八位勳六等 西井史朗

西井史朗は、滋賀縣野崎郡守山町大字立入の出身にして、豫備役陸軍歩兵少尉なり。昭和七年十一月二十四日滿洲國陸軍歩兵上尉に任用せられ、吉林省警備軍歩兵第十九師團副官を命ぜられ、同日より事變に關する勤務に従事し、昭和八年四月一日關東軍司令部事務囑託軍政部服務を命ぜられ、同日吉林省警備軍歩兵第十九團配屬、各地の討伐警備に任じて戰

功多かりしが、昭和八年四月二十二日滿洲國陸軍歩兵少校に任じ、同日吉林省六道河子に於て匪賊と交戦中戦死せり。以下其の戦歴の大要を記すべし。

同七年十二月十七日より十九日に亘りては第十九團歩兵隊を指導し、日本軍歩兵第三十九聯隊及同歩兵第四十聯隊と聯合して石頭河子附近に出没する匪賊五省一味を掃蕩せり。然るに匪賊五省は同月末横道河子を襲撃し、掠奪を行ひたる上驛職員露人及滿人七十餘名を人質として拉致し、之が爲同地附近は大恐慌を惹起したり。此時史朗は自ら進んで之が救出に任じ、八年一月四日單身敵地に進入して匪首五省に會見し、人質放還を交渉し、對談五日に亘り遂に五省を説得して、一月十日露人職員四十一名を救出し、續ひて一月十三日滿人職員四名を、更に一月二十四日滿人三名を救出して横道河子驛の鐵道業務を恢復し、治安維持上至大の貢獻をなしたり。此功績優秀と認めらる。

同八年三月十五日石頭河子日本守備隊と協力して匪賊十二名を逮捕し、同年四月十七日以降は牙布刀南方地方に蟠居せし五省一味の匪賊を討伐のため出動せる日本討伐隊に加はり、匪賊約三百に大打撃を與へ、次で石頭河子西北方地區を掃蕩し戦功あり。四月二十二日は在哈爾濱顧問小野大尉に連絡のため、西行國際列車の先驅警備列車に便乗して赴哈の途六道河子驛に下車し、前回討伐後の匪情を聴取中突如五省の部下匪賊約六十名の襲撃を受け、孤軍奮闘し大刀を揮ひて敵數人を殺傷したるも、敵弾のため腰部及左肩部顔面等に重傷を負ひ、遂に悲壯なる戦死を遂げたり。功績優秀と認められ左の恩賞あり。

戦功に依り勳六等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。史朗性質温厚にして豪宕、事に當りて熱心精勵なり。然も克く長上の命に服し又部下を愛撫す。滿洲國軍に奉職以來特に軍務に精勵し、戦闘に際し軍隊の指揮明確、運用も亦適切にして上下の信頼厚く、大いに將來を囑望せられたりしに、

雄志半ばにして賊の兇弾に斃れたるは洵に惜むべきなり。(佐藤)

陸軍々屬事務囑託勳七等 水野仙一

水野仙一は、岐阜縣土岐郡山岐町の人にして、豫備役陸軍工兵軍曹たり。昭和八年一月六日滿洲國陸軍歩兵中尉に任用せられ、同日吉林省警備軍歩兵第八旅司令部附を命ぜられ滿洲事變の業務に従事し、昭和八年七月一日關東軍司令部事務囑託として軍政部に服務を命ぜられ、依然上記の第八旅司令部配屬として勤務し、同年七月十六日歩兵上尉に昇進、同日吉林省雙城堡に於て匪賊と格闘中貫通銃創を被り、七月十七日哈爾濱衛戍病院に於て戦傷死せり。以下其戦歴の大要を記す。

昭和八年一月十日以降、拉林方面匪賊討伐の爲出動し、旅團參謀所に勤務して討伐を指導し、克く日本軍と連繫して討伐の効果を大ならしめ、又自ら陣頭に立ちて勇戦し、或は地方の治安維持に貢献する所多大なり。同年二月より七月に亘りては在哈爾濱顧問小野歩兵少佐の指示を受けて克く滿洲兵を指導誘拔し、同隊内崇敬の中心となり、特に親日觀念を高めつゝ、軍事能力の向上を圖り、以て日滿協同作戰の素地を作り、其効顯著しきものあり。又屢々駐屯地附近の匪賊掃蕩を指導し、以上の功績優秀なるものと認められたり。

同八年七月十六日午後四時雙城堡駐屯日本軍北川大尉の招致を受け、城内の駐屯隊に到り午後六時頃要務を終り、馬車に乗りて旅司令部に歸還の途中、北門附近に於て滿洲國軍兵の軍服を着したる者一名より便乗を乞はれ、之を許可して同車進行中、該兵の舉動に不審を抱き、之を注視せしに、果して拳銃を匿し所持せしを以て、直に之を逮捕せんとして格闘

中、賊のため右胸部より腰推部及び脊髓を貫通する銃創を受けたるも屈せず、旅司令部に到達して匪賊の潜入を報告し、非常警備に就かしめたり。同夜哈爾濱衛戍病院にて手術中途に絶命せり。關東軍司令部附滿洲軍政部最高顧問多田少將は、以上の功績を優秀と認めたり。

戦功に依り勳七等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。
仙一性質温順にして沈着且つ剛勇なり。事に當りて熱心精勵、軍事諸般の成績優良、滿洲國軍士官に採用せられ、大いに將來を囑望せられたりしに、雄志半ばにして遂に兇弾の爲斃れたるは眞に惜むべきなり。(佐藤)

陸軍々屬囑託勳八等 中村常吉

中村常吉は山口縣豐浦郡粟野村の出身なり。父忠藏、母シツは共に故人なり。明治二十八年二月二十三日の生なり。妻イセとの仲に、日出鶴丸、主計、純子の二男一女あり。明治四十年三月、大津郡向津貝村本郷高等小學校を卒業し、四十五年二月、朝鮮鐵道の勤務員となり、十九歳の時、職務に基因する大負傷を多し、兵役の關係なきを常に遺憾とせり。昭和三年十月十五日長春機關土に採用せられ、六年九月十八日滿洲事變勃發するや、直ちに事變に關する勤務に従事し、吉林及敦化驛に勤務、七年一月二十六日に及びたり。

此の間七年一月二十日、關東軍司令部事務囑託となり、臨時鐵道線區司令部勤務を命ぜられ吉長、吉敦線の軍隊輸送列車に乗務し、専ら吉林——土們嶺間及び吉林樺皮廣間の臨時軍用列車の運轉に任じ、又傍ら匪賊の情報を蒐集し、駐屯部隊に通報せり。當時附近には數多兵匪の横行するありて駐屯部隊の出動輸送頗る頻繁なりしに拘らず、常に能く列車を運

行し、出動部隊をして其の目的を達成せしめたり。

是より先き一月九日在林歩兵第四聯隊第三中隊の教化に出動するや、之れが輸送に任じ、該地到着後も、該部隊と起居を共にし、克く邪寒を冒し、困苦缺乏に堪へ、屢々出動する匪賊討伐の輸送に任じ、常に其の任務を完全に遂行して偉勳を収めたり。一月二十七日、第二師團の哈爾濱方面に出動を命ぜらるゝや、當時教化の警備に任じありし、歩兵第四聯隊第六中隊、亦吉林に集結を命ぜられ、常吉は之れが輸送のため午後八時五十分軍用臨時、第四五二列車の運轉に任じ、教化驛を發せしに、途中小姑家老爺嶺驛間に於て牽引機の空氣壓縮機に故障を生じたるを以て、之れを加修するを要せしも、中隊集結の遅延は、直ちに軍の計畫行動に影響する所大なるを慮り、取り敢へず、假手當をなし、凡有、諸注意を以て其の危害を防遏しつゝ、運轉を續行しありしが、六道河



一額榜間、一七四公里附近に於ては、愈々制動力を失ひ其の危険益々加はりしかば、萬一乘軍軍隊に危害を與ふるに於ては、事頗る重大なるを自覺し、車掌機關士等に極力制動に關する指示を與へ、危害豫防に努めたるも、該地附近は、降り勾配七十分一の急所なるため、速度の減殺、意の如くならず、遂に額榜榜間第一號轉轍機附近に於て折構進入中の第一三列車に側面衝突、顛覆の刹那、機關車より墜落、次位車輛の下敷となりて、遂に殉職せり。

常吉當時の苦心たるや、實に尋常ならざりしものあるべく、其の旺盛なる責任觀念と、崇高なる犠牲的精神は、遂に能く軍隊側をして、一兵をも損せず、一死以て其の職に殉じたるものにして、眞に國家の現状を理解せる大和民族として、其の特性を遺憾なく發揮したるものにして、其の功績實に偉大なりと謂ふべきなり。
功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。(澁川)

陸軍々屬事務囑託勳七等

柿沼道雄

柿沼道雄は、栃木縣下都賀郡野本村大字佐川野の出身にして豫備役陸軍歩兵幹部候補生なり。昭和九年一月十日滿洲國軍官候補生を命ぜられ、同年二月二日關東軍司令部事務囑託滿洲國軍政部服務を命ぜられ、同日黑龍江省第三教導隊に配屬、同日より事變の勤務に従事し、同年二月十九日滿洲國陸軍歩兵中尉に任ぜられ、同日黑龍江省張二把頭店に於て匪賊と交戦中、頭部及胸部に貫通銃創を受けて戦死せり。其戦歴の概況は左記多田少將の作爲せる功績調査書に依り明なるを以て全文を茲に掲ぐ。

右者自昭和九年二月八日至同月二十日間東地區警備隊管内殘匪總討伐ニ當り騎兵第十六團里見討伐隊ニ屬セララルヤ團本部附トシテ之ニ参加シ日本軍トノ連絡部隊ノ指導等ニ任シ終始積極的ニ活動シ業績見ルヘキモノアリ、特ニ二月十九日討伐隊主力通化縣對店東方地區ニ於テ、卓上飛ノ指揮スル約百名ノ匪賊ヲ追撃中尙將校ノ指揮スル掃蕩隊ニ屬シ、鄭金店東方約一里ノ地點ニ於テ不意ニ敵匪ト遭遇シ、掃蕩隊主力ハ敵ノ右翼ニ迂迴シ猛烈ニ攻撃前進スルヤ、敵彈雨飛ノ間敢然身ヲ挺シテ部隊ヲ指導シ、負傷者横出スルモ之ニ屈スルコトナク豪膽機敏ニ行動シ、可惜遂ニ敵彈ヲ受ケテ戦死ス、之カタメ

部隊ノ志氣大イニ振ヒ、敵匪敗走ノ已ムナキニ至レリ、其行動實ニ勇敢ニシテ衆ノ模範トスルニ足ル其武功拔群ナリト認ム

里見討伐隊長 歩兵中佐 里 見 金 二

滿洲國軍政部最高顧問 少 將 多 田 駿

斯くて道雄は左の恩賞あり。

戦功に依り勳七等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

道雄性質温順にして氣概に富み、責任觀念旺盛なり。入營以來特に軍務に精勵し、成績優良なりき。(佐藤)

陸軍々屬事務嘱託勳八等 澁江常磐

澁江常磐は、長崎縣高來郡島原町の出身にして豫備役陸軍工兵一等兵なり。昭和八年一月十五日滿洲國陸軍通信員を命ぜられ、奉天省警備司令部に配屬せられて、同日より關東軍司令部事務嘱託軍政部附を命ぜられ、二月十一日討熱作戰軍暫編警備軍第一支隊軍事教官補助員を命ぜられ、二月二十四日開魯南方約一里の地點に於て匪賊と交戦中戦死せり、以下其の戦歴に就き大要を記すべし。

昭和八年一月十五日より二月十一日に亘りては遼西地區に蟠居する老北風、青山海寬等の匪賊討伐に参加し、奉天省警備司令部無線通信班員として寒威酷烈の間、困難なる通信業務に従事し、鞍山安磐山遼中等の諸縣下に轉戦し、不眠不休の努力を以て、各部隊の通信連絡に任じ、其の討伐行動を容易ならしめ、功績優秀と認められたり。又同八年二月十五日以降熱河作戦開始するや、滿洲軍第一支隊通信隊に配屬せられて通達に前進し、同地に通信所を開設し、日夜寸閑なく

信に没頭し、滿洲國軍の作戦に至大なる貢獻を爲したり。而して二月二十四日早朝日滿兩軍通達を發して開魯に向ひ進撃を開始するや、常磐は無電器材を携行して第六師團の大行李に隨行し、吹雪烈しく咫尺を辨ぜざる中に難行軍中、遂に所屬部隊を見失ふに至れり。然れ共責任觀念旺盛なる常磐は敢然前進を繼續し、夜に入りて開魯南方約一里の地點に達したる時、敵の敗殘兵團に遭遇し其包围を受けたり。常磐は其脱出し難きを看取するや、先づ携行せる無電器材の主要部を破壊し、軍刀を揮つて敵中に切り込み、衆寡敵せず遂に腹部に貫通銃創を受け、熱河作戦最初の犠牲として壯烈なる戦死を遂げたり。其の功績優秀と認められ、左の恩賞あり。

功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

常磐性質温順にして義務心強く、事に當りて熱心精勵す。其の最後に於ては沈著克く其の處置を完うし、無線電信の器材を敵に利用するを得ざらしめ、後斷然敵中に切り入り、武夫の本領を發揮して帝國軍人の名譽を傷けず、華と散りたるものなり。嗚呼この勇士を失ふ可惜哉。(佐藤)

陸軍々屬事務嘱託勳八等 木藤秀彦

木藤秀彦は、鹿兒島縣給良郡國分町上小川梅ヶ谷の人にして、後備役陸軍歩兵上等兵なり。昭和七年十月一日滿洲國陸軍騎兵少尉に任用、吉林獨立騎兵支隊附を命ぜられ、松花江站に駐屯、昭和八年三月十五日吉林省磐石に移駐し、同年十二月一日關東軍司令部軍務嘱託軍政部服務を命ぜられ、同日吉林獨立騎兵支隊に配屬、同月七日呼蘭縣に於て匪賊と交戦中戦死せり。以下其戦歴の概要を記すべし。

昭和七年十月二十日所屬騎兵支隊は套子裏附近に集結せる匪賊約五百を攻撃するため、同日午前十一時三十分套子裏東端に達し、直に戦闘を開始せり。秀彦は機關部隊を指揮し敵の占領せる村落に向て前進せしに、敵は松花江支流を利用し、其の沿岸に防禦陣地を設けて頑強に抵抗し、我が死傷續出、交戦三時間に亘り遂に戦闘交綏の状態に陥らんとするや、秀彦は率先水深胸部に達する支流中に跳込み、基幹部隊も亦之に續いて前進、敵軍狼狽、遂に屍體十一馬匹六捕虜一を遺棄して潰走せり。此功績優秀と認めらる。

同七年十二月七日三岔河附近の戦闘に於ては約三百の匪賊を包圍攻撃して之を降伏せしめ、翌八年四月四日玻璃河套の戦闘に際しては、支隊の騎兵二中隊を以て同地附近に陣地を占領せる共產匪約五百を撃破し、爾後同年七月末に亘りては騎兵第四營を指導して吉海蕎麥稜子附近の守備に任じ、同年八月中は支隊と共に中村旅團長の隸下に入りて磐石縣下の大討伐に参加して勇戦し、同年十月十日より十一月二十八日に亘りては吉林省秋季討伐に参加して渡邊大佐、飯塚大佐の指揮下に於て、北は陶頓昭より南は白頭山麓に亘る廣地域の掃蕩に従事し、此間主として第四營を指導し、其の運用適切なを得て、日本軍各部隊の討伐を有効ならしめたり。以上の功績も亦優秀と認めらる。

同八年十二月初旬既往數次の討伐に依りて四散せし共產匪は、漸次磐石北方地區に集合したるため、秀彦は之が討伐の命を受け、獨立騎兵支隊第四營第七連を率ひて出動し、呼蘭街駐屯の第四營第八連と連絡のため十二月六日午後八時同地に到着し、兵營本部に宿營中、同夜半一時兵匪約百名暗夜に乗じて本部を襲撃し、歩哨及衛兵を拉致し、圍壁内に亂入し來りたるを以て、秀彦は咄嗟の間居合せたる兵員を指揮し極力防戦に努め、隣家屋に宿營中の中隊殘部來援するに及び敵を撃退し得たるも、此亂戦中秀彦は抜刀敵中に突入し勇戦奮闘敵を斬撃殺傷したるが、不幸此の間敵弾を頭部に受けて遂に壯烈なる戦死を遂げたり。以上の功績優秀と認められ、後日左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

秀彦性質温順にして剛勇氣概に富み、事に當りて熱心精勵なり。特に軍隊指揮に長じ、滿洲國軍の指導操縦最も其宜しきを得て内外上下の信頼淺からず、將來頗る有爲の才幹たりしが遂に戦場の華と散りたるは、洵に惜むべきなり。然れ共秀彦其の欲する處に従ひ、武功を千載に垂る。亦本懐とするに足らん。其の眞幅を禱る。(佐藤)

陸軍々屬事務勳託勳八等

柏原芳治郎

柏原芳治郎は、京都府與謝郡宮津町字宮本の人にして、豫備役陸軍歩兵上等兵たり。昭和八年三月十八日滿洲國陸軍歩兵少尉に任用せられ、吉林省警備司令部に配屬せられ、六月一日吉林第二教導隊本部附、八月五日關東軍司令部事務勳託軍政部服務を命ぜられ、吉林第二教導隊本部に配屬、同年八月三十日より九月二日に亘り、三江好匪の討伐に方りては、歩兵大隊本部並二中隊機關銃迫撃砲山砲各一小隊の集成部隊たる第二教導隊を指導し、石黒歩兵中佐の指揮を以て八臺子附近の敵を攻撃し、之を撃破したる後、敵を追撃して大礮子溝を經、高集に向ひて前進するに際し、芳治郎は山田少佐を輔佐し、騎兵一分隊を指揮して敵情搜索並に友軍各部隊の連絡に任じ、本隊の戦闘を有利ならしめたり。然して九月二日續いて敵を追撃し、大礮子溝に入らんとせる時、敵の一部は隘路口を占領して、芳治郎の分隊に續行せる山田部隊の隘路進出を妨害せんとしたり。芳治郎此の状況を見て、咄嗟の間地形の要否を看破し、迅速機敏の動作を以て前方に急進し、要地點たる丘阜に到達せんとせし約百五十米前に於て敵弾のため、右踵を貫通せられしも之に屈せず、部下を叱咤激勵して突進中敵の第二弾を胸部に受けて落馬す、滿人騎兵二等兵揚玉山之を授け、自己の馬に移して退却せんとせしに、芳治

郎は「騎兵不用害怕前進」と叫び、馬首を敵方に回さんとせし一殺利、敵の第三弾は其の頭部を貫通し、芳治郎遂に壯烈なる戦死を遂げたり。關東軍司令部附滿洲國軍政部最高顧問少將多田駿の作爲せる功績調書の結尾に於て左の如く記されたり。



山田部隊ガ敵彈ヲ受クルコトナク安全ニ隘路口ヲ進出展開シ該敵ヲ一蹴シテ、廟嶺西方高地ニ追撃ヲ續行シ得タルハ囑託ノ奮戰ニ依リ敵火ヲ完全ニ牽制シタル結果ニシテ、其ノ功績優秀ナリト認ム
斯くて芳治郎、戦功に依り滿洲國陸軍歩兵中尉に昇進し、次で左の恩賞を受く。
功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

芳治郎父を万治郎、母をまつと云ひ、明治四十三年八月二十二日生なり。郷里の小學校を卒業の後官津商業學校に入學し、大正十五年三月同校卒業、昭和六年一月福知山歩兵第二十聯隊に入營し、軍務に精勵成績優秀を以て七年七月上等兵に進められ、下士適任證並に善行證書を授與せられて一旦除隊歸休となり、後滿洲國軍官候補を志願し、受験合格せるものなり。性質温順にして氣概に富み、將來有爲の人なりしが、雄志半にして戦死せるは洵に惜むべし。特に其願福を禱る。芳次郎の遺骨郷里に達するや、郷里に於ては町葬を以て盛大なる慰靈祭を舉行せり。一家一門の榮譽も亦

大なりと謂ふべし。(佐藤)

陸軍々屬囑託勳八等

土居本善四郎

土居本善四郎は、島根縣那賀郡雲城村大字下來原の人、明治二十三年三月五日に生る。明治三十六年三月、雲城尋常小學校を卒業し、四十三年十二月一日徴兵として、歩兵第二十一聯隊に入營し、大正二年十二月累進して軍曹となり、同四年三月滿洲駐劄のため、字品出發滿洲駐劄約一年七ヶ月にして現役滿期退營、昭和五年四月一日國民兵役に編入せられ、同七年四月十三日歩兵第七十六聯隊通譯事務囑託として採用せられ、四月二十七日歩兵第五聯隊に通譯として雇傭せられたり。かくて四月十三日より滿洲事變に關する勤務に従事し、綏中警備に任じて、同二十三日に及びしが、此の間綏中守備隊に屬し通譯事務囑託として、當時交通頻繁なりし奉山線の列車檢索、並に宣傳情報の蒐集等に任じ、終始能く其の任務を完うし常に守備隊の任務達成に多大の貢獻を呈せしが、殊に混成第三十八旅團が白石咀門及び水口附近の匪賊討伐のため二月十四日午後六時、綏中を發せんとするや、自ら進んで其の道案内者たらんことを志願し尖兵と同行し、道路の案内をなしたるのみならず、牛彥章、上下店、湯上、新家屯、永合屯、串心店等の諸部落通過の際は深更なりしたため、部落民は我が軍を馬賊と誤認我れに對ひ猛射せり。

依て善四郎は尖兵長の命に依り彈雨を冒して前進し、日本軍たることを大聲叱呼之れを止めんとせしも、多數人馬車輛の行進音響に、驚怖逆上せる部落民は之れを馬賊の偽言なりとして肯んぜず、依然猛射を續行せしかば、此の上は最後の手段として圍壁を乗越へ庭内に入り確認せしむるに如かずとなし、危険を冒して進入し日本軍たることを知らしむる等身命

を略して活動し、約八里の間暗夜の行軍を行ひ豫定の進路を行進し一名の負傷者をも出だすことなく十五日午前四時、老邊に達するを得しめたり。



更に十五日には早朝、老邊を出發、白石咀門に至る間の案内を續けたり。かくて白石咀門に達するや、匪賊の一部其の東方約一軒の山頂に監視しありて梨樹溝方面に進出すべき豫定の右縦隊の情況は全く不通なりしかば、之れとの連絡を命ぜらるゝや、單身危険を冒して梨樹溝方向に前進し右縦隊と連絡せしが、其の行動勇敢剛膽にして皇國のため身命を賭して、敢行せる行動は眞に在郷軍人の意氣を示せるものにして推賞に餘りありと謂ふべきなり。次で五月十一日には、悞虎岩附近の戦闘に参加し通譯として、谷支隊に屬し危険を冒して情報を集し支隊の戦闘を有利ならしめて功あり。

而して六月十二日には龍王廟附近の戦闘に加はり、青山東南麓附近にありし義勇軍の行動不明にして、綏中警備に稍々不安を感ずるに至るや、自ら進んで朝陽寺附近の偵察に従事し、克く危険を冒し有利なる情報を蒐集して、谷支隊の龍王廟附近の戦闘に當り、支隊をして常に有利の状態にありて戦闘し得しめたる功績は實に偉大なりと謂ふべきなり。

越えて七月五日青山南麓にありし、鄭桂林の指揮せる義勇軍、凉水泉子附近より新庄子附近に進入せりととの報に接する

や、七月五日より同八日に至る間、新庄子、火右門子南平坡、東平坡の各地區を數回に亘りて踏査偵察し極めて、重要な情報を齎らし、警備隊長の敵情判断に唯一の資料を與へ、七月八日第一線前にありて新庄子、火右門子附近の情況偵察中遂に行衛不明となり、十一月十四日尊き驅となりて發見悲壯の戦死と認めらる。嗚呼、善四郎歴戦偉大の勳功は、燦として萬世不朽國光と共に八荒に輝かむ。

戦功により勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

善四郎性質、勇壯剛毅にして居常軍の行動を最も正確迅速ならしむるは密偵通譯の努力如何に依るものなりとの信條を抱き、常に敵地深く進入して有利の情報を齎らせり、善四郎又民間事業に貢献せる所多く、昭和七年四月には綏中に日本居留民會を創立せり。而して之れより先、昭和六年事變當時には我が憲兵隊のため善四郎、何等職責なきに拘らず自己の職業を休みて治安の維持に應援せる等滿洲に於て滿期退營、爾來二十年に亘り同地に業を營み事毎に國軍のため赤誠を傾注し今次亦自發的に通譯として奉公の誠を擲んで、遂に其の最後を飾りて戦野の玉と碎けたるものなり。妻、大利ユキは滿洲國奉天省綏中縣綏中驛前警備隊指定旅館大陸公司に住めりと。(澁川)

陸軍々屬囑託勳八等 星原邦治

星原邦治は、鹿兒島縣薩摩郡永利村字百次の出身なり。母をスエと云ひ、妻須美との間に學、淑子、二郎の二男一女あり。明治三十二年十一月三日を以て生れ、大正三年三月永利尋常高等小學校高等科を卒業し、適齡に達するや、未教育補充兵役に服せしが、昭和七年九月九日滿鐵派遺員として奉職、同日泰安驛に到着し車號方として、服務滿洲事變軍事輸送業務

に参加し、同九月二十日に互りしが次いで、同十月二十日には泰安附近の戦場に参加し數日來、兵匪襲來の噂専らにして避難を慫慂されしも、驛務の重大性を自覺して應ずることなく、十月二十日優勢なる兵匪の包圍攻撃する所となれり。同日午前六時砲撃と共に兵匪が驛舎に侵入するや、驛長利光正路の命に服し、拳銃を以て對戦死守、交戦實に二時間に及びしが衆寡敵せず彈丸盡き、身に數彈を蒙り、驛と運命を共にし、遂に壯烈なる最後を遂げたり。壯絶真に鬼神を哭かしたる千載の後克く懦夫をして起たしむるものあり。非戦闘員の身を以て後退を一蹴し堂々兵器を執つて勇戦格闘、一死以て任所と運命を共にしたる勇敢無雙の行動は、實に是れ滿身燃ゆるが如き責任觀念の發露に外ならざるなり。嗚呼。功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。(澁川)

陸軍々屬事務囑託勳八等 池上美男

池上美男は、岡山縣吉備郡富山村大字延原の人にして、父を茂右衛門、母をみのと云ひ、明治四十一年五月三日生なり。大正十二年富山尋常高等學校、次で同地實業補習學校を卒業し、昭和四年一月廣島電信第二聯隊第七中隊に入營し、無線電信通信術を修得す。昭和五年十一月工兵一等兵を以て滿期除隊となり、昭和八年三月十五日滿洲國陸軍騎兵少尉に任用せられ、興安分省警備軍無線電信所勤務、同年六月九日林西通信所附を命ぜられ、九月一日滿洲國騎兵少尉を免ぜられ、同日關東軍司令部事務囑託軍政部服務として、無線電信通信に關する業務に服したり。昭和八年三月十五日以降、熱河作戦に方り日本軍と協力の爲出動し、無線電信に依り各方面の連絡に任じ、寢食を忘れて奮勵し、各隊の作戦行動に至大の貢獻を爲し、同年六月九日林西占領と共に該地に電臺を設置することに決するや、美

男は同地無線電信所員を命ぜられ、通信器材輸送の爲、炎暑の下に十數日間に亘れる難行軍を経て任地に到着し、爾後日夜精勵通信の業務に従事し、省内の匪賊討伐に協力して功績少からず。九月下旬駐屯部隊の撤退に伴ひ、同月二十八日林西電信所を閉所し、器材をトラックに積載して錢家店に向ひ歸還の途中、二十九日開魯西方約七十支里の馮家子附近に於て、北來升等の匪賊約六百に包圍せられ、蒙古兵運轉手等六名を指揮して奮戦せしも衆寡敵せず、遂に軍刀を揮ふて敵中に突入し、敵彈を頭部に受けて壯烈なる戦死を遂げたり。關東軍司令部附滿洲軍政部最高顧問多田少將は、特に其の武功を記録報告し、其功績を優秀なるものと認めたり。



戦功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。美男性質温順にして剛勇なり。然も思慮周密、事に當りて熱心奮勵す。又勤儉の美德を具へ、嘗て自動車運轉手として得たる給料を節約して父母に送金せり。美男不幸にして十一歳の時父を喪ひ、入營の年、又母と死別す。其戦死するや上下皆之を哀悼し、滿洲國通

信本所長陸軍中將郭恩霖の寄せたる吊詞如左。

大哉烈士 英勇忠良 職仁通信 聯絡有方
 匪至開魯 途遇强梁 捨身取義 致爲國殤
 陸軍之部 六四五

陸軍々屬事務囑託勳八等 伊藤久藏

伊藤久藏は、福島縣耶麻郡木幡村大字蓬萊字風早の出身にして、豫備役陸軍歩兵上等兵なり。昭和七年九月十日滿洲國靖安游撃隊に入隊し、同日滿洲國陸軍歩兵少尉に任じ、靖安軍歩兵第一隊附、昭和八年三月二十日關東軍司令部事務囑託軍政部服務を命ぜられ、同日靖安隊軍に配屬せられ、各地の討伐に参加して勇戦し、戦功少からざりしが、四月十日滿洲國歩兵中尉に任じ、同日熱河省阜新縣阜新附近に於て、匪賊と交戦中戦死せり。以下其戦歴の概要を記すべし。

昭和七年十月十一日より同月十八日に亘りては、騎兵第四旅團長の隷下に在りて東邊道の討伐に参加し、靖安軍第一軍司令部附として十一日小東州附近の戦闘に際しては、第一線との連絡に任じ、敵弾下に於て戰場を馳驅し、司令官の意圖命令を各隊長に傳達し、十二日救兵臺附近の戦闘に際しては、挺身危険を冒して迂回部隊との連絡を遂げ、十三日より十八日軍の前進並域城附近の警備間は各隊の連絡並に警戒勤務に服し、又食料の蒐集を補助し、以上の功績優秀と認められたり。

昭和七年十二月十二日より翌八年一月十二日迄は三角地帯の討伐に参加し、危険を冒し嶮難を越へて各隊の連絡に任じ三月二十一日以降は奉山線地區鐵道の警備に服し、追撃砲排長として錦縣に位置し、又阜新縣の掃匪に出動し、常に連長を輔佐して克く其任務を完了、又哈巴器附近の戦闘に際しては追撃砲を指揮して敵を制壓し、功績優秀なり。斯くて阜新城を占領したりしが、越えて四月十日未明突如約二千の匪賊は大舉して襲撃し來りたり、此時久藏追撃砲隊を指揮激勵し

て第一線に立ち、敵弾下に於て沈着勇敢に動作し、有効なる急射撃を以て敵に猛火を浴せ遂に之を西北方に撃退したり。然るに不幸此激戦中敵の一弾は心臟部を貫通して壯烈なる戦死を遂げたり。關東軍司令部附滿洲國軍政部最高顧問多田少將は其の作爲せる功績調書に於て「危急に際し沈着克く大敵に當り木隊の危険を救ひたる功績優秀なりと認む」と判定せり、久藏最後に於ける奮戦の状況知るに難からずと謂ふべし。戦功に依り左の恩賞あり。

功に依り勳七等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。
久藏性質温順にして沈勇、責任觀念最も旺盛なり。滿洲軍隊に入營の後には特に軍務に精勵して成績優良上下の信頼厚かりき。(佐藤)

陸軍々屬事務囑託勳八等 飯塚孝平

飯塚孝平は、靜岡縣田方郡中狩野村本柿木の人にして、豫備役陸軍上等看護兵なり。昭和七年十一月二十四日滿洲國陸軍三等軍醫に任じ、靖安軍歩兵第二隊附を命ぜられ、同日より滿洲事變に關する業務に従事し、昭和八年四月五日關東軍司令部囑託軍政部服務を命ぜられ、靖安軍に配屬せられて、後各地の匪賊討伐に参加し戦功少からざりしが、四月七日滿洲國陸軍二等軍醫に任じ、同日熱河省七家子に於て匪賊と交戦中戦傷し、同月十六日日本赤十字社奉天分院に入院五月三日該傷に依り死亡せり。以下其戦歴の概要を記すべし。

同八年三月二十一日より同月二十九日に亘り、靖安軍が奉山線溝帮子站に於て建國軍の武装解除並に同地附近の鐵道警備に任ずるや、當時宿營地狹隘且つ其の衛生施設甚だ不完全なる状況に於て、之れが改善並に應急的處置を講じて、隊員

の健康保全を圖り、以て所屬部隊の任務遂行に毫末の支障なきを得しめたり。次で同年三月三十日より四月一日に亘れる石門塞の戦闘に際しては、獨立守備隊司令官の隷下に屬して、日本軍と協同作戰のため、溝帮子より石門塞に向つて前進するに方り、隊員は夜暗と難路に悩み落伍者續出の状態なりしが、孝平は多大の勞苦を以て之れが收容に努力し、戦闘開始の後は第一線に立ちて、彈雨の下に自己の危険を顧みず負傷者の應急手當に努め、以て戰鬥力の維持に盡瘁せり。以上の功績優秀と認めらる。

同八年四月二日より同月七日に亘れる阜新縣附近の戦闘に際しては、屢々危険を冒して傷者の救護に任じ、四月七日七家子附近の戦闘に際しては第一線に進出し、敵彈雨飛の下に於て最も剛膽沈着に動作して十數名の戰傷者を收容し、克く其任務を完うしたりしが、此行動間敵の一彈は孝平の右肺部より脊髓を貫通し、重傷にて倒れたり、戰友之を介護せんとするや、速に止血を施せ吾敵に向て突入せんと云ひて意氣軒昂なりしが、繼帶所に收容せられて軍醫に向ひ「予を顧る勿れ先づ滿人負傷者を先にせよ」と依頼せり。嗚呼何ぞ其の心の高潔仁慈にして、又日滿協和の精神に充溢せるや、孝平四月十六日日本赤十字社奉天分院加療中、上記戰傷に因り五月三日死亡せり。

戰功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

孝平性質温厚にして剛勇なり。入隊以來特に軍務に勤勵し、殊に日滿の協和に心を傾倒し、上下内外の信頼淺からず、次いで將來を囑望せられしが、雄志半ばにして戰歿したるは惜むべきなり。(佐藤)

陸軍々屬事務囑託勳七等 大石 惠之

大石惠之は、福岡縣八女郡八幡村大字新庄の人にして、豫備役陸軍騎兵伍長たり。昭和七年十一月二十四日滿洲國靖安軍騎兵隊に入隊し、同日滿洲國陸軍騎兵少尉に任ぜられ、昭和八年三月一日關東軍司令部囑託軍政部服務を命ぜられ、同日靖安軍に配屬、三月三十一日滿洲國陸軍騎兵中尉に昇進し、同日奉天省黑山縣大虎山に於て匪賊と交戰中戰死せり。以下其戰歴に就き概要を記すべし。

昭和八年一月十二日獨立守備軍司令官の隷下に入りて、三角地帯匪賊の討伐に方り、長泡子北方高地に於て激戰中なる本隊の情況を日本軍に連絡するため派遣せられたる騎兵第一連の小隊長として前進中、三接臺に於て鄧鐵梅の匪賊約百と遭遇し、直に之を攻撃したるも地形我軍に不利にして、連の戰鬥展開容易ならず、敵は勢に乗じて前進し來り、連は苦戰に陥らんとしたる危機に際し、惠之機を逸せず部下小隊を激勵し、左前方約二百米の高地に向て躍進し、之を占領して敵を瞰射し、多大の損害を與へ遂に之を擊退し、日本軍との連絡任務を達成して討伐の効果を大ならしめたり、この功績優秀なるものと認めらる。

同八年三月下旬より靖安軍は關東軍司令官の命に依り打虎山附近の警備中、二十四日より二十六日に亘り、日本軍と協力し、建國軍の武裝解除を爲すに當り、惠之は連長を輔佐し、周到なる注意と至嚴なる警戒の下に之を實行し、最も平穩裡に之を實施し目的を達成するを得たり。當時打虎山附近は匪賊密偵の潛入頻りにして、且つ舊建國軍騎兵の匪化せるもの横行し、特に嚴重なる警戒を必要とする状態にあり、惠之は連長を輔佐して警備上些の遺漏なからしめんとし、自ら率先して斥候となり、遠く進みて匪情を偵察し、又近傍各村落を巡察して治安の維持に努め、着々其の効果を擧げつゝありしが、三月三十一日夜滿人兵二名を率ひて宿營地附近を巡察中、午前十時過大虎山北側黑山道上に於て六七名の匪賊と遭遇交戦し、其二名を斃したるも、惠之は右上膊及左胸部に貫通銃創を被りて戰死するに至れり、關東軍司令部附滿洲國軍

政部最高顧問陸軍少將多田駿は惠之の勳功を認め「囑託カ今回ノ出勤以來、日夜精勵常ニ危険ヲ冒シ克ク本隊ノ任務達成ニ貢献セシ其功績優秀ナリト認ム」と記したり。惠之戦功に依り左の恩賞あり。

功に依り勳七等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

惠之性質温順、機敏にして氣概に富み、事に當りて熱心勉勵なり。滿洲國士官となり大いに將來の活躍を企圖せしも雄志半ばにして敵弾に噎れたり、惜むべきなり。(佐藤)

陸軍軍屬事務囑託勳七等

小川 秀夫

小川秀夫は、鹿兒島縣姶良郡山田村上名の人にして、豫備役陸軍歩兵軍曹たり。昭和七年十二月十五日吉林鐵道守備隊教官に任用せられ、同日より滿洲事變に關する業務に従事、昭和八年三月二十八日滿洲國陸軍歩兵中尉に任ぜられ、吉林省警備軍吉長地區司令部附となり、同年八月二十日關東軍司令部事務囑託軍政部服務を命ぜられ、吉林省警備軍歩兵第四旅第十四團本部に配屬せられ、各地の匪賊討伐に任じて功績少からざりしが、同年九月十八日歩兵上尉に昇進し、吉林省頭道河子驛附近に於て匪賊と交戦中戦死せり。以下其戦歴の概要を記すべし。

昭和八年三月十五日より第十師團と協力して吉敦線沿線の匪賊討伐に方り、三月十八日討伐隊は黃泥河子南方三道崗附近にありし約五百の敵に對し夜襲を決行す。即ち暗夜密林内を潜行し、十九日午前四時頃同部落を包圍し猛烈に攻撃す。敵匪は頑強に抵抗し屢々逆襲を試み、我は谷地内に在り敵は山上より機關銃を亂射し、我討伐隊は稍々苦戦に陥りたり。此時秀人は機關銃隊を指導して神速に敵の左側背高地に迂回し、敵の不意に乗じて之に猛火を浴せたりしかば、敵匪狼狽

遂に潰走するに至れり。翌二十日は第十師團の攻撃と協力して、威虎嶺西南方牛槽溝附近にありし約三百の匪賊を夜襲し、之を追撃中、敵は兵力を増加して反撃し來り、交戦約三時間に亘り我死傷續出せしも、機關銃の運用其宜しきを得て遂に敵を撃退し、越へて三月二十五日黃泥河子東北方灣灣溝附近にて約三百の匪賊を撃破潰走せしめたり。以上の功績優秀と認めらる。

同年七月下旬より八月下旬に亘り吉長線の警備に任じ、八月二十七日吉海線附近、九月十五日吉海線小城子附近に於て匪賊を掃蕩し功績ありしが、九月十八日吉海線に於て第一〇一號旅客車に警乗し、午後七時煙筒山を發し午後七時四十分吉林南方七十四吉米附近を進行中、前方約四百米を先驅せし日本軍搭乗の裝甲車は、匪賊の線路破壊に四り脱線し、同時に數十名の匪賊より襲撃を受けた。此時秀夫は旅客車を急停車せしめたるに、左右兩高地上に機を窺ひありし數百の匪賊は間髪を容れず列車に向て襲撃し來り、車内は大混亂を生じたるが、秀夫は「騒ぐな直に窓及扉を閉ぢよ」と連呼して乗客を鎮めつゝ、警乗兵を叱咤激勵して應戦し、挺身敵を撃退に努めたり。然して秀夫が前方車輛に配置せる警乗兵を併せ指揮するため、最後尾の車輛より躍出でたる一利那、敵機關銃弾を浴び、右腕及び右膝に十數發の貫通銃創を受けたるも屈せず、左手を以て傷を押へつゝ、戰闘指揮を續け、交戦實に二時間難戰苦闘、午後九時四十五分遂に敵を撃退したるが秀夫は出血甚しく車内に於て應急手當を受けつゝ、午後十一時四十五分絶命せり。關東軍司令部附滿洲國軍政部最高顧問多田少將は其の功績調査書の結尾に左の如く記したり。

囑託が身ニ重傷ヲ負ヒタルモ屈セズ寡兵ヲ指揮シテ衆匪ヲ支へ彼等ヲシテ一步モ車内ニ侵入シ得サラシメ遂ニ之ヲ撃退シ、能ク數百ノ旅客ノ生命財産ヲ完全ニ保護シタル其功績ハ優秀ナリト認ム。

戦功に依り勳七等に叙し青色桐葉章を授け賜はりたり。

秀夫性質温順にして剛毅なり。殊に責任觀念旺盛にして其の任務遂行に當りては熱誠燃るが如きものあり。將來有望の士官として滿洲國軍内大いに囑望せられしが、雄志半ばにして遂に戦歿せしは洵に惜むべきなり。(佐藤)

陸軍々屬技手勳八等 松本 誠

松本誠は、福島縣雙葉郡木戸村大字前原字濱之城の出身にして、明治二十一年六月五日伊八の長男として生れ、母をタワと云ひ、妻トキとの仲に一子チエ子あり。明治三十四年三月、木戸村尋常小學校を卒業し、四十年三月、福島縣立磐城中學校を卒業、四十三年九月私立東京工科學校採鑛冶金科を卒業し、大正十二年四月五日、第二師團經理部雇員に採用せられ、十三年一月十日、第二師團經理部に於て元軍馬補充部萩野支部土地殘務整理に従事し、同八月一日同部工務科勤務となれり。

昭和七年一月上海事變勃發するや、二月二十三日より、第二師團經理部留守部に在りて上海事變勤務に従事し、獨立山砲兵第一聯隊動員下令せらるゝや、臨時構築物建築に關する指導監督上、設計調査、其の他一般庶務の業務に徹身服務し以て季節的障礙の打破に努めて功あり。六月二十五日關東軍經理部に轉じ、七月一日より、九月三十日に亘りては、同部工務科にありて事變に伴ふ安東守備隊射撃場移轉工事、現場監督員として同地に到り、土木及び建築業務に晝夜兼行請負人外苦力を指揮督勵し、豫定の工程を竣工せしめたる功績は大なりと謂ふべきなり。

次で十月一日より、八年一月十三日に亘りては、安東、奉天、新京にあり、奉天野戰兵器廠火藥庫、新設工事現場監督員として活動し、十二月盡日より、新京にありて軍司令部應舎の設計に従事すると共に、新築中の軍司令部宿舎工事現場

監督として、零下三十度前後の寒氣を冒し、晝夜兼行、精勵恪勤、克く主任者を輔佐せり。然るに不幸公務に基因し、病魔の犯す所となり、八年一月十七日入院、銳意治療に力めしも、其の甲斐なく同二十四日、病勢革まり、流行感冒性肺炎にて、遂に逝けり。眞に痛惜の極みなり。然れども、着任以來第一線にありて工事現場監督に任じ、其の任務に邁進して之れを完うし、軍の作戰行動に貢献せる所甚大にして、其の功績赫々たりと認めらる。公病死の日を以て、陸軍技手に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。(澁川)

軍屬陸軍上等計手勳七等 駒田 重貞

駒田重貞は三重縣河藝郡椋木村の出身にして明治三十二年三月五日榮四郎の長男に生れ、母はりつといふ。妻は千代子と云ひ、君子、章、玲子の一男二女あり。大正二年三月椋木小學校高等科を卒へ、四月津市私立勸精館師範科に入學、四年三月卒業、爾後七年十一月迄隣村明尋常高等小學校に奉職し、七年十二月一日現役志願にて歩兵第五十一聯隊に入隊せり。翌八年四月より九月迄西伯利亞に出征、功に依り勳八等瑞寶章を賜はり、十二月伍長任務を拜命、計手志願をなし、九年十二月三等計手に任官、累進して昭和四年三月上等計手に任官せり、此間歩兵第五十一聯隊、第三師團經理部、歩兵第三十三聯隊、第十六師團經理部、輜重兵第十六大隊等に轉勤、昭和二年十二月勳七等瑞寶章を賜はり、五年十一月二十六日退職、翌六年三月十日より一年間椋木村軍人分會長として活動せり。其性質聰明にして氣概に富み、快活恬淡にして事を處するに敏滑、進んで難局に當り、長上の信頼篤く、同僚の敬慕深かりき。

昭和八年四月十五日關東軍司令部臨時雇員を拜命し、勇躍郷里を出發、十七日神戸港を出帆、二十一日大連港に上陸、二十二日新京に到着、關東軍經理部北安鎮派出所附經營科臨時雇員として、旅裝を解く暇もなく、未だ配屬職員數名に過ぎざりし新設北安鎮派出所開設準備業務に従事し、之が所要の各種物件の請求、受領並に調辨等、整備輸送に任じ、豫定の



如く出發準備を完了し、二十三日新京出發、赴任途中齊々哈爾に於て、關東陸軍倉庫支庫より被服其他必要物件の請求、受領及之が輸送業務物資物價、其他業務上必要な調査を命ぜられ、東奔西走不眠不休の努力にて、短時間に克く其任を完うし、二十八日任地到着當初は、銳意派出所の開設整備に服し、爾後派出所一般庶務調査、給與係として其繁劇なる業務に従事し、晝夜兼行適切に之を處理し、尙技術者僅少なりし爲、急速新築を要する派出所並に宿舍新築工事の現場監督に従事し、熱心精勵以て豫定期間内に之を完成せしめ

得たり。又北安鎮歩兵隊其他新築工事敷地選定に關する測量業務に従事し、尙工用材料煉瓦の製造、監督指導業務に服し、屢々建築現場より約二軒離れし製造所に至り、熱心職工を指導督勵し、製品の向上と共に製造工程の進捗に努め、成果を收めたり。

偶々六月三日早朝煉瓦製造監督並に検査受領を命ぜられ、工場に向ふ途中、乘馬より顛落頸椎を骨折し、遂に公病死を遂ぐるに至れり。如此北安鎮派出所開設當初に於ける業務に従事し、常に熱心精勵克く所長を輔佐し、繁劇多端なる業務を迅速適切に處理し、遂に殉職するに至りたるものにして、其功績は多大なり。前途有爲の士の公傷死を悼み、切に英靈の冥福と遺族の多幸とを祈る。(加藤)

陸軍軍屬 栗尾六郎



栗尾六郎は、岡山縣淺口郡金光町大字大谷の出身にして、父を嘉一郎、母を美登と云ひ、明治三十一年八月二十一日生なり。大正二年三月遙南尋常高等小學校を卒業し、次で金光中學校に入學、大正六年三月同校を卒業し、後町役場吏員となり、次で三十一歳の時町會議員となり、其他土木委員消防組理事等公共事業に盡瘁すること多かりしが、偶々滿洲事變勃發に際し、大に滿蒙の天地に雄飛せんことを企圖し、斷然意を決し、渡滿し、滿洲國間島國門國際運輸株式會社に勤務中、汪清縣方面軍事工作に當り、選ばれて糧食輸送隊

馬車班長として従軍す。

昭和八年十一月八日歩兵第六十三聯隊に備せられ、同日より第十師團吉林省秋季討伐に際し、飯塚部隊に属して出動し同隊の行李徴備車馬監督として、吉林省延吉縣局子街より汪清縣雙河鎮を経て、同羅子溝に至る間の軍需品輸送に任じ、特に雙河鎮より羅子溝間の長途難路の行軍に方りては、晝夜兼行を以てし、刻苦精勵、堅忍久しきに耐へ、克く其の任務を完うし、部隊の行動上支障なからしめ、以て我軍の作戦上貢献せる所尠からず、昭和八年十一月十九日激働に因る疲労と、凛冽なる寒氣に冒されし時、馬匹轉倒の際其下敷となり、腸部を強壓せられて腸捻轉に依り公傷死に至りたるは洵に惜むべきなり。

六郎性質温厚にして沈毅なり。事に當りて熱心精勵、會社服務中常に營々として倦むことなく、上下の信頼厚かりき。六郎の遺骨は二十五日運輸株式會社支店事務所に安置せられ、懇ろに祭り、朋友故舊の者通夜して二十六日午後二時より西本願寺に於て、社葬を以て盛大なる告別式を舉行せられたり。六郎妻を艶子と云ひ、一子甲子男を遺し、金光町の六郎が宅に現住す。母子の健闘と甲子男の立身を祈る。(佐藤)

陸軍軍屬 竹下一雄

竹下一雄は、福岡縣大牟田市本町五丁目の出身にして、父を市作、母をテジユと云ひ、明治四十三年八月二十日生なり。大正十三年三月大牟田市大牟田高等小學校を卒業し、同四年四月大牟田市三井私立工業學校へ入學し、昭和二年三月同校を卒業せし後、同年四月大阪市南國島町日産自動車株式會社に入社、同四年十一月まで勤務、同十二月一日小倉なる野戰吉砲兵隊に入營し、幹部候補生となり、同五年十一月砲兵軍曹に任ぜられて滿期退營し、同年十二月より再び大阪市日産自

動車株式會社に入り、昭和八年三月まで勤続せしが、同年四月二十日軍屬として、東京なる陸軍自動車學校材料廠に配屬せられ、同日關東軍兵器廠に増加配屬せられ、四月二十二日東京を出發し、同月二十四日下關港出帆、同二十五日安東を通過して、同二十六日奉天に到着し、同地野戰兵器廠輜重部兵器修理工場に於て自動車戰車類の修理業務に従事し、終始一貫克く任務を完うせり。特に五月九日より六月二十二日に至る間承德第二自動車修理班に、又六月二十三日より同年十一月十九日に至る間朝陽第一自動車修理班に在りて勤務し、此の間或は雨期に際會し、又は關東軍自動車隊の編成替等ありて修理作業繁忙を極めたるも、晝夜兼行業務に精勵し、其の成績良好なりしが、偶々細菌性赤痢に罹り、十月十三日在朝陽赤峯衛戍病院に入院し同月十九日病歿せり。功績顯著と認めらる。



の愛敬を受けたりしが、遂に病魔のために噎れたり。洵に惜みても尙ほ餘ありと謂ふ可し。

一雄性質温順にして事に當り熱心精勵す。其の責任觀念たる實に熱烈にして、任務に赴くところ死も亦辭せざるの概あり。從軍日淺しと雖も、其の誠實なる勤務振りは比類稀なるものあり、上官の信頼と共に同僚

陸軍軍屬 相川喜一郎

相川喜一郎は、茨城縣多賀郡助川町壽町の人にして、父を由藏、母をリノと云ひ、明治三十三年十二月十一日生なり。



大正十二年禮島縣私立八重尋常小學校を卒業し、後、家業農に従事したりしが、二十三歳の時父を喪ひ、其の後は日立工場に勤務し以て家計を助けたり。資性温順にして孝心厚く、又弟妹を扶養愛護しつゝ家運の隆昌を圖りたり。昭和七年十月二十一日臨時備として關東軍野戰航空廠に備入せられ、同年十一月十六日飛行第十二大隊重爆撃機修理の爲め派遣を命ぜられ、爾來同隊に在りて熱心精勵、率先作業に従事し、成績優良なりしが、同八年一月十二日重爆撃機第六號機の機上修理作業中墜落負傷し、鐵嶺衛戍病院新京分院に入院中

一月十四日遂に死歿せり。喜一郎本作業間日時短少なりと雖も、野外作業及夜間作業を行ひて、完全に整備を終り、以て第一線部隊の作戦に支障なからしめたる功績は優秀なるものとす。喜一郎は居常より軍部に屬して活動せんことを熱望しあり。偶々航空廠に於て臨時備人募集のことを知り、意を決して勤務先を辭し、應募したるに、嚴選の結果、採用せらるゝに至り、勇躍して其の職に就きたるものなり。就業短日月にし

て遂に殉職せるは洵に惜むべきなり。妻チヨと一子大を遺せり、母子よ健在なれ。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 張飛大

張飛大は朝鮮平安北道慈城郡閭延面晚興洞の出身にして、明治三十年二月二十六日之翰の長男に生れ、幼時書堂に於て漢學を修め、次いで農業に勵み居りしが、昭和三年十二月十日突然郷里を去つて滿洲安東縣に渡り、某商店々員として精勤中滿洲事變勃發するや、六年十二月二十八日歩兵第三十九旅團司令部に軍屬として備入せられ、通譯に服務せり。

翌七年一月六日第一輸送監視隊が、錦西方面に於て匪賊掃蕩中の騎兵第二十七聯隊へ、糧秣輸送に任ずるや、飛大は歩兵第三十九旅團より配屬せられたる傭役馬車附添監視人として出動し、小隊長松尾少尉の命を承け、熱心職務に奮勵し七日無事錦西に到着其任を完うし、更に九日監視隊と共に錦州へ歸還の途に就き、小嶺子南方高地附近に於て約八百の匪賊に遭遇するや、隊員一同協力、奮戦猛闘せしも、衆寡敵せず遂に全員壯烈なる戦死を遂げたり。

同十六日死體を發見、之を検するに全身に數個所の刺創銃創を受け、車輛保護の爲奮戦せし狀瞭然にして、當時の激戦を偲ばしむるものあり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。實に餘榮ありと謂ふべし。飛大は剛毅にして果斷、又仁侠に富み、進んで難局に當る美風を有せり。(加藤)

陸軍々屬勳八等 江井 忠

江井忠は、福島縣相馬郡大葉村下江井字谷津の出身なり。昭和六年九月十八日夜滿洲事變突發するや、騎兵第二聯隊尖兵小隊に屬し、十九日駐劄地公主嶺の公安隊に進入し、勇敢に行動して中隊の武裝解除を大に有利ならしめ、翌二十日南嶺附近の掃蕩に於ては、同地兵營東北側を占領し、敗殘兵を撃退しつゝ、警備に任じ、聯隊の掃蕩を容易ならしめ、次いで吉林に轉じ十一月三日迄同地を警備し、爾後十二月二十三日迄公主嶺附近警備の爲、寡兵を以て日夜繁劇なる諸勤務に勵み、以て治安維持に貢獻せし事多大なり。

斯くて聯隊は錦州攻撃の目的を以て十二月二十四日より溝帮子に向ふや、自動車隊第一車載機關銃手として活動し、二十八日南小房の敵攻撃に於ては、彈雨中沈着勇敢に確實なる射撃を以て敵に多大の損害を與へて敗退せしめ、騎兵隊の戰鬪を頗る有利ならしめ、二十九日戒田中隊は盤山南端に據る敵の爲苦戰中なるを知るや、直に敵を猛射し、續て部落突入に方りては、行進間確實なる射撃をなして敵を制壓し、運轉手と連繫し一進一止、熾烈なる火力を以て多大なる打撃を加へ之を撃退し、一舉に双臺子河より河北部落に進入し、騎兵隊の戰鬪を有利ならしめ偉功を奏せり。翌七年一月一日より溝帮子及閭陽驛附近、七日より十四日迄は第二十師團裝甲自動車隊として錦州警備に服せしが、十五日より自動車隊長曾根崎中尉と共に第二師團參謀部勤務となり、二十四日迄車載機關銃製作の爲遼陽に至り、克く同中尉を輔佐し遂に其目的を達成せしめ、以て將來に於ける車載機關銃活動の基礎を確立して功を顯はし、其後二月十二日迄公主嶺、三月二十二日迄哈市を警備し、二十三日より四月九日迄方正方面の戰鬪に加はり幾多の功を奏せしが、特に三十一日老魏家附近の敵情搜索の爲、曾根崎中尉に屬し午前十一時半頃高麗州東方約二十米の無名部落の敵約三十の攻撃に、早坂分隊として不意に

火力を發揚し敵を奇襲撃退し、斥候長の搜索を容易ならしめ、爾後老魏嶺附近地形開闢し敵彈飛來、確實なる敵情を得るに困難なる爲、斥候長は敵前横行に依り兵力を確認するに決し、兵二を率ゐて前進するや、忠は彈雨中沈着剛膽斥候長に従ひ、敵前五百米を縱横に馳驅し、其兵力は步騎合して約四百なると陣地の情況を詳知し、以て旅團翌日の大勝の因を作し、四月二日第二中隊敵の重圍に陥り、其後退さへ容易ならざるに際し、之が救援退却收容の命を受くるや、地形開闢なる畑地を彈雨中急速なる歩度にて前進し、本道南側高地を占領し、第二中隊を席捲しある敵に對し、側背より猛火を浴びせて其企圖を挫折し、同中隊に退路を與へ、追撃せんとする敵を拒止し多大の損害を與へ、其功績偉大なり。三日曾根崎中尉の遠距離斥候に加はり、條船口附近敵情搜索の任を完うし、四日聯隊の尖兵たる同中尉の指揮下に活動し、方正占領の一番乗の功を樹て、六日方正より西部夾佳子に前進間は、野砲段列及各隊大行李の直接警戒に活躍せり。九日哈市に歸還するや十一日迄同地を警備し、十七日迄公主嶺附近の警備に精勤し多大の功績を残せり。而して内地歸還の爲十八日同地を出發二十日大連港を出帆、二十六日大阪港に上陸、二十八日無事仙臺騎兵第二聯隊留守隊に復歸、三十日騎兵上等兵を拜命、五月一日滿期除隊せり。

更に滿蒙に於て活動するの大望を抱き、昭和八年五月六日滿洲國の軍籍に加はり、十二月一日關東軍司令部事務囑託を拜命し、引續き滿洲國軍に在りて奮勵中、同十五日北滿鐵路西部線碾子山驛東方十七支里附近に於て、右胸部より左背部貫通銃創を受け、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬囑託勳八等 道源元助

道源元助は、山口縣郡濃徳山市の出身にして、父を寅吉、母をミツと云ひしが共に故人なり。明治二十年十二月九日を以て生れ、三十一年三月、岐陽尋常高等小學校尋常科を卒業、四十一年十二月徴兵として、山口歩兵第四十二聯隊に入營し同四十三年十月、一等卒に進級し、同十一月歸休除隊せり。

昭和六年十月十五日關東軍司令部事務囑託に採用せられしが、同年九月十八日滿洲事變勃發するや諜報及び、匪賊狀況偵察に任じ、同七年三月七日に及びたり。當時、奉天及び長春附近の支那軍は、皇軍の一撃に依り、潰走せりと雖も、支那東北軍閥の錦州に新政府を樹立し、防備を固め、敗殘の兵を糾合して、反撃の機を窺ひ、且つ、錦州一帯に蟠居して、隱然勢力を持つる老北風、青山等の匪賊を使喚し、我が後方を擾亂せんとするの狀況顯著なるものあり。偶々錦州政府を襲撃し、且つ之等匪賊の狀況偵察のため、特志調査班を編成せらるゝや、元助は、勇躍之に加はり、同志十四名と共に、同十月二十日盤山縣に向ひ、奉天を出發し、高坨子に於て更に軍旅を整へ、十一月初旬遼河を渡りて、三道溝に前進せしが、突如として消息を絶つに至れり。爾來極力搜索の結果、倉岡班長と共に、一行は三道溝に於て、老北風、青山等の率ゆる千有餘の匪賊と奮闘力戦せしも、元助は遂に重傷を受けて捕へられ、盤山縣九臺子に於て遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至れり。壯絶悲絶、元助は倉岡班長と共に、錦州政府襲撃の企圖を有し、勇躍其の任に就き、不幸雄圖中道にして、斃れたりと雖も、其の盡忠報告の至誠は、往時の志士の夫れに比すべく、其の勇戦力闘は、大和民族の特性を遺憾なく發揮せるものにして其の功績眞に、偉大なりと謂ふべきなり。
功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。(遊川)

陸軍々屬勳八等 北尾槌重

北尾槌重は鳥取縣八頭郡散岐村大字小倉の出身なり。明治三十九年十二月十日徳藏の男として生れ、母をつねと云ふ。大正十一年三月散岐尋常高等小學校高等科を卒へ、十四年三月同實業補習學校後期三個月を卒業す。其性質剛毅快活にして思慮綿密質素にして廉潔なり。又克く孝養を盡し、同情心深く郷黨の模範青年にして、運動競技を能くし郡縣の競技會には毎に優秀なる成績を示せり。



昭和三年一月徴兵として平壤飛行第六聯隊第三中隊に入營、専心軍務に勉勵し十月航空兵一等兵を拜命、十二月一日四年度召集下士候補者として所澤陸軍飛行學校下士候補隊に入隊し、四年八月二十九日教育終了原隊に復歸、十二月一日航空兵伍長に任官、第二中隊附となり、五年十二月一日軍曹に任官、六年九月十九日獨立飛行第八、第十中隊、二十一日同第九中隊の編

成下令あり。爾後留守勤務に勵み、十一月三十日滿期除隊せり。

翌七年六月二十日關東軍飛行隊材料廠開設と共に、器材掛助手として備入せられ、材料廠器材班に勤務中、編成改正に依り關東軍野戰航空廠兵器班に轉屬し、九月末日迄一般兵器業務に服し材料廠當時に於ける體驗を多年間蘊蓄せる軍隊兵

器業務の手腕を發揮し、各隊の急激なる要求に應じ一面備付兵器の點檢、諸帳簿の整理に從事して航空廠業務の進捗を扶けて第一線飛行隊の任務達成を容易ならしめたり。

十月以降十二月下旬に亘り兵器修理業務事務を擔任し、常に旺盛なる元氣を以て多種多様な修理部品の處理に努めて航空廠機能發揚を圖り、又繁多なる業務の傍ら、兵器廠遺送器材掛助手として兵器廠に連絡し、遺送器材の運進を計り。此間十月二十三日齊々哈爾飛行第十大隊に交付すべき燃料、彈藥、及び各種飛行器材の宰領として派遣せらるゝや恰も北滿は匪賊各所に跳梁し、動もすれば列車の運行遅延せんとするに際し、熱誠克く停車場司令部及び關係各所と密接なる連絡をなし、之が運行を迅速ならしめ、以て輸送の在を完うし、該部隊の活動に支障なからしめ、十一月一日歸還せり。然るに此間肺結核に冒され、十二月二十四日遼陽衛戍病院奉天分院に入院、内地還送の爲翌八年一月十九日奉天出發、二十二日大連港を出帆、二十五日宇品港に上陸、廣島衛戍病院に入院、醫療に盡したれ共其効なく、五月十七日遂に永眠するに至れり。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬勳八等 榎本新助

榎本新助は埼玉縣入間郡柳瀬村大字南永井の人、明治三十二年四月十五日亡市五郎の男として生る。母をきよといひしがまた故人なり。妻はゆき、長女はコヨと云ふ。三十九年四月柳瀬村立文明小學校に入學、四十三年三月卒業す。性質温順にして職務に忠實、交際及び家庭何れも圓滿なりき。大正八年十二月徵兵として宇都宮歩兵第六十六聯隊留守隊第三中

隊に入隊、翌九年四月二十八日シベリヤ出征のため伏木港を出帆、五月一日浦鹽に上陸、浦鹽派遣軍に屬し沿海州、間島等の各地に勤務し、十二月四日屯營に歸還せり。同月二十五日右の戦役の功に依り勳八等瑞寶章並に金百三十圓を授け賜はりたり。



翌十年四月一日歩兵一等兵を拜命、火工術を卒業、十一月善行證書を受け、二十八日歸隊除隊、翌十一年二月手工として所澤陸軍飛行學校に就職、十五年四月飛行機工となり、其成績良好にして昭和四年三月精勳章及び金三十圓賞與せらる。同六年十一月十日關東軍飛行隊補給業務要員を拜命、十二日材料廠要員となり、十三日下關港を出帆、十四日釜山港に上陸、十五日奉天に到着同日より二十日迄昂々溪附近の戦闘に加はり、戦闘直前に於て第一線飛行各中隊の飛行機破損多く、内地より八八式偵察機十二機を補充せられたるも、爆撃裝備なき爲同機に對し、着奉當日より嚴寒を冒し三晝夜に亘り徹夜作業を連続し、尙引續き材料廠到着迄飛行機の修理作業に従事し、以て第一線飛行各中隊に武装完全なる飛行機を交付して其威力を増加し、二十三日湯崗子附近の戦闘に於ては、爆撃に服する八八式を整備し、迅速確實に出發準備を完うして其任務を全うせしめ、二十七、二十八日鶴陽河附近の戦闘に際しては、大石橋前進飛行場器材輸送の爲、夜半行動を開始し飛行第八大隊の第一中隊及び獨立飛行第十

中隊の器材輸送並に奉天驛に於ける器材積載を援助し、飛行場躍進を迅速整正ならしめたり。次いで齊々哈爾方面情況急を告ぐる爲、三十日夕刻より八八式二機の整備を始め、夜を徹し翌一日朝第十六號第十七號兩機を完了し、機を失せず之を中隊に補給し、二十四日より十二月末日迄機體の組立修理及び定期手入に従事し、此間二十二機を完成し、中隊活動の基礎を確立して錦州攻撃の準備を完うせしめたり。

十二月一日より翌七年一月七日に至る間、原田中尉の引率にて四平街に赴き、第十七號機に應接し嚴寒中徹宵作業に當り、更に第五百七十號機の得勝臺附近に不時着陸せしに應接し、最も迅速に分解還送して馬賊兵匪の魔手より逃れしめ、空中勢力の減退を防止するに與りて功あり。

一月四日より二月十日に亘りて酷寒を冒し火氣を絶対に禁ぜざる格納庫内に於て、夙夜匪懈々として飛行機の修理、點檢、精密手入及び組立作業に従ひて組立修理八機を完成し、補給器材の整備に任じ、以て打虎山附近の戦闘及び哈市攻撃準備の爲、各中隊活動の基礎を確立し、一月二十九日より二月十日迄哈市附近の戦闘に供すべき八八式三機を早朝より黄昏迄整備し、更に爆撃裝備一、及び修理一を完成して各中隊の威力を増加し、二月十一日より二十四日迄各中隊より提出せる哈市戦闘中の破損機體を修理完成し、爾後の活動に遺憾なからしめたり。

二十五日より二十七日迄飛行第八大隊第一中隊が上海出動用の器材整備の爲、早朝より深夜迄精勵し、材料廠豫備機二及び同中隊にて空輸せる四機を最も迅速確實に分解梱包し、二十九日大連出帆を可能ならしめ、尙此間整備作業に従ひ、定期手入及び組立十四機を完成して哈市附近の戦闘に於て損耗せる空中動力を恢復し、四月一日より五月上旬迄専心組立修理、點檢、手入等の作業に従事し、組立修理定期手入二十三機を完成し、以て飛行隊活動の基礎を確立し、此間四月三日より九日に亘り、哈市附近の戦闘に於て在哈市獨立飛行第八、第九中隊、飛行第七大隊第三中隊の機體整備援助に赴き

中隊工手に困難なる八八式胴體斜材發動機上部覆の修理、愛國四號の爆撃裝備並に各中隊機體の點檢を行ひ、其空中勢力の保持に貢献せり。

然るに此間脚氣に罹り、五月九日奉天分院に入院、六月二十七日大連分院に轉じ、三十日同地出帆、七月四日宇品港に上陸、廣島衛戍病院に入院、十五日立川病院に入院、後川越市吉川病院に轉じ、醫療に努められ共其効なく、遂に九月三日午後九時永眠するに至れり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬 田中之臣

田中之臣は熊本縣宇土郡不知火村大字長崎の出身なり。昭和六年十月十九日關東陸軍倉庫臨時備人に採用せられ、庫手代用として勤務せり。當時滿洲内各地に於ては、兵匪掃蕩、引續き嫩江、昂々溪附近の戦闘、更に軍の錦州方面出動等、其行動機敏にして之に對する補給も亦一層繁忙となり、尙戰線部隊補給の爲、各方面に臨時倉庫の開設を要するに至り、大連本庫の人員益々減少するも、一方補給の根元たる大連本庫の追送、調辦、製造業務は愈々多端となり、主任將校以下不眠不休軍の要求に應じたり。之臣は此間事務の助手として下士官の業務を代行し、亦現業に従事して寒氣凛烈なる時に追送業務を處理して熱心精勵せり。一月下旬軍の哈市方面進出に伴ひ、大連本庫衣糧配屬の下士官及び雇員同方面に出動せるを以て、更に同人等の擔任せし業務を負擔し、任務の重要と繁劇を加へたるも意とせず、完全に其業務を遂行せり。既に三箇月餘慣熟せざる補給調辦業務に従事し、心身共に極度に疲勞し、爲に健康勝れざるに至りしが、二月十三日長春

倉庫の要員交代の必要を生ずるや、進んで出動を願ひ出で、許さるゝや其擔任せし業務を整然と處理し、二十四日出發せり。

斯くて長春倉庫に到着せる之臣は、當時同倉庫は哈市及び教化方面の追送急を要するものありし爲、直に現業に従事し、寒氣酷烈なる長春驛構内にて夜半に至る迄精勵し居りしに、益々健康を害し、翌二十五日遂に起つ能はざるに至り、同日鐵嶺衛戍病院長春分院に入院、醫療中も常に奉公の念に燃え、再び任務に就かん事を念じ居りしも其甲斐なく、遂に三月十九日永眠するに至れり。

之臣は奉職以來始終一貫忠實に、極めて繁劇なる追送調辨業務に勵み、以て倉庫業務を圓滑にし、克く軍の要求に應ずるを得しめ、遂に職に殉ずるに至れるは、誠に業の範たるべく其功績甚大なり。(加藤)

陸軍々屬勳八等 飯島正平

飯島正平は千葉縣印旛郡八生村の人にして、豫備役砲兵上等兵なり。母をキクと云ひ、明治四十一年三月二十三日生なり。郷里の小學校に學び、大正十五年所澤陸軍航空學校自動車部に奉職せしが、昭和五年横須賀重砲兵大隊に入隊し、砲兵上等兵を以て歸休除隊となり、昭和七年六月飛行第十大隊本部材料廠の編成下令せらるゝや、同月八日同廠に編入せられて六月十三日神戸港を出帆し、同十七日大連に上陸す。爾後直に多量多種なる器材の運搬に従事し、同年七月七日に亘りて多量自動車の運轉に従事し、道路不良運行極めて困難の際、遲滞なく作業を進捗せしめて同月二十二日齊々哈爾に到着、同年七月一日より同月末に亘りては、馬占山討伐の末期に方り專屬運轉手として日夜精勵、連雨を衝きて自動車を運

轉し、又八月一日より同月末に亘りては馬占山軍の殘黨、並に北滿匪賊の討伐に當り、自動車の修理並に其の手入等に従事し、良好なる成績を收め功績少からず。

同年八月末日より十月末に亘りては安達站、昂々溪、大興附近の李海青匪其他北滿各地の匪賊討伐に参加し、豪雨のため崩壞又は泥濘の爲め著しく不良なる道路を通過し、萬難を排して自動車の運轉に任じ、又十一月中は富拉爾基方面齊克鐵道沿線の兵匪討伐並に拜泉附近の反滿軍を攻撃するに當り、所屬大隊の戰闘激烈となるに従ひ、材料廠の補給事務は益々多忙となり、一面には自動車の破損も著しく其數を増加せるに拘らず、克く上官の命に従ひ、徹夜の修理作業に従ひ、其功績顯著なり。

同七年十一月中旬より十二月中旬に亘りては大興安嶺附近の戰闘に参加し、十二月中旬より翌八年二月十日に亘りては、航空資材の冬季試験研究並に各種兵器の修理及熱河作戰準備のため器材の整備に任じ、精勵にして功績優秀なりしが同年二月十一日より四月に亘りて熱河作戰に加はり、萬里長城の主要關門占領に至るまで各地の戰闘に關與して功績多く其の詳細は材料廠長の調書に依り明なるを以て之を左に記す。

材料廠の南滿方面ノ作戰ニ出動スルヤ後發トナリ自動車類輸送ノ宰領トシテ途中作戰移動ノ激烈ノ爲汽車輸送ノ幅狭ヲ極メシモ克ク任務達成ニ努力シ二月二十七日錦州ニ輸送ヲ完了シ爾後大隊ノ作戰ノ進展ニ伴ヒ第一線部隊ニ諸器材爆彈並ニ燃料ノ補給ニ最モ激甚ヲ極メシ其ノ間主トシテ自動車ノ運轉ニ從事シ該地ノ道路不良ナルニ拘ラス連日連夜ノ運行ニ當リ克ク其任務ヲ達成ス又各中隊本部ノ間斷ナキ作戰ノ移動ノ爲自動車ノ修理續出シ之カ修治並ニ手入ニ寢食ヲ忘レ終始一貫奮勵努力常ニ難ニ赴キ遂ニ病ヲ得テ倒レル迄献身的努力ヲ以テ奮闘シ材料廠ノ補給業務ヲシテ遺憾ナキヲ期セシメタルヘ功績優秀ナリ

材料廠兵航空兵少佐 寺 本 喜 男

斯くて正平八年六月十九日衝心性脚氣（公病）にて死歿せるは惜むべし。後左の恩賞を受く。
戦功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。
正平性質温順にして篤實、上下の信用厚かりき。（佐藤）

陸軍々屬勳八等 崔 昌 源



崔昌源は平安北道博川郡嘉山面東文洞の出身にして父を崔丁學、母を金丁雲と云ひ、明治三十六年十二月二十一日生なり。大正七年三月嘉山公立普通學校を卒業し、爾後某店々員として商業に従事したりしが、昭和六年十二月二十八日歩兵第九旅團司令部に備入せられ、滿洲事變に關する業務に従ひ、昭和七年一月六日より同九日に至る間錦西附近の匪賊掃蕩に参加す、此時崔は旅團大行李の監視員として活動し、糧秣の補給を補助し、率先業務に當りて勞苦を辭せず、六日騎兵第二十七聯隊に糧秣補給のため、輸送縱列を編成せら

るゝや、旅團のため備校馬車の徴用に當りて奔走之を完了し、爾後同縱列の附添監視人を命ぜられ、松尾少尉の隸下に入りて一月七日前記騎兵聯隊に糧秣を搬送交付して、其の任務を完了し、一月九日歸還の途中小嶺子南方高地附近に於て、匪賊約八百名の襲撃を受け、奮戦したるも衆寡敵せず、同縱列の將兵全滅し、崔も又全員と共に戦死せり、後遺骸を收容したるに其の全身に數所の刺創、銃創を受け居たり、其の最後に際し奮闘の狀況推して知る可きなり。功績優秀と認められ左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

崔昌源性質温順にして氣概あり。殊に責任觀念強く、軍に雇傭後、日向は浅きに拘らず隊の將兵之を信用愛撫し、崔亦献身的に職を奉じたり、殊に其の最後の時期に於ては、身軍籍にあらずと雖も帝國軍の將兵と伍して奮戦し、力盡きて遂に敵手に殞れたり。然るに後日叙勳の榮冠を頂き名を竹帛に垂る男兒の面目之に過ぎんや、崔以て瞑すべきなり。（佐藤）

陸軍々屬勳七等 五十川七造

五十川七造は滋賀縣栗太郡物部村大字今宿の出身にして、在郷歩兵一等兵なり。父を仙吉、母をいさと云ひ、明治三十年二月五日生なり。明治四十一年三月物部尋常高等小學校高等科一學年を修了し、大正八年三月西比利亞出兵の際浦鹽派遣軍に従ひ、同年四月より翌九年九月に至る間、各地に於ける過激派軍の討伐に従事し、戦功に依り勳八等に叙せらる。昭和七年十月七日軍屬に採用せられ、騎兵第二十六聯隊第三中隊に配屬せらる。

昭和七年十月七日より騎兵第四旅團東邊道方面の匪賊討伐に參記し、旅團大行李の護衛に任じ、大行李に附屬せる多數

の馬夫取締を命ぜられ、泥濘車軸を没し、行動困難を極めたる際も、馬夫を督勵して行李の進退を促し、諸隊の給養に支障なからしめたり、この功績顯著と認めらる。

同年十月十日所屬中隊長は大行李現在の編成にては旅團に追及不可能と認め、糶秣並に直接戦闘に必要な貨物を大安

平警察署に預托するに決し、該處置を大崎特務曹長に命じたり、七造同特務曹長の指揮を以て遊撃溝に於て之が準備のため同地附近に於て支那馬車を徵備し、其の作業に従事したりしが、午前十一時三十分頃俄然同地北方より匪賊二百餘名の來襲を受けたり、七造沈着して馬夫を監督し、之が逃亡を防止するため奮勵中、午後二時頃敵彈を受けて遂に戦死せり。功績優秀と認められ、後日左の恩賞あり。

功に依り勳七等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

七造性質温順にして篤實なり、特に責任觀念強く夙備日淺きに拘らず、献身的勞力を惜まざるため隊の將兵之を愛用したり。七造軍隊と行動を共にし、敵に對し奮戦して身命を君國に奉ず、在郷兵士の面目を完したりと謂ふ可く七造も亦本懐ならん、七造妻あり、ヒサ子と呼び一子を遺し信男と呼べり、母子の健在と多幸を禱る。(佐藤)



陸軍々屬勳八等 深田鐵太郎

深田鐵太郎は山口縣下關市大字關後地村の出身にして、父を橋本卯右衛門、母をイチと云ひ、明治二十三年二月五日の生なり。故ありて深田家に養はれ、養父を亡ひ、母ユリに仕へ孝養す、明治三十七年三月福岡縣足立高等小學校を卒業し、



次で神戸市育英中學に入校、三年修業の後退學し、爾後農及び漁業に従ひたりしが、明治四十三年徴兵として歩兵第十四聯隊に入營し、後憲兵科に轉じて大正元年憲兵上等兵となり後伍長に進む。朝鮮咸鏡道地方に服務して大正七年に至り、後警察官警部に兼任し、翌年九月豫備役に編入せらる。大正三年乃至九年戦役の功に依り賜金あり。又警察事務の功勞に依り屢々授賞せらる。昭和七年十月軍に雇傭せられ、哈爾濱憲兵隊にありて筆生として事變に關する事務を補助しありしが、翌八年二月以降馬匹の取扱ひを命ぜられ、能く上官の指示を遵奉し、表裏なく職務を忠實に行ふに止まらず、時々憲兵の補助として便衣隊の搜索檢舉等に係はり、勇敢機敏に動作して功績顯著と認められたり。

昭和八年二月熱河作戦の開始せらるゝや、第六師團に配屬せられたる憲兵隊に屬し、馬匹の保護に當り、又時としては

便衣隊の捜索檢舉を補助し功績あり。同年三月十九日以降は川島憲兵長に従属し、赤峯に在りて服務し、四月十二日以降は歩兵第十一旅團配属の憲兵隊内に在りて本作戰に参加せり。即ち下士官兵十六名備人九名にて林憲兵長の隷下に在り、冷口より凌源に向て行軍の途次、四月十二日凌源縣北墟に於て敵匪約六百名のため夜襲せられたり。此時鐵太郎挺身して憲兵の間に伍して防戦に努め、一面には滿人馬丁を激勵して軍馬を警戒しつゝ奮戦す。然るに敵は盛に我を砲撃し、就中馬撃場は砲彈の爆煙を以て包まれ、馬匹は苦痛に堪へずして狂騒す。此の實況を目撃したる鐵太郎は敢然として馬撃場に入り、各馬を繋留しある頭絡を切断して馬匹を放たんとし、其の作業進捗中、不幸敵の一彈は鐵太郎の大腿部を貫通したり。鐵太郎尙屈せず作業を繼續したるに敵の第二彈は其の頭部を貫き遂に起つ能はず、壯烈なる戦死を遂げたり。然れ共この鐵太郎の勇敢なる行動は、隊員の志氣を鼓舞し遂に敵を撃退するを得たり。鐵太郎功績優秀と認められ、後日左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

鐵太郎妻を久子と云ひ、信子、勝枝、徹一、富美子、幸雄、滿里子の二男四女を遺し、下關市入江町一二六番地に現住す。母子幸に健在なれ。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 中條 傳

中條傳は香川縣高松市花宮町の出身にして、父を次五郎、母をツネと云ひ、明治四十年十月二日生なり。大正九年三月川東尋常高等小學校を卒業し、昭和三年八月一日補充兵として丸龜歩兵第十二聯隊に入營し、同年十月三十日歸休退營す

昭和六年九月十八日安東保線路方として軍に備入せられ、同日より滿洲事變の業務に従事し、七年七月二十日獨立守備歩兵第四大隊事務囑託を命ぜられ、同年八月三日高麗門附近に於て名譽の戦死を遂げたり。其の戦歴の概要を左に記す。

昭和六年十一月二十八日李福田の率ゆる約四十名の匪賊を討伐するに當り「モーターカー」運轉手として討伐隊を輸送し、爾後嚮導となりて其の巧なる支那語を以て情報の蒐集に勉め、逃走中の敵を發見して之に大打撃を加へて潰走せしめたり。爾後七年七月下旬に亘りては安東保線の鳳凰城

線路方として服務し、「モーターカー」運轉手を兼ね、恪勤精勵にして功績優秀と認められたり。

昭和七年八月三日鳳凰城—五龍背間獨立守備歩兵第四大隊第四中隊線路巡察長武井軍曹指揮の下にあり、「モーターカー」を運轉し午前八時三十五分頃高麗門驛北方約五軒附近の切取部を進行中、兩側高地上至近の叢中に潜伏せる優勢なる匪賊のため、猛烈なる射撃を受け全身に散彈を被り、一時意識不明となりしが巡察兵は敵を撃退し、連絡の爲一部を以て高麗門驛に通



報せんとするや、旺盛なる責任觀念と不撓不屈の犠牲的精神に充ちたる傳は、意識を回復して運轉を繼續せんとし「ハンドル」を握るも再び昏倒せんとする状態なりしが、勇氣を鼓して守備兵の補助により運轉を続け、高麗門驛に到着せり。然るに運轉中の出血甚だしかりしたため、再び昏睡状態に陥り、同日午後一時十五分遂に絶命せり。傳の勇猛果敢なる動作

に依り速に中隊の出動を見るに至り、其の功績優秀と認められたり。

傳戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

傳性質温厚にして寡黙、忍耐心に富み勤儉力行す。父母に仕へ孝養怠らず、妻あり文子と云ふ高松市の傳が宅に現住す。健在なれ。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 二宮源吾

二宮源吾は、愛媛縣伊豫郡松前町大字北黒田の出身にして、父を常助、母をチヨと云ふ。明治二十六年六月八日生なり。明治四十一年三月松前尋常高等小學校を卒業す。幼にして父を喪ひ、家素より豊裕ならざりしため、小學校卒業後は伊豫染物業の染職工となり、大正十二年頃迄其の職に忠實に勤め、同業組合より再度の表彰を受けたり。性質極めて温順篤實進んで他人の事を世話するの慈愛深く、在郷の日、青年間の中堅となりて衆望を集めたりき。

昭和六年九月二十三日軍備人として採用せられ、歩兵第三十聯隊第一大隊配屬を命ぜらる。同月二十二日より吉林附近の警備隊に従ひ、主計の命を受けて宿營の設備、糧秣諸品の調辨蒐集等に當り、聯隊將兵の給養はつき貢獻する所少からず。同年十一月十三日より同十八日に亘れる昂々溪附近の戰闘に際しては、糧秣薪炭の調辨に關し東西奔走し、聯隊の烏諾頭站に於て小興屯の敵陣地に對し、攻撃の準備を爲すに方ては、水口主計の命を受けて、大興驛に集積せる多量の荷物を監視の任務に服し、次で之を數里遠隔の地に運搬し功勞多かりしが、十一月十七日夜彈藥糧秣の運搬中、使用の貨物自動車道を失し、沼澤中に陥没せしを兵士と協力して、之を引揚げたる等其の艱苦名狀し難きこと少からず、然るに源吾率先

難きに當りて勞苦を辭せず、一誠以て終始せる功績は之を確認すべきものなり。十一月中旬中、聯隊主力が馬占山討伐の爲め出動北進中、殘留兵員の僅少なるに際し、同月十七日敵の有力なる騎兵の來襲あり、又翌十八日は歩兵約百五十騎兵約四百の敵より攻撃を受けたる際、二宮主計の指揮を以て、全員一致協力、機關銃、手榴彈等により極力防戦したるも、敵は火を放つて益々攻撃し來り、主計以下全員枕を並べて悲壯なる戦死を遂げたり。源吾功績優秀と認められ左の如く恩賞あり。

功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

源吾は身軍屬たるも、其の職務に殉じ、一死以て君國に奉じ、日本男兒の本領を發揮して遺憾なし。當時の聯隊長坪井少將は東京に凱旋の後、某所の講演會に於て講演中、聯隊の主計以下十七名が全滅したる悲壯の行動、是れ即ち琵琶唄「北滿の嵐」なり。此戰闘の際源吾は敵と折重つて斃れて居たと述べられたりと云ふ。源吾最後の奮迅推して知るべきなり。(佐藤)



陸軍々屬勳八等 藤田 實

藤田實は、愛媛縣越智郡高窪村大字山田の出身にして、父を鶴吉、母をマサと云ひ、明治四十一年一月二十九日生る、

大正十一年三月宮窪尋常高等小學校を卒業し、昭和四年一月歩兵第二十二聯隊に入營し、千葉陸軍歩兵學校に入校通信術を修め、歸隊して上等兵に進められ、昭和五年善行證書を授けられて、歸隊除隊次で豫備役に編入せらる。昭和六年十一月五日歩兵第四聯隊に編入せられ、爾後滿洲事變に關する業務に従事したり。



昭和六年十一月五日より同月十九日に亘れる齊々哈爾及昂々溪附近の戦闘に際しては、聯隊經理官に隸屬し、急劇なる移動に伴ふ給養の繁劇なる事務を補助し翌七年一月末より同年四月中旬に亘り哈爾濱附近の戰鬥及び方正附近に於ける匪賊掃蕩に際しては、同じく經理官の指揮下に在りて、匪賊の横行頻りなる危険地方を來往して糧秣の徵收其他の要務を辨じ、献身的に精勵して功勞鮮なからず。同年五月中旬より九月末に亘りては、聯隊主力の緝捕方面討伐に従ひて出勤し、泥濘膝を没するの惡路に於て、聯隊大行李と行動を共にし、經理官を輔佐して備役馬夫の督勵に勉め、次で敦化附近の警備に方りては、經理官を助けて物資の調達其他の業務に服し、刻苦精勵、其功績顯著と認めら

れたり。

同七年十月一日より同年十二月末に至る間は人煙稀薄にして兵匪の危険最も大なる、吉敦及び敦圖沿線各地に分駐しある各警備部隊に糧食の補給に當り、屢々危険を冒して經理官の業務を助け、酷暑に耐へつゝ日夜精勵努力、以て諸隊の給養をして遺憾なからしめたる功績は優秀たるべきものなり。同十二月末歩兵第四十七聯隊に轉じ、其の後翌八年二月二十七日に亘り、敦化の警備中聯隊經理官の命を受けて給養、徵集等の業務に従事せしが、二月二十七日大杖子に於て宿營中、土匪のために襲はれ遂に戦没したり。實、戰功に依り左の恩賞あり。

功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。
實、性質溫良にして篤實なり。家素より裕かならず、實三歳の時母眼を病みて入院し、實、歳僅かに學齡に達し二弟を守りつゝ某種の手仕事をなして學資を助け、稍々長じては山に入りて薪を採り、又は石を出して若干の金錢を得、夜は草履草鞋を造りて家計を助く。然るに不幸なるかな實十四歳の時父も亦病床に臥せり、實は毎朝未明に約二十町の山路を過ぎて不動尊に詣り、父の平癒を禱りて、二十一日間跣足の祈願を爲したりと言ふ。入りては父母に至孝を盡し、出でては身命を捧げて君國に報ず、實の如きは眞に國民の軀體たるべきものなり。筆者は實の不遇に同情すること切にして、特に其の武勳の赫々たることを感ずるものなり。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 濱地 定成

濱地定成は、福岡市大字馬出の出身にして、父を寅雄、母をミチとし明治四十二年三月二十二日生なり。大正十一年三

月撫順小學校高等科一年を修了、大正十一年四月奉天中學校へ入學し、同十一年十一月都合により退學し、昭和三年十二月一日大連市北大山通日支自動車研究所へ入所し、昭和四年一月三十一日同研究所を卒業、同六年十一月一日奉天憲兵隊へ「サイドカー」運轉手として採用せられ、爾來同隊下なる奉天商埠地同分隊に在りて服務し、同月十九日齊々哈爾濱兵分隊に配屬せられ、更に又十二月十一日新民屯分遣所にありて警備の勤務に服したり。此間能く上長の命令を遵守し日夜恪勤其の職務に精勵し、時としては憲兵と共に危険なる地域内に入りて搜索又は調査等を行ひ、勇敢機敏に行動し、憲兵の業務遂行を助けたること鮮少にあらず、其の功績顯著と認めらる。



昭和七年一月四日午後七時半頃新民屯の奉天街道上東門附近に五百餘の兵匪襲來せりとの情報あり。其の情況を確むると共に、現地に於ける支那側警察機關指導の任務を受けたる憲兵須田伍長、及び小川上等兵の

乗車せる「サイドカー」を運轉して勇躍出發し、現場の手前約五百米に達したる時、須田伍長の命に依り車を停め、爾後徒歩して同伍長に隨行前進中、午後八時頃俄然道路の側方より六七十名の匪賊の襲撃を受けたり。事急にして之を避くべき方法なき場合に立至りしが、伍長の命に依り一方の血路を求めて此の情況を憲兵隊に報告せんとし、猛然起ち上りたる一刹那敵の一弾は定成の右大腿部を貫通したり。定成屈せず敵の猛火を湛りて馳驅するうち遂に人事不省に陥りて倒れた

り。斯くて十數分の後救援隊到着し軍醫の手當を受け奉天衛戍病院分院に收容せられたるも、同月六日午前六時十分遂に絶命せり。定成の戦功優秀と認められ左の恩賞あり。

功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。定成性質温厚にして責任觀念旺盛なり。軍屬として職務に盡瘁し、報國の至誠を盡して國事に殉じたり。素より男兒の本懐なるべしと雖も、此の好個の青年を失ふ洵に惜むべきなり。遺族は兄喜久雄外一同撫順北臺町に現住す。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 杉本貞吉

杉本貞吉は、京都府加佐郡舞鶴町字北田邊の出身なり。父を八郎、母をゑいと云ひ、明治十九年七月生なり。郷里の小學校を卒業し、後明治三十四年頃京都に出て獨逸語學を修め、明治三十六年東京に於て支那語を學ぶ。性質豪宕にして細事に拘泥せず、弊衣を意とせず大道を測歩するの風ある快男兒なりき。嘗て北鮮地方に於て警察官となり國境守備の任に當り、爾後滿鮮の地に在りて、帝國同胞の擁護のため一身を犠牲にして努力する事十數年。偶々滿洲事變勃發するや昭和六年十二月十四日鳳凰城守備隊に出頭し、我軍のため奮闘したき旨申出で、直に臨時通譯として採用せられたり。

當時鳳凰城には劉鐵梅、李福昌、徐文海の兵匪各々二三百宛あり。就中徐は猖獗にして時々鐵道に危害を及ぼし、又鳳凰城に來襲し暴虐甚だし。貞吉小隊に配屬せらるゝや、得意とする鮮支語を用ひ、密偵の使用、支那側との交渉、公安隊、自衛警團の指揮等につき守備隊長を輔翼すること甚大なりしが、十二月十六日より匪首徐文海一味の情況を搜索すべき任務を受けて、鳳凰城東方約六里に潜入す。貞吉の意中には徐文海を暗殺し、以て其の一味を解消せしめ以て禍根を永遠に除

かんと悲壯なる決心を定めたるなり。即ち支那人を粧ひて單身徐文海の根據地を來往し、治安局の電話を用ひ又筆記の報告を以て、數々有利なる報告を提出し、十二月二十一日守備隊主力を以て大堡附近討伐の際に之を嚮導して討伐隊の行動を便にし、守備隊は目的を達して歸還の後、貞吉は依然として大堡の某鮮人宅に潜匿して搜索を續行し、數日の後略々徐



文海の情況明かとなり近々暗殺を決行せんとする際、十二月二十三日午後九時頃徐文海の部下三四十名の襲來を受け、家屋を包圍せらる。貞吉脱出を企圖せるも能はず、拳銃を發射しつゝ奮闘約三十分に亘り、遂に敵弾に中りて壯烈なる戦死を遂げたり。
以上の如く勇敢機敏、單身敵地に潜入し、克く献身的努力をなし、一死を以て君國に奉じたる功績拔群なり。其の活動に依り得たる情報は頗る有價値にして、之に依り守備隊の行動適切なるを得て、徐文海一味をして鐵道及び附屬地に襲來の機會を與へず、其の功績

や洵に優秀なりと謂ふ可し。

貞吉戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 本多信義

本多信義は、茨城縣那珂郡村松村大字村松の出身にして、在郷歩兵上等兵なり。父を秋太郎、母をあきと云ふ。明治三十七年十二月十日生なり。大正六年三月村松尋常高等小學校を卒業し、後水戸遠山氏につき修學す。性質温良にして篤實、



父母に仕へて至孝なり。大正十四年一月十日近衛歩兵第一聯隊に入營し、上等兵に進み善行證書を授與せられて滿期除隊す。爾後郷里に在りて農業に従事し、昭和四年渡滿し、滿洲國巡察となりて奉天署に奉職し幾許もなく退職す。恰も滿洲事變勃發に際し、昭和六年十二月二十七日備人として雇傭馬夫の監督を命ぜられ野砲兵第二十六聯隊第二大隊本部に配屬せらる。同日錦州方面に出動のため鐵道輸送に際し、馬夫を督勵して糧秣其他の補給を圓滑ならしめ其の功績顯著とす。

昭和七年一月六日より同七日に亘りては、關東軍輸送監視隊に屬し、在錦西騎兵第二十七聯隊に糧秣輸送に任ずるや、馬夫監督として同行し、支那語を能くするを以て直接馬夫の監督指導に任じ、小隊長松尾少尉を輔佐して無事錦西に到着し、任務を完うしたるは功績鮮少なからずとす。然して越へて一月九日監視隊は錦州歸還の途に就くや、小嶺子東南方高地附近に於て匪賊約八百名と遭遇したり。此時信義は沈

着して支那人夫を統制し、自ら拳銃を取りて監視隊一同と共に奮戦激闘し、遂に隊長以下全員と共に枕を並べて壯烈なる戦死を遂げたり。

信義戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

信義軍人の身分にて在隊しあらざりしを遺憾とするも、將兵の間に伍して奮戦し、赫々たる戦功を建て、名譽の終焉を告げ、在郷軍人たるの本領を發揮して遺憾なし、信義たるもの亦厭すべきなり。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 全學用

全學用は、朝鮮慶尙南道蔚山郡大峴面古沙里の人にして、父を全順出、母を徳善と云ひ明治四十五年三月十七日生なり。大正十五年三月郷里の普通小學校を卒業し、家産裕ならざりしため、十八歳の時自動車運轉を習得し、次で同業に従事しありしが、昭和八年四月滿洲派遣隊附自動車運轉手を命ぜられ、間島出動部隊に従軍し、同年五月二十七日より六月十五日に至る間東部大吐川子守備隊に配屬せられて、國界線工事掩護其他の任務に服し、献身的に活動し、自動車を愛用し、常に之れが保護を怠らず、適時の使用に寸毫支障なからしめ、功績顯著と認めらる。

昭和八年六月十六日小汪溝、馬村附近の戦闘に参加し、數次の困難なる渡河作業を行ひて活動す、殊に馬村附近の戦闘に方りては自ら銃を執りて、勇敢に奮闘し遂に敵弾を腹部に受けて入院せり。全學用の勇敢機敏なる自動車の運轉に依り馬村に到る道路は「トラツク」を通じ能ふの確信を得て約五里に亘り我軍の勢力範圍を擴張したるものなり、學用功績優秀と認められ負傷後二日遂に落命せり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

全學用性質温厚堅實にして、父母に仕へて至孝、幼少の時より隣人の賞讃を受けたりと、將來有爲の青年を失ひたるを悼まざるを得ず。遺族は古沙里の學用が宅に現住す、老父母始め一同の健在を禱る。(佐藤)

陸軍々屬 大財常一郎



大財常一郎は、愛媛縣北宇和郡成妙村大字黒川地の出身にして、父を藤太郎、母をイエと云ひ、明治三十五年三月十四日生なり。大正五年三月郷里の尋常高等小學校高等科を卒業し、大正十一年十二月朝鮮京城なる歩兵第七十八聯隊に入營し、同十三年憲兵に轉科し昭和四年憲兵伍長を以て退職、郷里に歸りて實業に従事せしが、昭和八年三月一日間島臨時派遣隊憲兵隊筆生として奉職し、同年九月三十日に至れり。此の間極めて熱心眞面目に庶務經理の係官を輔佐しつゝ其の事務を處理し、憲兵の行動を補助し、以て少數兵員の憲

兵をして多端繁劇なる業務の遂行を容易ならしめ、其の功績顯著と認められたり。

昭和八年九月三十日豫て志願しありし滿洲國警察官を拜命し、興安西省開魯警察局に在り、開魯縣警務指導官を命ぜられ服務中、昭和九年三月三十一日開魯縣道德營子の西南方約五里なる丘陵沙漠地帯に於て匪賊と交戦中戦死せり。同日開魯警察局警佐に進級す。

常一郎性質温厚にして剛毅、容姿端正にして寡言なり。事に當りて熱心精勵、其の職責を重んじ、奉公の至誠を以て其の一生涯を終始せり。好個の青年今や亡し惜むべきなり。(佐藤)

陸軍軍屬 奥瀬富藏

奥瀬富藏は、青森縣三戸郡北川村大字斗賀の出身にして、父を圓次郎、母をキヨと云ひ、明治四十四年十月十日生なり。大正十三年四月北川村立剣吉尋常高等小學校高等科第三學年を卒り、昭和二年四月上京して、神田駿河臺高等豫備學校中等科に入校せしも、同年十二月家事の都合に依り退學し、昭和五年一月現役志願として、弘前なる野砲兵第八聯隊第七中隊に入營し、軍務に勉勵して成績優良のため、同年七月砲兵一等兵を命ぜられ、同年九月特別觀測手を命ぜられ、翌六年十一月歸隊除隊を命ぜらる。其の後渡滿を志し、實見奥瀬權次郎當時關東軍電信隊に工兵曹長として奉職しあるを幸とし兄の同意を得て、昭和七年九月渡滿し、奉天にありて關東軍假豫備馬廠に勤務し、次で同八年三月十三日關東軍野戰兵器廠に軍屬として備入せられ、同廠器材部倉庫に於て器材の發送受領に従事、一意専心其職に忠實なりしが、同三月十三日鐵道第一聯隊より修理器材九一式動力鑿井機を構内貨物ホームより器材工場に運搬中、線路に躓ぎ左足脊左臀部左側腹部左側胸部を鑿井機の後部右側二重輪外側タイヤにより受傷せしも、少しも屈せず、尙ほ依然として任務を遂行せしが、重

傷のため遂に起つ能はず、同八年三月二十四日遼陽衛戍病院奉天分院に於て死歿したり、其の功績を認めらる。

富藏性質温順にして寡黙、態度謹嚴なり。幼くして學を好み、常に英雄立志傳等を耽讀し、獨立自營の志を立て、現役を志願し次で下士官志願の豫定なりしが、故ありて果さず、國家非常時に際し、君國に報ゆる所あらんとして渡滿したるものなり。富藏身軍籍にありながら、戰場に於て華々しき最後を飾らざりしことは誠に同情に値す、然れ共天命は避け難し、戦地に於て事變に關する業務に關し、公務履行中共職に殉じたる行爲は、以て戦死に次げる名譽なり、富藏たるもの亦厭して可なり。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 河村音市

河村音市は、愛媛縣宇摩郡小富士村中村の出身にして、父を淺吉、母をフジと云ひ、明治四十四年九月二十七日生なり。大正十三年三月小富士村尋常小學校を、同十五年三月同地高等小學校を卒業し、青年訓練所に入所し成績良好を以て其の業を修了し賞詞並に表彰を受く。性質温良にして地方青年の模範と稱せられたり。昭和六年補充兵として輜重兵隊に徵集せられ、所定の軍事教育を了り、爾後家業に従ひたりしが、昭和八年七月十八日野砲兵第十聯隊第二大隊に備入せられて、翌十九日吉林を出發し、途中匪賊の討伐を兼ね、實業調査團を掩護して、帽兒山の森林及夾皮溝の金鑛等を調査し、八月一日官衙に入城するまで十四日間の長途行軍に於て、中隊配屬の迫撃砲分隊の馬夫頭として、能く備役馬夫を督勵し、雨期に於ける難路の行軍に支障なからしめ、其の功績顯著と認めらる。

八月中旬官衙に入城して後、中隊が棒甸の警備として専ら棒甸縣の治安維持工作に従事する、其の對匪行動に従ふこと

四回、常に精勵にして其の職責を盡し、砲兵隊の行動に支障なきを得せしめたり。九月一日軍屬となり同月四日柳田小隊に従ひて出動す。同小隊は糧秣輸送駄馬を掩護して黒石嶺に至り、磐石部隊に返還し、歸途呼蘭街、角子溝、外梨樹溝附近を掃蕩す、其間蛤蟆糖及外梨樹附近に於て、前後二回宗國榮、毛作彬の衛隊を襲撃して武功を奏したりしが、偶々九月七日午前五時榆木頂子の宿營地に於て、出發準備中四周より敵匪の奇襲を受け、晋市は砲隊の彈藥補充を幫助中、敵彈のため腹部貫通銃創を被むり午前九時四十五分絶命せり、功績優秀のため左の通り恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

晋市、砲兵隊在任中能く上官の意圖を體して終始一貫熱心眞面目に服務し、在隊僅か二月内外なりしに拘らず、將兵の信頼厚く、皆其の戦死を惜む之を悼まざるはなし。(佐藤)



陸軍々屬勳八等 關 幸 一

關幸一は豫備役騎兵なり。栃木縣那須郡大内村字盛泉の人にして、父を辰吉、母をキヨと云ひ、明治三十年三月八日生

なり。明治四十年郷里小學校を卒業し、大正六年騎兵第十三聯隊に入營し、同八年十一月滿期除隊となり、爾後家郷に在りて農事に従事せしが、昭和七年三月上海派遣遺倉庫備人として備入せられ、被服糧秣其他の軍需諸材料等の揚陸運搬、格納整理等に従事し熱心精勵にして功績顯著と認められたり。



昭和七年六月二十日より同年七月十日に亘りては、滿洲に於て騎兵第一旅團司令部備人として馬占山軍の討伐に参加す即ち旅團大行李の馬夫を監督し、六月二十日以降克山拜泉、西花園子、海倫等の泥濘深き惡路地方に於て、言語不通なる支那人備馬夫を監督し、大行李長を輔佐して格勤精勵し各隊の糧秣補給に支障なからしめたる功績は以て優秀たるべきものなり。

昭和七年七月八月の交は綏化に在りて、騎兵旅團内の待命各部隊の補給に當り、同年九月十月の交は海倫新京の守備に服し、十月中旬以後は旅團將校の馬丁として東邊道の討伐に参加し、最も忠實に其職責を盡したり。同年十一月六日以後は訥河附近の戦闘及び、黒龍江省中部平地の作戦に参加し、上官の命に従ひ職責に其の職責を完うしたり。同年十一月十七日及び同十八日兩日に亘り乾元鎮附近の戦闘に方りては、同地東北方約三軒の臺上に於て激戦の際第一線の直後に於て、徒歩戦を以て敵を交戦中なる騎兵の乗馬十數頭の手馬持として、服務中、偶々敵彈のため其の腹部に貫通銃創を受は名譽なる戦死を遂げたり。功

績優秀と認められ後日左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

幸一性質温順にして氣概に富む。妻ありハナと云ひ、一女房子を遺す、兩名共に盛泉の幸一が宅に現住す。母子の健在と多幸を稱る。(佐藤)

陸軍々屬勳七等 田邊龍太

田邊龍太は、新潟縣刈羽郡柏崎町枇杷島の出身なり。明治三十七年日露開戦當時滿洲に渡り、一死報國の念止み難く、參謀本部に出頭従軍を志願せり。當時參謀本部には、鴨綠江以北の滿洲地圖の整備なく、ために之が實地測量の要ありとし、地圖測量生班を組織せり。龍太願容れられて勇躍之に加はり其の功績優秀なるものあり、停戦後其の戦功に依り勳八等に叙せられたり。爾後、大半は滿洲に留まりて地圖作製のため、測量に従事みしが、昭和六年九月十八日突如として滿洲事變勃發するや、翌十九日より關東軍司令部參謀部に於て、服務七年九月三日に至る迄奉天にありて、繁劇なる宣傳業務を整理し、當初の數ヶ月間は、殆んど不眠不休の努力を傾注し、克く軍の宣傳効果を助長せしめたり。

就中一般宣傳印刷物の製作及び發送を積極的に處理し毫も遺憾がらしめたり。又司令部内の雜務の連絡に任じ、老齡なるにも、拘はらず克く壯年の備人等に身を以て垂範せり。八月下旬全權の着任後、司令部業務の激増に伴ひ、宣傳業務は更に繁激の度を増し、九月三日、早朝より新聞記者の調査に盡力中不幸司令部階下に於て、昏倒し、腦震盪に依り遂に逝けり。然れども死の直前に至る迄、公務を整然と處理し、司令部業務の進捗に貢献せる所甚大なりし功績は、眞に偉大

なりと謂ふべきなり。公病死の日を以て、陸軍々屬に任ぜらる。遺族は母ノサ、妻ハツ長女ツヤ子なり。

功に依り勳七等青色桐葉章を授け賜はりたり。(澁川)

陸軍々屬勳八等 中村力司

中村力司は、岩手縣和賀郡澤内村大字川舟の人にして、昭和六年九月十八日所澤支部工作班技術掛に製圖手として勤務中、關東軍飛行隊材料廠に派遣せられ、同月二十三日奉天に到着し、同月十一月繞河附近の戦闘に際しては、飛行機の輸送業務に幫助したるが、同年十二月二十二日より、翌七年一月十一日まで奉天病院に入院し、退院の後同月中打虎山附近の戦闘準備に際し、發動機工場に於て發動機の手入並に整備に任じ、又器材の輸送業務に服して精勵し、以上の功績顯著なるものと認められたり。

同七年二月中哈爾濱附近の戦闘準備に際しては、日夜精勵發動機の修理並に手入等に從事し、各飛行隊の戦闘準備を容易ならしめ、同年二月中は飛行第八大隊第一中隊の上海方面に移動のため輸送業務を補助し、同年三月四月中も亦飛行機の手入修理に任じ、又各飛行機出動準備を助けて功績少からず。七年八月二十八日夜半匪賊飛行場を襲撃するや、徹宵飛行場の警戒に任じ、又翌日は格納庫の警備に服して匪賊の再襲來に備へ、此功績を認めらる。然して同年六月二十日關東軍航空廠に編入せられて以後は、發動機工手として勤務し、屢々寢食を忘れて發動機修理作業に従ひ、刻苦精勵にして功績多く、七月十月以降同九年六月に亘りては、同じく發動機工場に於て服務し、上官の意圖に従ひて精勵一日の如くなりしが、六月十一日病に依り遂に死亡せり。

戦功に依り、勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。
力司性質温順にして篤實、常に熱心勤勉にして成績優良なりき。(佐藤)

陸軍々屬勳七等 阿部由太郎

阿部由太郎は、山形縣東田川郡榮村大字家根合字高浦島の人にして、父を興次郎、母をくにと云ひ、明治四十三年三月八日生なり。郷里の小學校並に農業補習學校を卒業し、昭和六年一月現役志願として盛岡なる工兵第八大隊に入營、同年十二月工兵上等兵を命ぜられ、昭和七年四月五日第八師團滿洲派遣編成下令に依り、派遣中隊に編入せられ、四月十二日屯營出發、四月二十日錦州に到着して同地の警備に任じ、同月下旬は敦化附近の戦闘に参加し、五月中は牡丹江の渡河作業、六月七月は寧古塔附近交通路改修等に從事して精勵し、同年六月二日南部干溝子の戦闘には歩兵第七十三聯隊と協力し、爾後錦州に歸還し、朝陽寺北大營打虎山等の各地に於て防禦工事又は道路改修に從事し、精勵にして功績少からず同年十月十一月の交は東邊道討伐に方り、騎兵第二十五聯隊に配屬せられ、分隊長として砲兵隊と行動を共にし、其前進を援助し且つ之が掩護に任じ、次で豐河の渡河作業、桓仁附近の戦闘等に参加し、沈着勇敢に動作して、以上の功績優秀なるものと認められたりしが、昭和八年一月二十九日右手掌を切傷して錦州衛生班に入班し、内地還送となり、七月十二日東京第一衛戍病院に於て、現役豫後備役免除となりしが、同年九月十二日臨時備人として工兵第八大隊に配屬せられ再び渡滿せり。

斯くて錦州に於て所屬の工兵大隊に到着し、馬夫監督を命ぜらる。昭和八年九月十三日、大隊命令に依り返納被服の宰

領として錦州より奉天に出張を命ぜられ、歸還の途次、同月十六日午前五時半頃奉天驛を出發、第一一列車に乗車して午前八時頃白旗堡附近に於て、匪賊の爲列車の運行を阻止せられ、約百名の匪賊より包圍攻撃を受け、匪賊の一部は車内に闖入して掠奪を開始せり。此時二等車附近に在りし、由太郎は匪賊の闖入を阻止せんが爲め敢然匪賊の中に躍り込み、數名を跳倒し、匪賊の銃器を奪はんとして格闘中、敵弾を腹部に受けたるも屈せず尙戦闘中、更に頭部胸部等に數彈を被

り、「残念」の一語を遺して遂に壯烈なる戦死を遂げたり。功績優秀と認めらる。

戦功に依り勳七等に叙し青色桐葉章を授け賜はりたり。

由太郎性質温良にして豪宕、然も細事を忽にせず、事に當りて熱心精勵なり。又弱きを扶くるの義侠心強く、常に人と交りて情誼厚し、一旦除隊となりしも病のため其戦友を残して歸還したるを深く遺憾とし、自ら志願して再び渡滿し、遂に其職に殉じて斃るゝに至れり。其意氣や愛すべく其の行動や敬服に値すと謂ふべし。(佐藤)



べし。(佐藤)

陸軍々屬 阿部三治郎



阿部三治郎は山形縣東田川郡榮村の出身、明治二十六年七月二十六日に生れ、父は池田松藏母は同キヨ、養父は長治、養母はタケ、妻はユキと云ひ、一子恒夫あり。明治四十年三月榮尋常高等小學校高等科を優等にて卒業、資性温厚品行方正にして克く孝養を盡し、衆の範たりしが、大正二年十二月一日徴兵として山形歩兵第三十三聯隊第七中隊に入隊、翌三年九月より四年九月迄天津駐屯軍として勤務し、此間成績優秀にして精勤章を受け、歩兵上等兵に進級、十一月二十三日善行證書、下士適任證書を受け、同二十六日歸隊除隊するや、北海道開拓を志し、石狩郡當別村に移住し、専心農業を勵み、畑地十町歩を所有するに至り、昭和二年同部落に於て水田二百町歩を造成するに方りては、率先組長と共に盡力せし等、公共の爲努力し、衆の信望篤く、又在郷軍人として常に熱心に活動し、又青年の指導誘掖に努め、其功績大なるものあり。

昭和六年九月十八日滿洲事變動するや、勇躍渡滿し、義勇軍に加はり各地に轉戦し、居留民の保護等に活躍せしが、同年十二月二十四日より、關東軍司令部代用馬丁として奉天に駐營し、豫備馬の保育、管理に任じ、始終誠實克く自己の職

務に勵み、馬匹の健康状態を良好に導き、以て戦闘力の保持、増進に貢献し、七年六月二十七日よりは軍參謀竹下中佐の馬丁として、次いで九月四日よりは軍參謀岩畔大尉の馬丁として新京に於て貸與馬の保育管理に任じ、常に表裏なく精勵し以て軍馬の状態を常に良好ならしめ、戦闘力の増進に貢献せし功績は甚だ大なり。

然るに此間病に冒され、十二月二十三日鐵嶺衛戍病院、新京分院に入院、醫療に努められ共其効なく、八年二月十五日遂に胃痛にて永眠するに至れり。

遺族は、北海道石狩郡當別村大字當別太十六線南四號二十番地に居住す。切に將來の多幸を祈る。(加藤)

陸軍々屬勳八等 鹽原留十

鹽原留十は、長野縣東筑摩郡朝日村大字西洗馬の人にして、陸軍航空兵なり。昭和六年九月十九日獨立飛行隊編成下令に依り、同月二十日より十月十七日に至る間留守隊に在りしが、同年十月十八日獨立飛行第九中隊に編入せられ、同日平壤出發、同月十九日奉天に到着、奉天開原牛莊海城附近の敗殘兵搜索の爲、飛行機の整備に任じ、迅速に故障を修理し、又器材係を援助して器材を整理し、以て中隊の出勤に支障なからしめ、十一月中旬々溪附近の戦闘、十一月十二月の交齊々哈爾海倫拜泉克山附近の搜索並に錦州附近の戦闘に方り、飛行機の整備並に器材の整理に任じて日夜精勵し、中隊の作戦行動に些の遺憾なからしあたり、以上の功績優秀とす。

昭和七年一月中は奉天海城鳳凰城附近一帶の匪賊掃蕩に参加し、又打虎山附近掃蕩の爲第二十師團に協力し、二月中は奉天附近及び教化附近の匪賊掃蕩に方り、材料掛助手として器材の整理、機能點檢等に當り、熱心精勵時々徹夜にて業務

を繼續し、又屢々原野に於て凜冽たる寒風に暴露し、辛酸勞苦筆舌に堪へたり。四五月の交は第二師團に協力して、哈爾濱附近、歩兵第十五旅團に協力して齊々哈爾附近に活動し、又哈爾濱附近に於て第十、第十四師團の作戰を援助し、六月七月の兩月に亘りては哈爾濱北方地區に於て馬占山軍の掃蕩に當り、飛行機の整備、器材の整理に當り、不眠不休の奮闘を以てし、中隊の戰闘行動を容易ならしめ、以上の功績優秀と認められたり。

同七年八月十五日編成改正に依り原隊復歸を命ぜられ、同日齊々哈爾出發、同月十八日平壤なる原隊に歸着し、同月二十二日滿期除隊となりたるが、翌二十三日飛行第十六大隊材料廠に備入せられ、同月三十日再び齊々哈爾に到着、爾後九月末に至る間、安達站昂々溪大興附近の李海青匪賊討伐、同年十月より翌八年四月に亘りては、富拉爾基、齊克沿線、拜泉縣、大興安嶺附近の反滿軍及兵匪討伐に参加し、此間主として材料廠の器材庫に於て服務し、克く器材係の命を守り、終始一貫、大隊の戰闘行動に支障なからしめ、且大一線各中隊の戰闘目的達成に貢獻する所多大にして、此功績も亦優秀と認められたりしが、八年四月十四日胃療療の疑にて齊々哈爾第十四師團衛生班に入班、同月十七日絞扼性腸閉塞病に依り死没せり。

戰功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

留十、性質溫順にして義務心強く、事に當りて熱心、又細事に至り注意周密なり。入營以來精勵にして成績優良、殊に器材に關する技能優秀なるため、特に材料廠に備入せられて再び渡滿したりしに、病のために斃れたるは洵に惜むべきなり。

(佐藤)

陸軍々屬勳八等 本間 儀治

本間儀治は秋田縣仙北郡大曲字黒瀬の人なり。平壤なる飛行第六聯隊に入營中、昭和六年九月十九日出動命令下るや、之が業務に従事中獨立飛行第十中隊に編入せられて、同日平壤を出發し、同月二十日奉天に到着し、日夜飛行機の整備、議器材の整備に當り、又押收機の整備を命ぜらるゝや未知の機體發動機を研究整備して作戰の用に供する等、地上勤務者として其功績優秀たりしが、十月二十日復員のため原隊に復歸を命ぜられ、同月二十三日平壤に歸着せり、然るに同年十一月十七日再び獨立飛行第十中隊に編入せられ、同月二十三、二十四日兩日湯崗子附近の戰闘に際しては、中隊一部の出動準備に當りて、晝夜之れが準備に當り、次で歸還飛行機の點檢補充等に任じて連日間不休不眠の精勵をなし、又同月二十七日遼陽河附近の匪賊討伐の爲中隊の一部急遽出動を命ぜらるゝや、夜間不完全なる照明下に於て、酷暑を冒して携行器材爆彈等の梱包運搬等に從事し、至短の時間に之を完了して大石橋に至り、飛行場の設備(天幕建設等少數人員と共に、迅速に之を完了したるに、翌二十八日早朝奉天に歸還を命ぜられ、再び急遽飛行場を撤退して歸還せり、以上の功績優秀と認められたり。

同六年十二月中は通遼附近戰闘の爲中間着陸場の勤務をなし、同月下旬より翌七年七月五日に亘りては錦州附近戰闘の爲地上勤務者として、飛行機の整備其他の業務に當りて精勵し、此間に於て一月中打虎山前進飛行場勤務員として、服務し、二月中は巴彥柳板站方正等の戰闘に地上勤務員として奮勵し、三月中東京城附近戰闘間中隊は教化に前進するに方り、携行器材爆彈等の梱包積載並に、押收飛行機三機の飛行準備をなし、以て出動に支障なからしめ、三月より五月に亘り農安通遼等の戰闘間殘留員として、同年五月中額穆附近の戰闘間地上勤務員として精勵し、殊に同年六月二十日は小城子附近

の攻撃に歩兵第二十九聯隊に協力するため三番機の爆撃手として同乗を命ぜられ、通化爆撃を有効實施し、以て友軍の同地入城を容易ならしめ、此功績優秀と認められたり。

斯くて昭和七年七月九日編成改變に依り再び平壤なる原敵に歸還し、同月十三日滿期除隊となり、同年九月十日軍屬として關東軍野戰航空廠に傭入せられたりしが、同八年九月十三日自宅に於て病歿せり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

儀治性質温順にして事に當り熱心奮勵す。殊に器械類に關する思考力に至りては、稀有なる特長を有し、其の精勵振りも又常に案に擢んじたり。屢々發動機の分解手入直に機體に装着して翌日の戰闘を遂行せしめ、又は豫備品なき飛行機を深夜補修し、四周の兵匪より脅かされつゝ作業を續け曉晨飛行準備を完了して爾後の飛行に支障なからしむる等、其苦心精勵多く類を見ざる所なり、然も其の取扱ひたる飛行機は、飛行中決して故障を起したることなし、斯の如く成績優秀のため特に除隊後拔擢せられ、航空廠に軍屬たりしが、遂に病歿し上下皆之を惜み悼まざるものなかりき(佐藤)

陸軍々屬勳八等 大波多五郎

大波多五郎は大分縣西國東郡高田村大字美和の出身なり。昭和七年八月十八日齊々哈爾濱憲兵隊雇員(通譯)として採用せられ、滿洲事變勤務に従事し、同十月一日より克山憲兵分遣隊にありて克山の警備並に治安維持に任じて同十二月十日に及びしが、此の間、拜泉駐屯江省軍歩兵第三旅の叛變並に鄧文、火龍、南廷芳匪等連合克山襲撃の情報あり、加ふるに市内に便衣隊匪賊等侵入し、連夜我が歩哨を狙撃し各所に強盜侵入金品を強奪する等人心動搖し、治安漸く紊れんとするの狀

況裸に、城内外の防備警戒、市内の檢索、諜報、諸情報の蒐集等に當り、上司の命を受けて克く通譯としての任務を果し又滿洲國警察に對する指導に任じて克山縣公安局、同警備隊を指導し、警備狀況を監督し、憲兵の巡察檢索、情報蒐集、車馬、苦力、器材、宿舍等の徴發を適切ならしめ、特に諜報及び情報蒐集に任じては、馬占山の行動、樸炳珮、南廷芳其の他反軍の策動配置、並に重要人物の向背を迅速確實に諜知して軍作戰の資料に供せしため、軍は常に機先を制して匪軍の乘ずる機會なからしめ得たり。尙ほ此の期間屢々戰闘に参加し、殊に同年十月二十一日第一次克山戰闘に當りては、憲兵に従ひ前日來諜報の蒐集に没頭し遂に「本夜二十日夜」必ズ克山ヲ襲撃ス」と豪語せる匪賊の言を確め警備隊長に通報して軍策戰の重要資料に供し、一面自隊の警備を嚴にし、滿洲國警察機關を指導して克山城内外の警備を嚴にし、便衣隊の捜索、流言蜚語の取締を行ひ、在留邦人を避難せしめ、克山城内の警備を完全にし軍後方を安全ならしめ、以て我が警備の戰闘を容易ならしめたり。斯くて敵擊退後は敗殘兵匪の掃蕩、隱匿兵器の押收、捕虜の取調をなし遂に治安を恢復せしめしが、此の間終始最も勇敢且つ積極的に活動し、優秀なる功績を擧げたり。又同十一月二日の第二次克山戰闘に際しては、同日午前零時迫撃砲を猛射しつゝ六百の敵匪城内に侵入し、歩哨線外にありし我が憲兵を、衝いて、一舉に警備司令部を抜かんとし、午前零時二十分頃、憲兵隊西方大十字路橋梁附近より數百來襲せしが、多五郎は機を失することなく各方面の連絡に當り、分隊長を輔佐して各種の情報を蒐集せしかば、間斷なき敵の來襲を都度克く擊退し得、次いで午前六時三十分久川憲兵軍曹以下八名と共に、歩兵第五十九聯隊猪野小隊と協力し、克山十字路西南側地區方面にある敵の掃蕩を命ぜらるゝや、勇躍出發敵を求めて連際街十字路に到りし時、約三百の匪軍は前面及び右側の堅固なる家屋及び銃眼ある土壁を利用しつゝ至近の距離より猛弾し苦戰に陥り猪野小隊長、久川軍曹等負傷せしが、多五郎は克く上長の命に従ひ、彈雨を意とせず奮戰し、或は負傷者を救護して安全地に收容し、且つ志氣の振作に努め、遂に堅固なる家屋並に土

壁數ヶ所に據れる數倍の敵に熾滅的打撃を與へて、之れを撃退し速に治安を恢復し得しめたり。其の功績眞に偉大なりと謂ふべきなり次いで同年十二月十三日より同八年一月十八日に亙る間は、第十四師團配屬憲兵通譯として札幌に位置し、同地の警備に任じ、次いで同十九日より、臨時札幌屯憲兵分隊滿語通譯として同地の警備に當り、身を挺して良く難局に當り、治安の維持に貢献せり。次いで同四月九日以降は札幌屯分遣隊通譯として、依然同地の警備並に、治安維持に或は治安警察に任じて同九年三月末日に及びたり。此の間終始一貫献身的に精勵努力以て治安確保の任務を完うし、殊に反滿抗日分子の策動を斷ち、軍の行動を容易ならしめたる功績又赫々たりと謂ふべきなり。然るに不幸偶々疾病に犯され加療中容體悪化し、同九年八月十七日遂に病歿せり。
功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。(澁川)

陸軍々屬勳七等 唐牛禮吉

唐牛禮吉は青森縣弘前市大字桶屋町の出身にして、千代吉の養子なり、妻チヤとの仲に睦男、フミエ、幸子の三子あり。明治二十九年三月二十五日を以て生れ、普通教育終了後教員養成所に入學し、同所卒業後は小學校教員として奉職し、大正三年十二月一日現役志願兵として歩兵第五十二聯隊に入營、大正九年累進して軍曹となり、弘前聯隊區司令部附、十一年十一月曹長に進級、十四年十二月一日除隊、同月二十四日勳八等に叙せられ瑞寶章を授けらる。
昭和七年四月五日第八師團滿洲派遣編成下令せらるゝや、翌六日第八師團臨時雇員に採用せられ、同月十二日勇躍弘前を出發、大連に上陸し、二十日錦州に到着せり。十月一日より八年二月十九日に亙りては遼西の警備に任じ、引續き師團

司令部功績調査に關する事務に服し、第一次功績假締切の爲め頗る繁忙にして、連日夜遅くまで執務せる結果疲勞困憊極度に達するも、益々勇を鼓して終始一貫その任務を完うせり。

二月二十日以後功績書類の整理に任じ、熱河作戰開始より、不眠不休多數の功績書類を整理して、出發準備に遺憾なからしむると共に、出發直前新京に出張して、功績事務の打合せ並に功績上申書類の補修に任じ、師團の功績事務をして萬全を期したり。二月二十六日熱河作戰のため錦州出發、途中朝陽凌源平泉を経て承德に至る間、屢々荷物の整理及び宰領に任じ日夜奮勵努力し、師團司令部の移動を迅速ならしめたり。斯くて承德入城後は多忙の折にも、不拘一意専心功績事務を勉勵し、克く主任副官を輔佐し、司令部業務の進捗に努力したるのみならず、日直勤務に服し、夜間廳舎内外の巡察及び臨時の細務に従事し、以て師團司令部警備勤務を容易ならしめたる功績は、實に偉大なりと謂ふべきなり。然るに不幸公務に基因し病魔の犯す所となり、三月二十九日流行性感冒にて第八師團衛生班に入班、銳意治療に努めたるも其の甲斐なく、同三十一日病勢重まり遂に鬼籍に入りたり。眞に痛惜の極みと云ふべし。然れども其の生前に於ける赫々たる功績は不滅なり。
功に依り勳七等瑞寶章を授け賜はりたり。(澁川)

陸軍々屬 三藤雄助

三藤雄助は千葉縣君津郡富岡村上宮田の出身にして、父を政吉、母をカヨと云ひ、明治三十七年十二月十一日に生る。大正六年三月富岡尋常小學校を卒業し、十二月横須賀海兵團に入團し累進して昭和二年五月一等水兵となり、翌三年十一

月滿期除隊せり。此の間大正十五年八月軍艦金剛乗組中、戦闘教練競技に於て射撃幹部付傳令に任じ、艦長より賞狀並に銀盃を授與せられたり。



昭和四年五月東京市芝區濱松町渡邊組運送店に入店、六年一月自動車運轉手免許を得、東京市深川區佐賀町前田運送店に勤務せしが、九月滿洲事變勃發するや、盡忠報國の義心止み難く、志願して七年三月一日上海派遣軍倉庫に備人として採用せられ、同三日勇躍宇品を出發し、八日吳淞に上陸、直ちに吳淞倉庫に到り、九日より給水勤務に服したり。此の間船輪輸送中は宇品に於ける隊屬貨物の搭載並に吳淞に於ける卸下係として率先勞苦を厭はず、積極的に行動し、倉庫主力の輸送に貢献し、吳淞倉庫到着後、給水勤務に服しては清水なき同地附近各部隊が炊事其の他の用水に困難し、而かも第十四師團主力が逐次到着上陸し、同地附近に一泊するを以て給水の要切なる状況裡に、九日午後より十石入給水自動車を徵用し、翌十日より更に一臺を増加して連続往復運行、以て各部隊の給養上多大の貢献をなしたり。

同日給水に關し吳淞倉庫より上海倉庫に書類送達のため、歩兵一等兵武藤晴滿が派遣せられたる際、雄助はリーヤカー式三輪自動車を運輸し、同日午前十一時上時倉庫前に於て、前方より電車並に其の左側に自動車進行し來たり、之れと行

き違はんとせる際、電車の直後より疾走し來たれる一自動車突如電車の右側に進出せしを以て、之れと衝突を避くる爲め除行して道路の側に停止せし瞬間、該自動車雄助の運轉せる自動車の、右後部車輪に觸れたるため、「ハンドル」を右に取られ車體左方に轉覆し、雄助は腹部を激突受傷し、直ちに兵站病院に入院、銳意加療に努めしも其の甲斐なく、三月十三日容態俄に革まり遂に逝けり。眞に痛惜の極みなり。然れども雄助の機敏と勢誠とに依り、書類の送達は完全に達成せられ、吳淞附近部隊の給水は圓滑に實施するを得たり。雄助の功績又赫々たりと謂ふべきなり。功に依り公傷死の日を以て軍屬に進めらる。(澁川)

陸軍之部 陸軍々々屬 李 鳳 儀

李鳳儀は朝鮮慶尙北道善山郡王城面竹院洞の出身にして、父を李守默、母を金校心と云ひ、妻あり權七分と呼び、一子李鏡猗を遺したり。李幼にして郷里の普通學校に學び、日本内地の言語に通曉せるは勿論、支那語を能くし、昭和八年二月二十一日通譯として雇用せられ、歩兵第四十七聯隊に配屬せらるる二月二十一日より熱河作戦第一次の行動として、聯隊本部と共に朝陽に向ふ進軍中、克く上官の命令を遵奉して密偵の指導、情報の蒐集並に其の翻譯等に當り、熱心精勵にして成績優良、聯隊將來の作戰上貢献せるところ少からず。

同八年三月一日より聯隊は第二次行動として、黑水附近の敵を攻撃するに當り、酷暑を冒し積雪を踏みて難路の行軍を共にし、沿道の住民に對する宣撫の事を幫助し、又戦闘に際しては屢々危険を冒して密偵の指導に任じ、功績顯著なり、次で三月六日以降聯隊第三次の行動として赤峯に進出し、同地附近の警備に任ずるに當りては、情報の蒐集に努力し、時

としては自ら密偵となりて、便衣隊の動靜等を搜索し、屢々有利なる報告を呈出せり。斯くて三月十一日午後二時密偵として平泉道上、赤峯の南方約七軒なる二里源に於ける匪賊の状況を視察中、同日午後五時頃何者かに狙撃せられ、下腹部に重傷を被り、同地に在りし支那人に依り聯隊本部に搬致せられ、直に軍醫の手當を受け、次で第六師團衛生班に入班せしも、加療其の効を奏せず、翌十二日午前四時三十分遂に死せり。其功績顯著と認めらる。

李鳳儀性質温順にして責任觀念強く、其の家郷に在るや父母に孝養を盡し、學を好み、進取の氣象に富み、自ら進んで皇軍の爲めに盡すところあり、將來の大成を期したりしも、不幸雄志半にして、遂に國難に殉じたり洵に惜むべきなり。

(佐藤)

陸軍々屬 佐渡谷勝志

佐渡谷勝志は福島縣相馬郡中村町中野字北反町の出身にして、父を政治と云ひ、大正二年三月二十五日に生る。昭和五年三月縣立相馬中學校を卒業し、同八年五月八日關東軍司令部臨時備人に採用せられ、同日より經理部に在りて、渡洲事變の勤務に従事し、同部工務科に於ける八年度工事に伴ふ繁劇なる傳令、或は書類の整理淨書等に任じ、主任者の命を尊重し、熱心其の業務に精勵し、以て業務の圓滑を圖りしのみならず、雜務に服して完全に其の任務を遂行し、偉勳を奏せり。然るに不幸公務に基因する病魔の襲ふ所となり、同九月中旬發熱しありしかば休務を命ぜられしも、折柄事務繁忙なりし爲め自己を省るの暇なく、献身業務に服し爲めに歩行困難の状態となり、同二十日新京病院に入院、銳意治療に力めしも其の効なく、同十月二十五日遂に逝けり。眞に痛惜の極みと謂ふべし。然れども其の生前に於ける勤々、幾多の戦功は千載

の後、克く我が國光と共に八紘に輝き渡らむ、勝志又以て瞑すべきなり。公病死の日を以て特に陸軍々屬職員に進めらる。

(濫川)

陸軍々屬勳八等 中村 瞰



中村瞰は山口縣下關市大字竹崎町の出身にして、父を徳次郎、母をキクと云ひ、明治三十二年一月二十日生なり。大正四年三月京城西大門尋常高等小學校を卒業し、大正十年三月北京同志學會語學校に入學し、同十三年三月同校卒業、北京日本公使館に勤務せり。瞰資性温順にして物慾に恬淡なり。昭和八年二月十七日奉天に於て工兵第六隊附通譯として雇用せらる。熱河作戦のため同月十八日奉天出發、通達に到着す。此の行軍間車輻の徵用、宿營、給養の業務に關聯し、積極的に活動して功績を擧げたり。爾後赤峯に向ふ行軍間は朝風凜冽積雪の砂漠地を踏破すること二百里、具さに艱苦を耐めて尙ほ責任の重大なるを自覺し、或は危険を冒して密偵に任じ、又は微發に従ひて勞苦を事とせず、献身的の努力を盡して常に其任務を全ふし功績優秀なり。

昭和八年三月十七日より同月三十日に亘り長城の線に向ふ行軍に當りては、道路補修工事のため多数の土人々夫等の微用並に指導に當り刻苦精勵せり。然して翌四月十日冷口附近の敵を攻撃するに當りては、危険をも顧みず隊伍に加はりて前進し、敵情地形の偵察に従軍すること數回、常に中隊行動のため有利なる資料を提出したり。此日中隊が亂泥溝の障礙物排除作業を終りて兵力を集結せる際、圖らずも敵の集中砲撃を受け砲弾中隊の集合地に落達炸裂するもの多く、噉不幸にも此の砲弾のため重傷を受け遂に落命せり。噉の行動は勇敢にして其の献身的勤勉は他人の得て做ふべからざる所なり然して遂に任務のために噉れて身命を君國に奉じたり。帝國男兒の魁傑として賞讃に値すと謂ふ可し、噉功績優秀と認められ、後日左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。(佐藤)

陸軍々屬正八位勳八等

中川

勝

中川勝は、高知縣高岡郡新莊村下分の出身にして、父を石之助、母を熊と云ひ、明治三十九年十一月十二日四男として生る。大正八年三月郷里の小學校を卒業し、大正九年土佐中學に入校せしも、大正十四年三月中途退學して、翌四月大阪外國語學校蒙古語科に入學し、昭和三年二月同校卒業、同年四月九龍歩兵第十二聯隊に入營、幹部候補生を命ぜられ、昭和四年四月豫備役に編入せらる。後滿洲に轉任し、昭和五年關東軍司令部雇員に採用せられ、次で豫備役幹部候補生として歩兵第二十九聯隊に勤務演習召集を受け、召集中昭和六年九月十八日滿洲事變勃發に方り、直に同事變の業務に服し、同年九月二十二日召集を解除せられたるも、引續き奉天陸軍機關に在りて事變の勤務に服し、同七年一月三十一日雇員を免

ぜらる。同年三月三十一日陸軍歩兵少尉に任じ正八位に叙せられ、後滿洲國官吏として勤務中、昭和八年八月十三日匪賊の襲撃を受けて戦死せり。以下其の戦歴に就き概要を記さんとす。

昭和六年九月十八日より同月二十一日に亘りては、奉天附近の戦闘に方り、奉天附屬地警備隊長の指揮下に入り、奉天特務機關に在りて、同業務を輔佐し、格勤にして功績顯著なり。九月二十二日以後は、同じく奉天特務機關に在りて、電

報の翻譯、在奉天陸軍機關と軍隊との連絡に任じ、同十四日軍參謀板垣大佐の命を受けて哈爾濱に出張し、九月三十日軍司令部今大尉と同行して洮南齊々哈爾等に出張し、蒙古獨立軍、及張海鵬との連絡に従事し、十月八日奉天に歸り、爾後奉天機關に在りて便衣隊の動靜支那人の對日感情の探查等に從事し熱心精勵、克く機關の任務遂行に貢献し、十一月十一日以後は參謀部の命に依り自治指導員として奉天省梨樹縣に赴き縣の自治に盡瘁し、其功績顯著と認めらる。

昭和七年四月滿洲國民政部駐哈聯絡辦事委員に任命せられ、此年十月滿洲帝國成立に際し同國の創業に貢献せる所多大なることを認められ黑龍江省龍江縣參事官に就任し、翌八年(大同二年)八月九日北滿洲富拉爾基駐屯日本守備隊長兼龍江縣治安維持會委員長今少佐の治安工作に協力のため、秘書王烈外二名と共に齊々哈爾を出發し、富拉爾基に到り今少佐の討伐隊と合して任務を完了し、同十三日午後四時富拉



爾基より發動機艇にて嫩江を溯航の歸途、午後五時三十分西哈爾爾屯附近を航行中、上流より三隻の賊舟出現し、我に向て射撃を開始せり。然るに我機艇には武備なきを以て之を回避すべく船首を變轉し歸航せんとするや、別に三隻の賊船は下流に現れて我を包圍したり、此時機艇の乗客十一名中拳銃を所持せし者中川參事外一名に過ぎず。此に於て中川參事は他を制して船内に蟄伏せしめ、自己一人上衣を脱して船首に屹立し、單獨克く六隻十五六名の賊と對戦し、機艇と賊舟僅に五六米突に接近せるも悠容迫らず、右手に短銃を擬し左手機關手を麾ひて賊の包圍を突破せんとし、激戦數分の間滿人機關手負傷し、賊陣突破の刹那、秘書王烈下腹部に敵彈を受けて斃れ、更に五米突の近距離より發射せる匪彈は中川參事の左手に命中したるも更に屈せず、尙ほ防戦を繼續中敵の第二彈は中川參事の前額より左側頭蓋を貫き遂に壯烈なる戦死を遂げたり。後ち船首を検するに彈痕四十餘所を數へたり。奮戦の狀察すべし。

戦役の功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

昭和九年三月郷里高岡郡新莊村に於て遺骨を埋葬し、墓石を立つるに際し、滿洲國務總理鄭孝胥墓銘の揮毫を爲す。又昭和十年八月齊々哈爾爾龍沙公園に記念碑建立せられ、實弟徳市、叔父中川宇平其の除幕式に參列せり。同碑は往年の志士沖横川兩名の碑と同じく萬人景仰の焦點となれりと、同參事の遺徳亦偉大なるかな。參事妻を益尾と呼ぶ、未だ子無し、その健在と將來の多幸を禱る。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 久原政吉

久原政吉は山口縣阿武郡須佐町の出身にして父を松吉母をカネと云ひ、明治三十九年十月三十一日に生る。大正十年三



て軍屬に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。政吉性質、濃厚篤實にして友情に富み義務心深き好箇の青年にして、郷黨の信望極めて厚かりき。(澁川)

月、須佐町立育英尋常高等小學校高等科を卒業し、昭和二年一月十日野砲兵第五聯隊に入營、累進して上等兵となり三年十一月歸休除隊せり。同四年八月關東軍司令部附軍醫部備人として採用せられ勤務に精勵中六年九月十八日滿洲事變勃發するや、二十一日旅順出發二十二日奉天に到着し出動中の關東軍々醫部に追及し多忙なる事變業務に服して精勵刻苦克く其の任を完うして偉勳を收めたり。

然るに不幸公務に基因し病魔の襲ふ所となり、九月二十五日新京衛戍病院に入院鏡意治療に努めしも、其の甲斐なく同十一月六日病勢革まり忽焉として遂に鬼籍に入りたり。眞に痛惜の極みなり。公病死の日を以

鐵道株式會社の守衛を奉職す。

七年一月一日通譯事務囑託として、奉天に於て騎兵第二十七聯隊に配屬せられ二日奉天を出發、三日錦州に到着翌四日迄騎兵聯隊同地の警備に任ずるや、通譯として活動せしが聯隊は五日同地出發六日錦西に到着、此間沿道の匪賊を掃蕩し錦西附近の治安維持並に警戒に方りては、危険なる地域に於て誠實熱心に隊長の意圖を奉じて通譯勤務に従事し、多大の功を奏せり。



次いで九日聯隊が匪賊と戦闘を開始するや、克く隊長の命を受け危険なる地域に在りて熱心に勤務し、同日西部錦西附近に於て、聯隊が優勢なる敵に對し猛烈なる攻撃を開始せしに、聯隊本部と共に戦闘に参加し、攻撃前進に次いで勇猛果敢に敵中に突入し、遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至れり。

其身は通譯雇員にてあり乍ら聯隊の危急に際會するや、身を捨て、國家に盡したる崇高なる行爲は以て國民の鑑たるべく、其功績甚だ大なり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。

盛一は性質溫和にして同情心に富み、東京大震災當時には多數の避難民を救助せり。小學校卒業直後、村の青年連と共に一夜酒食に耽り居れるを、同村の有力者に發見説諭を受け、之を動機として大に發憤上京し苦學力行せり。(加藤)

陸軍々屬 豊田スエ子

豊田スエ子は福岡縣築上郡黒土村大字久路土の人、明治四十五年一月八日兩次郎の女として生れ、母はタカと云ふ。大正十四年三月黒土村立小學校高等科第一學年を卒へ、四月縣立築上高等女學校に入學、昭和四年三月同校を卒業せり。資性濃厚貞淑、頭腦明晰にして才徳を兼備し、而かも負け嫌ひにて小學校女學校を通じ十餘年間皆勤し、手藝を好めり。



同年四月關東軍野戰兵器廠在職中の兄源吉を頼りて渡滿、選ばれて關東軍司令部タイピストに採用せられ、旅順に在りて精勵し居りしが、六年九月十八日夜滿洲事變勃發し、同軍司令部奉天に出動するや、同軍司令部留守部に在りて事變に伴ふ書類の淨書に、晝夜兼行克く上官の命を遵守し、迅速確實に奮勵努力し繁劇なる業務を遂行せり。

翌七年五月十六日奉天の同軍司令部に追及の命を受け、十七日旅順を出發、同日奉天に到着後は、同軍經理部庶務科に在りて事變擴大に伴ふ文書、陣中日誌、其他各科より提出する多數の書類を晝夜の別なく之が處理に精進し、且七月中旬より部内生存者功績調査開始せらるゝや、之が調査に従事し、以て各科の業務に支障なからしめ、其功績多大なるものあり。

陸軍々屬勳八等 山口馨一



山口馨一は、徳島縣美馬郡重清村田邊、久米三郎の三男なり。重清尋常小學校を、貞光高等小學校を首席を以て卒業し、小倉市なる繁三郎の下にありて吳服卸商に従事せしが、間もなく長崎市に出て苦學外國語を學ぶ事一年、單身釜山に渡り後安東、大連各地に轉じ病のため小倉市兄方に戻り保養中愈々滿洲の土に成らんと決意し、如何なる寒中にも毎朝六時に起床直ちに水道之栓を取りて水浴三十分専ら健康の恢復に努めたり。かくすること凡そ一年、近隣、兄弟、店員等悉く感歎せざるはなかりしと云ふ。再び渡滿して哈爾濱モストワヤ街に居住し日支露貨幣交換地金銀賣買、内外輸出入業に従事し時恰も好況時代のこととして日々發展するを得たり昭和六年九月突如として、滿洲事變勃發するや、同十月十日混成第三十九旅團司令部員として、採用せられ主として密偵に従事す。我が軍奉天占領後、混亂の時に於て、危険を不顧、日支人の配下數名を指揮して、市内に潜伏せる要人便衣隊の偵知、重要書類の索出等常に參謀の耳目となりて活躍し敵が錦州政府を樹立し兵を大凌河左岸に進め別動隊を派遣して奉天附近の治安を脅威するに至るや、自ら遠く錦州方面に潜行して敵情を偵察し警備並に作戰上、貢獻せる所不尠と

認めらる。

次いで十二月下旬、旅團が錦州附近攻略のため北寧線を前進中馨一は其の配下たる加藤及び數名の支那人を使役し支那軍特に不正規軍及び馬賊の情況を偵察し適時有利なる報告を提出せり。特に、軍進路に當れる一般民衆に對しては沿道住民に對して日本軍出兵の主旨を明かにし且つ旅團をして目的地到着に先だち情況を明かにし敵情不明に基づく無益の損害と徒勞とを避くるを得しめたり。一月一日夕、石山站旅團司令部に於て錦州附近敵情偵察の命を受け裝甲列車に依り、双羊甸に下車徒歩にて錦州に向ふ途中敗殘不正規軍のため拉致せられ、錦西西方約三十軒、婁房附近に於て身に數創を負ひ遂に悲壯の戦死を遂ぐるに至れり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

馨一、資性剛膽義侠心厚く、國家觀念極めて旺盛にして孝心深く兄弟互に援助し一家團圓稀に見るの家庭にして馨一、歸村に際しては自發的に母校に寄附を申出で、奉謝し又神社佛閣各種團體等に其の額既に數千金に上れりと謂ふ。(濠川)

陸軍々屬勳八等 伊佐治盛一

伊佐治盛一は岐阜縣加茂郡蘇原村三川の出身なり。父を源太郎、母をハルノと云ふ。大正十年三月蘇原村三川尋常高等小學校高等科を卒へ、同年六月東京商工學校に入學、十四年同校卒業、同年植民貿易語學校に學び、昭和二年一月退學して同月徴兵として岐阜歩兵第六十八聯隊に入營せり。四月滿洲本溪湖獨立守備隊に派遣せられ、成績優良にして伍長勤務を拜命せしが、此間また陸軍通譯選抜試験に合格して二等通譯の資格を得、三年四月二十日除隊後、奉天に居住し南滿洲

鐵道株式會社の守衛を奉職す。

七年一月一日通譯事務囑託として、奉天に於て騎兵第二十七聯隊に配屬せられ二日奉天を出發、三日錦州に到着翌四日
范騎兵聯隊同地の警備に任ずるや、通譯として活動せしが聯隊は五日同地出發六日錦西に到着、此間沿道の匪賊を掃蕩し
錦西附近の治安維持並に警戒に方りては、危険なる地
域に於て誠實熱心に隊長の意圖を奉じて通譯勤務に従
事し、多大の功を奏せり。



次いで九日聯隊が匪賊と戦闘を開始するや、克く隊
長の命を受け危険なる地域に在りて熱心に勤務し、同
日西部錦西附近に於て、聯隊が優勢なる敵に對し猛烈
なる攻撃を開始せしに、聯隊本部と共に戦闘に参加
し、攻撃前進に次いで勇猛果敢に敵中に突入し、遂に
壯烈なる戦死を遂ぐるに至れり。

其身は通譯雇員にてあり乍ら聯隊の危急に際會する

や、身を捨て、國家に盡したる崇高なる行爲は以て國民の鑑たるべく、其功績甚だ大なり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。
盛一は性質溫和にして同情心に富み、東京大震災當時には多數の避難民を救助せり。小學校卒業直後、村の青年達と共
に一夜酒食に耽り居れるを、同村の有力者に發見説諭を受け、之を動機として大に發憤上京し苦學力行せり。(加藤)

陸軍々屬 豊田スエ子



豊田スエ子は福岡縣築上郡黒土村大字久路土の人、明治四十五年一月八日兩次郎の女として生れ、母はタカと云ふ。大
正十四年三月黒土村立小學校高等科第一學年を卒へ、四月縣立築上高等女學校に入學、昭和四年三月同校を卒業せり。資
性温厚貞淑、頭腦明晰にして才徳を兼備し、而かも負
け嫌ひにて小學校女學校を通じ十餘年間皆勤し、手藝
を好み。

同年四月關東軍野戰兵器廠在職中の兄源吉を頼りて
渡滿、選ばれて關東軍司令部タイピストに採用せら、
旅順に在りて精勵し居りしが、六年九月十八日夜滿洲
事變勃發し、同軍司令部奉天に出動するや、同軍司令
部留守部に在りて事變に伴ふ書類の淨書に、晝夜兼行
克く上官の命を遵守し、迅速確實に奮勵努力し繁劇な
る業務を遂行せり。

翌七年五月十六日奉天の同軍司令部に追及の命を受け、十七日旅順を出發、同日奉天に到着後は、同軍經理部庶務科に
在りて事變擴大に伴ふ文書、陣中日誌、其他各科より提出する多數の書類を晝夜の別なく之が處理に精進し、且七月中旬
より部内生者功績調査開始せらるゝや、之が調査に従事し、以て各科の業務に支障なからしめ、其功績多大なるものあ

り。然るに此間公務に基因し、レウマチス脚氣心臓内膜炎に冒され、八月五日奉天赤十字社病院に入院し、醫療に努められ共其甲斐なく、遂に九月十一日公病死を遂げたり。

此日雇員に進められ、戦死將兵と同様の待遇を受け、又葬儀に際しては關東軍司令部葬を以て盛大に執行せられたり。餘榮ありと云ふべし。若年の女性が而かも異域に於て、帝國の爲奮闘努力、遂に瘞るゝに至る。是克く皇國女性の意氣を發揚せる者と謂ふべし。(加藤)

陸軍々屬勳八等 加藤 義信

加藤義信は鳥取縣氣高郡鹿野町の出身にして、父を政藏、母を孝と云ひ、明治三十年十二月二十四日に生る。明治四十三年三月鹿野尋常高等小學校尋常科を卒業し、大正四年三月開城中學校を卒業、次で岩倉鐵道學校機械科を卒へて、明治大學法律科に學び、中途同校を退き徴兵として、鳥取歩兵第四十聯隊に入隊、現役滿期除隊、在郷中、昭和六年十二月二十八日滿洲派遣混成第三十九旅團司令部に雇員として採用せられ三十日より旅團に従ひ、錦州攻略に参加せり。旅團が北寧線を前進中、義信は山口馨一の指揮を受け他の同僚と共に支那軍、特に不正規軍及び馬賊の情況を偵察し適時有利の報告を提出せり。特に軍進路に當る一般民衆に對しては、同本軍出兵の主旨を明かにせる宣傳文を豫め撒布且つ説明し、以て沿道の民を宣撫に努めたり。ために旅團は目的地到着に先立ち情況を明かにし敵情不明に基づく、無益の損害と徒勞とを避け其の行動も亦、比較的迅速なるを得たり。義信の貢獻せる所尠からずと認めらる。一月一日夕、石山站旅團司令部に於いて、錦州附近の敵情偵察の命を受け山口と共に裝甲列車により双羊甸に下車、徒歩を以て錦州に向ふ途中、敗殘不

正規軍のため、拉致せられ、錦西、西方約三十軒妻房附近に於て不幸其の兇惡なる毒刃に觸れて、遂に悲壯の殉職を遂ぐるに至れり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。義信、資性豪膽にして相撲、柔道を得意とし、常に獨立一家を支ふる力なき間は斷じて結婚せずとて獨身生活を續けて當時に及べり。義信職を軍に奉じ、前記重要任務を帯びて其の出發に際し、弟武雄に寄せたる書信を次に摘録す。



「取急ぎ要々のみ申上候、小生今般江界方面へ行啓

にて出發、京城に下車、池田様に面會いたし候處今國家百年の計此の時に在り依て皇國の爲め奉公せよとの御意見有之直に滿洲へ向ひ申候、生死返り視る必要とて無之き體寸志なり共御國の爲めと相成り候はゞ幸甚の至りと存じ嬉しく思ひ居り候。我々の任務及方面は斷じて公開出來不申候由何卒不惡御思召被下度候 若事件終了生還せば御笑草に申上候も此我の望む處に無之候まゝ武士の本分と御あきらめ被下度候 万一の事ある共思ひ残す事更に無之候 只々御幸福に御過しあらん事を祈り上候 末筆乍齋藤様に宣敷申傳へ被下度願上候御身上職務に御忠實なることは世渡りの最善なり御研究一番御奮闘あれ」と。

義信の面目躍如として、親ふを得べし。(註、文中、齋藤トアルハ會社主任ノ姓)
父弟共朝鮮元山水産興業株式会社に務め、遺族は、咸鏡南道元山府春日町一に住めり。(濠川)

陸軍々屬勳八等 所 金次郎



當時に於ける情況は、所屬旅團副官の調書に依りて明なるを以て之を左に摘録す。

陸軍々屬 所 金次郎

右は十二月下旬錦州附近攻撃のため當旅團北寧線を前進中、本人は山口馨一の指揮を受け、他の同僚と共に支那軍特に不正規軍及馬賊の情況を偵察し、適時有利なる報告を提出す、特に軍進路に當る一般民衆に對して、日本軍兵の主旨を明にせる宣傳文を豫め撒布且説明し、以て沿道の民を宣撫したるを以て、旅團は目的地到着に先ち情況を明かにし、敵情不明に基く無益の損害と徒勞とを避け、其行動も亦比較的迅速なるを得、作戰上貢獻せる處不尠一月一日夕石山站旅團司令部に於て、錦州附近敵偵察の命を受け、山口と共に裝甲列車により双羊甸に下車、徒歩にて錦州に向ふ途中敗殘兵不正規軍のため拉致せられ、錦西西方約三十軒婁房附近に於いて慘殺せられたる屍體を發見したり、其功績優秀なりと認む。

旅團副官 師 橋 渡

金次郎戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

金次郎性質温厚にして篤實、事に當りて熱心誠實なり。遺族は奉天彌生町に現住す。母子の健在を禱る。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 平野 七雄

平野七雄は横濱市中區根岸町字江吾田二九八九番地の出身なり。昭和七年一月九日錦西東北方三里壯家屯紅螺山に於て松尾少尉の指揮する輸送監視隊は匪賊と遭遇し、激戦の末、衆寡敵せず全員二十六名枕を並べて、壯烈なる戦死を遂げし事は、今尙世人の記憶に新なるものあれども、監視隊編成以來常に同隊と行動を共にせし通譯平野七雄は非戦闘員なりしにも拘らず、此の戦闘に於て監視隊全員と其の生命を共にし護國の神となれるものなり。以下其の戦歴の大略を記す。

昭和六年十二月關東軍第一輸送監視隊通譯として編成に入るや、當時陸軍屬として在勤せし奉天を發し錦州に向ふ。途

中匪賊の列車襲撃に會せしが、我軍は直に之を擊退し、一行將兵緊張のもとに錦州驛に到着せり。昭和七年一月六日監視隊は在錦西騎兵第二十七聯隊糧秣輸送並びに交付の任を帯び錦州を發し錦西に至り翌七日交付を了せり。此の日夜間に至り匪賊の來襲ありしも騎兵聯隊の擊退する處となれり。翌八日、騎兵聯隊長は前夜の匪賊來襲に鑑み、松尾小隊と協力し

錦西部落内の掃蕩を實行するや、平野七雄は該小隊に從ひ、部落内に潜入し敵情を調査し小隊長に報告する等、身を挺して連絡に任じ掃蕩に貢献せり。其の功績顯著なるものありたり。



翌一月九日午前四時監視隊は錦州へ歸還の途に就きしが、錦西を去る東北方三里強錦州街道上小嶺子東南方高地紅螺山に差しかゝるや約三百の匪賊と衝突せり。同隊は直ちに之と交戦せしが、平野は所持せる拳銃を以て之に参加し、沈着に行動して我が小隊の諸兵を激勵し極力擊退に努めしが、新に加はりし敵匪二百は兩側高地に現出し、更に敵の主力の一部は背後に迂回するあり、衆寡敵せず、一彈は遂に平野の胸部を貫き、茲に松尾少尉以下監視隊の全員と共に名譽の戦死を遂げたり。然れども一死に至るまで何等恐るゝ事なく熱烈なる愛國心と忠勇義烈なる精神は克く松尾少尉を輔佐し皇國の武威を發揚せしめたり。其の功績は拔群なりと言ふべく、後功により勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

七雄は父を七次、母をとると言ひ、明治四十二年十一月十六日を以て生る。幼にして實母の死別する處となり繼母の手にて育てられたるも常に克く父母に孝養を盡し弟妹を愛撫し、大正十三年三月二十六日横濱市立江吾田尋常高等小學校を卒業せしが、卒業後は自ら進んで在滿洲奉天の伯父の下に滿洲の地に活動せん事を望み、數年振りにて歸來せし伯父同道渡滿せり。爾後伯父の業を授けて居りしに滿洲事變に際會し、徵兵不合格なりしを残念がりて率先從軍を希望、漸く希望を達して勇躍軍に参加せるものなり。尙ほ戦死の日は恰も實父の三週年忌に當り居たりと言ふも奇しき縁なりと言ふべし。在奉天の伯父林氏は今尙健在にして、繼母ヒサも亦前記横濱市に健在して七雄の弟妹の教養に努め居れり。七雄は繼母ヒサを戦死に至るまで實母と信じ居たりと言ひ、近き將來獨立の曉には父亡き後の母を初め弟妹を滿洲の地に呼び寄せんと心掛け居たりと言ふ。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 天野 三郎

天野三郎は、神戸市葦合區熊内橋通の人にして、父を隆、母をとると云ひ、明治四十四年九月二十一日生なり。大正十四年四月京都市東寺中學へ入學し、事故のため昭和三年三月中途退學す。性質温良にして物慾に極めて恬淡なり、相撲を好み中學在學中は其の選手たり。昭和七年二月二十八日上海在郷軍人會西部分會より通譯として歩兵第三十二聯隊吳松上陸の時より同隊に臨時雇用せられ、同年三月四日獨立工兵第六大隊第一中隊に配屬せられ、佐々木中隊長の配下にありて警備の勤務に従事せり。

昭和七年三月十九、二十日兩日は松井部隊の寶山縣劉家鎮附近の海岸偵察に同行し、調査偵察等に協力し功績顯著なり。

當時便衣隊の出沒頻繁にして、第一線に於ては勿論、宿營地内部に於ても時々其の危害を蒙ること少からず。此の間に於て屢々危険を冒しつゝ、斥候又は部隊に同行して、通譯に當り、又檢舉調査等の業務を補助し、恪勤精勵上官の意圖を十分に諒解して、適切なる處置を取り、警備上貢獻せるところ多大なり。殊に三月二十六日午前八時頃嘉定に於て衛兵に配屬せられて服務中、歩哨たる工兵は舉動の怪しき支那人二名を發見して之を誰何したりしに、支那人は直に逃走せしを以て、三郎工兵二名と共に之を追跡せしに、此時支那人は不意に手榴彈を投擲し、其の炸裂に依り工兵一名負傷と共に三郎は左手及び臀部に重傷を負ひ、即時嘉定衛戍病院に收容せられたるも、出血甚しく看護兵の特志に依る輸血も其の効を奏せず、同日午後五時五十分戰傷死せり、三郎功績優秀と認めらる。

功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

三郎受傷の後も一言私事に及ばず、同僚原通譯に所屬中隊の通譯に關すること等を依頼して、爾後の隊務に支障なき如くし中隊の將兵に宜しくと傳言を托し、從容瞑目せり。看護兵の進んで自己の血液を輸血したると、三郎の剛毅沈勇なる態度は眞に涙ぐましき陣中美談として、院長より所屬師團長へ報告せられたりと云ふ。(佐藤)

陸軍々々屬 松本 榮

松本榮は、福島縣伊達郡富田村大字小神字笠松の人にして、父を文右衛門母をヤスと云ひ、明治三十五年生なり。明治四十二年四月小神尋常小學校に入校し、大正三年三月同校卒業、次で補習學校に入學し、大正七年同校普通科を卒業し、後寫眞技術を修得し、大正十四年より横須賀に在住して、同地東京港要塞司令部横須賀重砲隊同鎮守府等の御用寫眞館業務に従事せり。

昭和八年五月二十八日以降、關東憲兵隊司令部に在りて警備並に治安警察に關する寫眞業務に従事し、係下下士官の命を受けて其整備に任じ、六月十二日資料蒐集の爲め出張を命ぜられ、同日新京を出發し、哈爾濱移後、佳木斯、海倫、齊々哈爾、滿州里、洮南等の各地に到り、各地所在の憲兵分隊又は同分遣所と密接なる連繫を取りて其任務に奮勵中、偶々七月十九日鄭家屯附近に到りたる際、惡疫に侵され、翌二十日新京に歸着、直に新京衛戍病院に入院、腸チブスと決定し、八月七日遂に死歿せり。榮在職の期間長からざりしも、其蒐集したる資料は警察務の統制上多大の効果を齎し、其の功績顯著なるものと認められたり。

榮性質温厚沈着にして剛毅、敬神崇祖の念厚く、嘗て敬老會の役員として會務に盡力し、又同縣人會役員として會の盛隆を圖る等、篤行少からず、從軍以後は特に恪勤精勵し、上下皆其の病歿を惜みたり。妻をタクと云ひ、榮の遺せる節子京子と共に小神の神が宅に現住す。母子の倭在と其の將來に多幸ならんことを祈る。(佐藤)

陸軍々々屬 淺井 治郎

淺井治郎は、愛知縣丹羽郡犬山町大字木津字北ノ畑の人にして、父を久太郎、母をまさと云ひ、明治四十年六月十二日生なり。大正三年四月犬山北尋常小學校に入學し、同九年三月同校を卒業し、其後幾もなくして大連市に渡り、同市原田

商店員として勤務すること十数年、北間精勤勉勵同僚の模範たり。偶々昭和八年二月二十七日臨時雇員として、第十師團司令部に雇傭せられ、酒保の業務に従事せり。



同八年二月二十七日聯隊主力が熱河討伐に参加するに方り、綏中を經、更に轉進して熱河省に向ふ。途中重疊たる山徑を越へ、極寒を冒し幾多の困難を制し、三月十一日界嶺口關門を距ること約一里なる界嶺底下に進出、前面の敵情地形の搜索を續行し、三月十四日夜半より再び行動を起し、萬里長城の堅壘に據れる敵に對し、攻撃を敢行せり。然るに敵は張學良の正規軍たるの名に恥ぢず、我猛撃を受けつゝ豪も屈せず、難攻不落の長城天險に據り、衆を恃みて頑強に抵抗せり。十五日午前漸くにして長城を占領せしも、敵に徹底的打撃を與ふるに至らずして、同夜は長城線を守備して夜を徹し、聯隊の大行李は前記の界嶺底下に位置せり。

右の如く我攻撃を受けたる敵は、一時潰走せるも尙屈することなく、我軍の長城線に位置するや、再び執拗にも前進し來り、十六日拂曉に亘り、俄然迫撃砲を以て我第一線並にその後方界嶺店下に對して猛烈なる砲撃を開始したり。之がため長城の線を守備せを第一線部隊は勿論、後方なる大行李附近に於ても死傷者續出する状態となれり。翌十七日に至るも敵の砲撃は衰へず、且機を見て逆襲に轉する等、其の勢ひ侮り難きものあり。之がため我第一線部隊に對する糧食の補給

充分ならず、彈藥も亦其數漸く僅少となれるを以て、彈藥糧食運搬のため兵員の不定を感じたり。此に於て治郎は大行李の位置より糧食を第一線部隊に運搬することを命ぜられ、午前十時半頃使用せる滿洲國人を指揮して、敵彈雨飛の間に於て、巧に地形を利用して前進中、午前十一時頃敵の迫撃砲彈は治郎の側らに落達炸裂し、治郎頭部其の他に破片創を被り遂に壯烈なる戦死を遂げたり。功績優秀と認められ、左の恩賞あり。

戦功に依り勲八等に叙し瑞寶章を授け賜はりたり。

治郎性質溫和にして篤實なり。特に服従心強く、克く規律を安り、軍隊に雇傭せられてより日向淺きに拘らず、將兵の信用淺からず、大に其の愛撫を受けたり。蓋し治郎の正直柔順の性格と其の勤勉業を擧じたるの致すところなり、然して身非戦闘員たるに拘らず、所屬隊の戦況急なるに際し、身を挺して難局に當り、遂に其の受けたる任務のため一命を捧げたり。其の功績は堂々たる軍人と選ぶところなし、又男兒の本懐たるべし、治郎瞑して可なり矣。(佐藤)

陸軍々屬勲八等 戸塚富士太郎

戸塚富士太郎は靜岡縣小笠郡笠原村山崎の出身なり。明治四十三年二月十四日戸塚友藏の三男として生る。母をヤスと稱す。大正十三年三月、笠原尋常高等小學校高等科を卒業し、昭和四年一月十日現役志願兵として濱松飛行第七聯隊に入隊、精勵恪勤優秀の成績を收め、航空兵上等兵に進級除隊除隊し、七年二月一日通譯として歩兵第五聯隊に雇傭せられ、四月二十三日臨時雇員として、同月二十三日臨時雇員として同聯隊本部に配屬せらる。

二月二日より四月十八日に亘りては、齊々哈爾及江橋附近の警備に参加し、情報蒐集の爲め屢々昂溪附近に出動し、

有利なる報告を齎らし、殊に江橋守備隊に配属せられ、同地の守備に任ずるや、積極的に附近兵匪の情況を搜索し、或は鮮人との連絡及び之れが救護の爲め、盡力して功あり。次で五月九日より十一日に亘りては、背陰嶺四方臺の戦闘に参加し。緩中出發以來、未知、危険なる地を常に先行して有利なる情報を偵察し、半拉山子附近一帶の部落に優勢なる義勇軍

あるを探知するや、沈着勇敢單身手榴彈、銃槍等を所持せる敵中に入りて、之れと面晤し、其の兵力服裝々備動靜を探りて、速に支隊長に報告し、支隊爾後の行動を有利ならしめ、遂に敵をして、攻勢を断念し、支隊戦捷の緒に就くを得しめたり。其の勇敢なりし行動に就き師團長より口頭賞詞を受けたり。



而して七月八日より同日に亘る六股河河谷の戦闘に際しては支隊の通譯として情報の蒐集に従事し、支隊の戦闘を圓滑ならしめ、爾後八年三月十三日に至る迄は、飲馬河・馬蹄溝・緩中・田高甸子・陳英溝・石柱子

等の各地其の他に轉じて討伐及び警備に任じ、常に赫々たる偉勳を奏せり。この間八年二月二十二日よりは歩兵第五聯隊主力、熱河討伐出動後、緩中警備隊本部附勤務に任じ、通譯として常に積極的に行動し、其の危険なる偵察に任ずること屢々にして、克く諸情報の蒐集に努め、終始一貫熱心精勵、以て警備隊任務遂行に遺憾なからしめたり。三月十四日緩中縣明水糖邊門附近の偵察に従事中、數十名の匪賊と遭遇し、茲に戦闘を惹

起し勇戦奮闘せしも、衆寡敵せず不幸身に數彈を受けて遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至れり。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

富士太郎の屬せし奉天省緩中第一地區警備隊長砂川中佐より、富士太郎の父に寄せたる書信には、富士太郎の人の成りの一端を窺ふに足るものあれば左に抄録す。「……戸塚君は、我が聯隊に最も長く勤務致され且小官渡滿後常に私の部下として偵察の任務に従事せられたる者に候性質剛毅果斷死を見ることが如し、何時如何なる困難なる任務を命ずるも元氣よく『ハイ行キマス』と答へ、颯爽として出發せられ候『ハイ行キマス』然し『ハイ行ツテ來マス』とは申されず候。其の心掛の雄々しさ、覺悟の立派さには小生常に敬服し居候。頼もしき若者よと感じ居たる次第に候、去る三月十三日も緩中より十里西方明水塘邊門の匪賊の狀況偵察を命じ、何時もの通り『ハイ行キマス』と答へ出て行かんとするを以て『氣ヲ付ケテ行ケヨ』と中候處『中佐殿大丈夫デス』と答へ、次に何日歸へるかと問ひ申候處、十七日頃と答へしを以て『大變長いではないか』と問ひたるに嗚呼是が歸りが遅くなるの前兆なるべきか悲しとも悲し、夫れでは、十五、六日には歸へりますと答へ勇ましく出發され候。其の後十五六日正午頃に至り戸塚氏殺害せられたる如しと同行のもの、報告するを以て翌日直ちに軍隊を出し搜索し、死體を發見收容致し候身に數十彈を受け、自らも拳銃にて應戦し敵を斃したる次第、頗る奮戦の様にて、氏の事なればおめく」と斃るゝが如き事はなかるべしと存じ居候も、如何ならんと杞憂致居候處、今其の實況を見て、日本男子の雄々しさを表はし遺憾なく、我が軍人の本領を發揮したるを知り、涙の中にも安堵したる次第に於氏の如き有爲の者には尙々活動して欲しきこと、山積致居り今頃失ふたるは眞に哀惜の至りに候云々」と。(澁川)

陸軍々々 野島龜市

野島龜市は福岡縣飯塚市大字川島出身なり。昭和八年二月二十四日第十師團臨時雇員となり、歩兵第十聯隊に配屬し、同日より熱河作戦に加はりたり。即ち綏中より無指山に到る間、寒氣と積雪を突破し克く大行李の苦力を督勵し、就中小繁嶺を越ゆるに方りては、徹宵奮勵努力、以て本隊の行動に滯滞なからしめ、無指山より大行李は後方部隊に托せらるゝや、本隊と行動を共にし、白土嶺の通過並に界嶺口第一回攻撃の爲山砲引上げに際しては、附近を奔走し苦力を集め、越嶺並に引上作業を容易ならしめたり。斯くて三月十六日界嶺口第一回攻撃に於て、聯隊本部と共に勇敢に突撃前進中、不幸敵小銃弾を受け、遂に壯烈なる戦死を遂げ功を顯はせり。(加藤)

陸軍々々 阿比留久太郎

阿比留久太郎は長崎縣下縣郡鷓鴣村の出身なり。昭和七年十月二十日、間島臨時派遣隊本部備人として採用せられ、爾後八年五月上旬迄經理部に在りて匪賊討伐に専日なき、而かも間島全般二十六個所に亘り分散配置せる。各守備隊に對し其要求に應じ諸軍需品の補給勤務に従事し、日夜不眠不休其任務の達成に努力し、又局子街部隊の給養に當りては、日々寸暇を割き、良好なる給養を實施せんが爲、計手の助手となりて之が配給に任じ、更に進んで野戰倉庫記帳掛に拔擢せらるゝに及んでは、複雑多岐混雜せる各種傳票を整理し、現品と帳簿とに綿密なる連絡を保たしめ、常に其出納を明ならしめたるは、久太郎の熱誠眞摯なるは勿論、奉公の至誠の表現にして、其功績優秀なり。

斯くて八年五月六日龍井守備隊引繼ぎの爲、護衛兵を伴ひ同地に出張、建物及陣營具諸品の引繼を完了し、物品を自動車に滿載して歸還の途中、朝見山附近に於て匪賊の奇襲を受け、護衛兵と共に勇戦奮闘、之を西方地區に擊退して全く匪賊の掠奪を防止し、更に護衛兵と共に勇敢なる追撃を敢行し、將に匪賊を捕獲せんとせる刹那、賊彈肩より胸部に貫通し、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。

戦闘員に非らざれ共、奮戦猛闘能く敵匪を擊退して、遂に瘞れしは、大和魂を遺憾なく發揚せるものにして、其功績赫々たり。此日臨時雇員に進められ、後功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々々 七田鹿太郎

七田鹿太郎は長崎縣長崎市大浦町の人、明治二十二年一月十六日に生れ、大浦町の小學校高等科卒業後、商業工業問屋等各種事業を経営し、次いで上海に渡り、上海ジャパン・ツーリストビュロー社員として切符賣捌所に精勤せり。

昭和七年二月上海に於ける日支の紛争擴大するや、献身殉國の秋は到れりと、自ら進んで第一線部隊の支那語通譯たらん事を志願し、同十日混成第二十四旅團臨時雇員として第四中隊に配屬せられ、第一線の敵情視察に、連絡に、或は支那土民との通譯に、常に積極的に奮勵しありしが、十八日午後一時北孫宅方面の敵情並に地形の偵察を命ぜられたる石橋將校斥候に加はり、吳家灣出發其道案内となり、常に先頭に立ち、土人を捕へて敵情地形を聴取し、以て斥候長に搜索の憑據を與へたる事多大なり。午後二時十分王塚宅西端に達するや、土人の西方に逃げ迷ふ者多數にして、敵兵なりや土人なりや、判別頗る困難なるものあり。此時に當り鹿太郎叫んで曰く、「諸氏は大望ある身なるを以て、充分地物を利用して斃

れざる様に」と、自ら臺上に駆け登りて状況を視察せる態度並に行動は、流石に青島戦役に従事せる歴戦者たるを偲ばしめたり。同時四十分斥候北孫宅西方約三百米の地點に達するや、俄然敵の射撃を蒙りたるも、鹿太郎は士氣益々旺盛にして斥候長の前方に進出するを止むるをも肯せず、斥候長と行動を共にし、常に斥候兵の前方に在りて進みしが、同四時頃敵火益熾烈となり前進並に敵情視察困難を極む。折しも突然右斜面方向より機關銃の猛射を受けしを以て、其位置を確むる爲臺上に躍進中、不幸敵弾に依り左胸部貫通銃創を被り、萬歳の一語を残して遂に壯烈なる戦死を遂げたり。時正に午後四時三十分なりき。

其行動誠に衆の範たるべく、功績實に赫々たり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

誠に餘榮ありと謂ふべし。英靈以て瞑すべし。

鹿太郎は頗る磊落にして恬淡、人情に厚く、又皇國を思ふ念深く、正義の爲には水火をも辭せざる氣概を有し、元頼重兵特務兵たり。

遺兒、長男和治、二女喜志子は、本籍地の實兄七田美與吉方に在り。切に將來の多幸を祈る。(加藤)

陸軍々屬勳八等 石黒清治

石黒清治は青森縣北津輕郡梅津村大字梅田の人にして、父を清吉、母を八重と云ひ、明治四十三年七月十日生なり。大正十二年三月青森市新町小學校を卒業し、次で青森縣立青森中學校に入校、昭和三年三月同校を卒業し、翌四年四月青森

縣派遣生として哈爾濱日露協會學校に入學を命ぜられ、同八年三月同校を卒業す。昭和八年三月露語通譯として雇用せられ、哈爾濱警備司令部附となり同司令部内にありて諜報の蒐集に任じ、同司令部の警備勤務を適切ならしめ、特に拉賓線警備に任ずる白系露國人の指導を容易ならしめたる功績は顯著なるものなり。



同八年七月四日より、同年七月九日に亘る間は、賓州東南方地區の討伐に従ひ、通譯として諜報の蒐集並に設營の補助を爲し、討伐隊の行動を容易ならしめたり。又同年十月十二日より十二月二日に亘れる第十師團吉林省秋季討伐に従ひ、飯塚支隊本部露語通譯として之に参加し、嚴寒を冒して長期に亘り常に支隊本部と行動を共にし、遠く黒龍江岸地區に於て烏蘇里河岸、饒河方面に轉々行動し、其の間終始積極的に奮勵して、本討伐の目的達成に貢献せるところ甚大なり、此の功績優秀と認めらる。

同九年三月十日土龍山附近の戦闘に参加して偉功を立て、飯塚聯隊長と共に名譽の戦死を遂げたり。之に

關する飯塚支隊副官安田大尉の調書左の如し。

現 認 書

陸軍通譯 石黒清治

飯塚支隊長冬期討伐ニ引續キ治安工作ノ爲支隊本部ノ一部ト共ニ依蘭ニ滞留中三月九日土龍山附近ノ不良自衛團其ノ整理ニ不滿ヲ抱キ蠢動ヲ試ミ附近ノ匪賊之ニ合流シ不穩ノ形勢極頭セル報ニ接スルヤ在依蘭吉林軍及警察隊ヲシテ之カ討伐ノ爲出動セシメ翌十日鈴木少尉以下十八名及吉林軍依蘭地區警備軍參謀長以下十七名ヲ指揮シ之カ討伐ニ向フ當時支隊本部通譯トシテ之ニ參加シ一行午前十一時頃土龍山西方約四軒附近ノ地點ニ達スルヤ俄然約五百ノ匪賊ト遭遇スルニ至リ日本軍敢然之ヲ攻撃シ敵ノ氣勢ヲ殺ゲリ通譯ハ彈雨ノ中猶支隊長ニ隨行シテ通譯ニ任シ支隊長及鈴木少尉等ノ意圖通辯ニ努ム然ルニ先遣及同行滿洲國軍警敗退シ我軍孤立戰闘スルニ至リ道路北側臺上ヲ占據力戰奮闘シ一時敵ヲ辟易セシメタルモ敵ハ益々其數ヲ増シ衆ヲ恃ミテ我ニ近接四周ニ殺倒シ我死傷續出シ彈藥又盡キントス此の時通譯ハ所持スル拳銃ヲ執リ身ヲ挺シテ戰闘ニ參加シ支隊長ヲ庇ヒツツ奮闘シ遂ニ戰死者ノ小銃ヲ執リテ四面肉迫スル敵ヲ猛烈ニ排撃シ奮迅接戰ヲ交ヘタルモ衆寡遂ニ敵セス頭部貫通銃創ヲ蒙リ支隊長以下全員ト共ニ萬斛ノ恨ヲ吞ミテ同地ニ壯烈ナル戰死ヲ遂ク本戰闘ニ依リ敵匪首謝文東以下ニ徹底的會滅ヲ加ヘ土龍山附近ノ擾亂ヲ局限シ引イテ依蘭及勃利縣下ニ於ケル治安維持ヲ促進セリ其行爲ハ修羅ノ巷ニ立チ猶己ノ職務ニ奮勵シ友軍ノ危急ニ莅ミテハ身ヲ棄テテ之ニ馳セ軍屬ノ本分ヲ完ウシ大和魂ヲ如實ニ顯現シ皇軍ノ威信ヲ發揚シタルモノニシテ眞ニ軍屬ノ龜鑑タリ功績殊勳乙ニ該當ス

飯塚支隊副官陸軍少兵大尉 安田 亨 介

斯くて清治は戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はりたり。

清治性質温順にして沈勇なり。昭和六年滿洲事變勃發に際し、哈爾濱に在り居留民の保護自衛に盡瘁し、在哈爾濱總領事より感謝状を受けたり。將來有爲の青年なりしに惜しむべきなり。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 他村 延

他村延は熊本縣玉名郡伊倉町の出身なり。滿洲事變に際し、昭和八年二月二十日通譯臨時備人として歩兵第三十二聯隊に採用以來、五月中旬迄第一大隊と共に熱河作戰に参加し、百數十里に亘る險難なる道路を行軍し、能く困苦缺乏に堪え其任務を全うせり。

三月七日長山峪の戰闘開始せらるゝや、暗夜勇敢に先頭部隊の道案内となり、部落民を使用して部隊の宿營給養に便ならしめ、次で古北口の戰闘に當りては、彈雨中克く第一線部隊の爲、彈藥糧食の運搬に任じて戰闘を有利ならしめ、十三日より古北口に對陣間は、能く土民を使用して物資の調辦宿營給養を良好ならしめ、越えて四月二十一日北支作戰に於ては、敵彈を冒して勇敢に第一線部隊の爲、彈藥糧食の運搬補充に任じ、第一線將兵をして能く其任務を達成せしめたり。五月十一日新開嶺附近の戰闘に於て敵を攻撃中、十二日朝敵彈の爲頭部貫通銃創を受け、遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり。

延は克く上官の命に従ひ、積極的に其任務に邁進し、皇軍の爲貢獻せる功績は多大なり。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。

誠に餘榮ありと謂ふべく、英靈以て瞑すべし。(加藤)

陸軍々屬勳八等 安藤 幸

安藤幸は宮崎縣南那珂郡南郷村の出身なり。昭和七年十月二十日間島臨時派遣隊通譯として採用せられ、歩兵第七十五聯隊第三大隊本部に配屬、二十七日迄百草溝守備に服し、對外との連絡、諸情報の蒐集等に從事して積極的に活動せり。同月二十七日午後八時頃約二百の救國軍百草溝を襲撃すとの情報あり、守備隊長は直に百草溝各部隊長を集め、警急舎營をなさしめたり。果せる哉、翌二十八日午前五時四十分、突如約二百五十の救國軍は、百草溝北端滿洲國汪清縣公署、公安局及警備輔佐官公署を襲撃し、續いて市街を攻撃せんとせり。守備隊長は直に米増特務曹長に小銃一分隊を指揮せしめ、斥候として前記公署と連絡並に敵偵察の爲急派し、一方主力を吉満中尉に指揮せしめ、先遣せし米増斥候の報告を待つて敵主力に對する攻撃部署を決定すべく、待機の姿勢を保持せしめたり。午前六時頃米増斥候長は伊藤伍長以下三名を警備輔佐官公署に引退せしめ、電話を以て守備隊長に狀況を報告せしめしかば、守備隊長は先づ主力を敵の右側背より攻撃せんと決し、吉満部隊を直に出發せしめたり。同時三十分吉満部隊、警備輔佐官公署附近に進出するや、情況上滿洲國軍警との密接なる協調連絡を必要と認め、右連絡には支那語を必要とせしかば、昨夜より警備輔佐官公署にありて縣公署並に公安局との連絡に從事しありし安藤軍屬を伊藤伍長以下三名に隨行せしむ、當時敵は主力を以て縣公署を猛撃中にして、滿洲國軍警方面は漸く之を防止しあるの狀況なりしかば安藤軍屬は重大なる任務を自覺し、彈雨中克く沈着剛膽に而かも機敏に行動し、幾多の危険を冒して同時五十分首尾よく重任を全うせり。間もなく敵主力の西方に迂回するを知りたる安藤軍屬等は、先づ吉満部隊に報告せんと縣公署を出でんとせる刹那、右前方より飛來せし賊弾は軍屬の頭部を貫通し、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。於茲吉満部隊は直に攻撃を開始し、日滿軍協調の許に戦闘は急速に有利に展開し、遂

に敵に多大の損害を與へたり。

本戦闘の結果、一時危殆に陥りし縣公署、公安局並に警備輔佐官公署、百草溝市街の危急を救ひ、從來附近に蟠居して虎視眈々たりし救國軍をして其企圖を挫折せしめ、附近一帶の治安維持の基礎を作れり。此戦勝は日滿兩國の密接なる協調に依り得たるものにして、軍屬の責任觀念旺盛なる盡忠報告の念に燃ゆる決死的連絡の結果にして、全く大和魂の發露たるべく其功績偉大なり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬(豫備役陸軍砲兵少尉)勳八等 大西 寛心

大西寛心は愛媛縣伊豫郡松前町大字北黒田の出身にして、大西重太郎の養子なり、養母をツネヨといふ。明治三十四年三月十三日を以て生る。大正三年三月上浮穴郡久萬町立小學校を卒業し、同六年四月愛媛縣師範學校に入學、八年四月病氣のため同校を退學し、同年九月豊國中學校に入學、十一年三月同校を卒業し、十二月一日一年志願兵として、廣島野砲兵第五聯隊に入營、同十三年十二月豫備役砲兵少尉に任じ、正八位に叙せられたり。

昭和六年九月二十二日陸軍備人として採用せられ、旅順駐屯の歩兵第三十聯隊に従軍す。即ち九月二十二日より吉林附近の警備に任じて十一月十日に及びしが、此の間克く主計の命を受けて宿營の諸設備並に糧秣の蒐集調達に任じ、聯隊將兵の給養を良好ならしめたり。十一月十一日急遽江橋方面に出動を命ぜらるゝや、水口主計を助けて徹宵二日間に亘り糧秣、薪炭の購買蒐集に従事し、東奔西走克く其の任を完うし、十七、十八の兩日は昂々溪附近の戦闘に参加し、聯隊が

鳥諾頭站に於て小興屯の敵陣地攻撃を準備するに當りては、水口主計の命に依り、大興驛附近に集積せし荷物の監視に任じ、更に之れを五里餘の遠き鳥諾頭站に運搬する等其の努力定に絶大なるものあり、然るに不幸第一回の運搬を終るや、自動車は暗夜のため道を失ひ、沼澤中に陥入し、又如何ともする能はざるに至りしかば、寛心は各兵と共に自動車の引上げに従事せしも更に其の効なく、専ら主計の命に依り鳥諾頭站にありて彈藥糶秣の監視に任ぜり。

當時鳥諾頭站は右側背を敵の有力なる騎兵に包圍せられ、頗る危険なる状況にあり、十八日午後二時十分未だ糶秣彈藥の運搬を終らざるに、突如敵の歩兵約百五十騎兵約四百の襲ふ所となれり。茲に於て寛心は主計の指揮下にありて所在の兵と共に協力一致、豫ねて準備せし防禦線に就いて、或は手榴彈を投じ、或は拳銃を以て極力敵の進入を拒止し、多數の敵をして圍壁に近接する能はざらしめたりしも、敵は家屋附近に堆積せる干草に火を放ちて、攻撃愈々猛烈を極め我が死傷續出せり。此の状況に遭遇したる寛心は、軍屬ながらも一死以て君國に奉じ、日本男兒の本領を全うせんとし、猛然として敵中に突入し、敵と格闘身に數創を蒙り、遂に壯烈なる最後を遂ぐるに至れり。時に午後三時二十分頃なりき。此の寛心の勇敢無雙の行動に依り、第一線諸隊の兵器彈藥の不足を來たすことなく、其の戦闘能力を充分發揮せしめ、而かも僅かに十數名の寡兵を以て數百の敵を抑留すること數時、ために我



が後方を擾亂するの企圖を挫折し、我が軍爾後の追撃を容易ならしむるに與りて力あり、其の行動實に我が軍屬の本分を完うしたるものにして、其の功績は實に偉大なりと謂ふべきなり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

寛心性質溫柔にして豪膽、事に當りて不撓不屈の精神を發揮するを常とせり。又幼より向學心強く、其の小學校卒業に際しては、郡長より品行方正、學術優等の故を以て表彰せられたり。滿洲事變に有名なる琵琶歌「北滿の風」は、即ち此の悲壯なる最後の戦闘を物語るものにして、時の聯隊長たり坪井少將は各地講演會の席上、軍屬にして現役將兵に劣らざる奮戦をなしたるものなりと激賞せり。寛心又以て腹すべきなり。妻を小枝子といひ、康資、利子、曉子の三兒あり、旅順市乃木町二丁目三に居住せり。(濠川)

陸軍々屬勳八等 太田 滿

太田滿は、靜岡縣磐田郡見付町の出身にして、父を長三郎、母をリセと云ひ、明治四十二年二月二十三日に生る。大正十二年三月靜岡縣磐田郡見付町第一尋常高等小學校高等科を卒業し、昭和五年一月十日徵兵として中野電信第一聯隊第七中隊に入營するや、精勵軍務に服し、優秀の成績を以て六月一等兵に十一月上等兵に進められ、歸休除隊せり。爾後専ら蹄鐵業に従事しありしが、昭和六年九月突如として滿洲事變勃發するや、從軍奉公の誠を致さんと決意し、鐵工を志願採擇せられ、昭和七年五月二十九日備人を命ぜられたり。

斯くて六月四日より九月三十日に亘りては、吉林警備並に治安警察の補助に任ぜしが、此の間吉林憲兵分隊にありて反

吉軍が、漸次吉林に迫り、鐵道の破壊を企て一面多數の便衣隊を吉林に潜入し、九月上旬に至り、馮占海の吉林襲撃説、傳へられ、之れと氣脈を通ずる一團は遂に九月九日、同十日に亘り、吉林を攻撃し治安著しく擾亂せられ、九月十日より戒嚴令を布告するに至る等、治安維持は最も苦心を要する所にして憲兵は警備に關し、日夜不眠不休の活動を續けたり。

此の間に處し滿は將校馬丁として將校馬の手入飼育に當り、馬の最大能力の使役に遺憾なからしめ一方、廳舎内外の工事整頓隊馬飼育等の業務に服し、又は危険を冒して、書類の配達傳令等に當り殊に匪賊の吉林襲撃に際し憲兵出動するや、武裝して廳舎の警備に服する等、日夜精勵、克く其の任務を完うし、憲兵の最大兵力を警備勤務に使用するを得しめ、吉林の警備並に治安警察に大いに貢獻せり。



爾後八年八月二十七日に及びては、第一次功績名簿上申後引續き吉林憲兵分隊にありて、吉林警備並に治安警察の補助、匪賊討伐、犯人逮捕、檢索、檢問、分隊階級工として、隊長の護衛保育其の他廳舎内外の清潔整頓、傳令勤務等危険を冒して、日夜精勵刻苦以て克く憲兵の勤務を補助し、憲兵最大の兵力を警備勤務に服するを得しめて、常に精々たる偉勳を奏したり。かくて八月二十八日には吉海線頭道河子附近の戰鬥に参加し、二十七日吉林分隊長、林清の命に依り磐石附近警備部配屬憲兵乗馬に對する裝蹄のため、同日吉林出發、同地に出張任務を終了し、翌二十八日吉林行第

七號混合列車に依りて、歸隊の途中、午後零時三十分頃、吉海線取柴河—双河鎮間、吉林を距る七十五軒頭道河子附近に差懸かるや、機關車及び貨車三輛脱線顛覆すると同時に、兩側高地其他より匪賊約四百名襲來せり。

當時、該列車には乗客約七十名及び警乗として路警六名、滿洲國軍、連長以下九名乗車しあり、滿は路警並に歩兵十名上等兵一名と共に直ちに之れに應戰奮闘、擊退に努めしも匪賊の襲撃急にして忽ち列車内に侵入、亂射を受け爲めに歩兵十名、上等兵路警等は相次いで戦死し、滿洲國軍連長以下は遂に敵に降るの状況に至る。此の間滿は斃れし路警の銃器を執り最後の一名に至る迄奮戰し、三十發の彈藥を射盡し、衆寡敵せず不幸敵彈に依り左胸部及び左腕に貫通銃創を蒙りて遂に悲壯の戦死を遂ぐるに至れり。時に午後零時四十五分頃なりき。

滿、素より戰鬥員に非ざれば身に寸鐵を帯びずと雖も、嘗て涵養せられし軍人精神は勃然として興り、如何でか此の暴戻なる匪賊の所爲を許すべき。猛然として奮起し戦死せる路警の武器を執るや、敢然として匪賊に一撃を加へたり。此の擧、固より成敗の數、明かなり。而かも尙ほ敢へて此の擧に出づ。滿の面目茲に躍如たり。奮戰激闘、遂に敵彈に斃る。嗚呼壯なる哉其の意氣、其の死や悲み極めて大なりと雖も、花と散りたる其の壯烈なる最後に至りては、眞に大和男兒の本領を發揮して餘蘊なし。今や爛漫たる櫻花、一陣の狂風に散ると雖も其の馥郁たる芳香は千古に匂ひて消えざるべし。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

滿資性濃厚にして恭儉、孝心厚く兄弟に親切にして、忍耐力に富み、夙に郷黨の模範青年として推獎せられたり。幼にして、克く親に仕へ、小學兒童として尙ほ通學の餘暇、家事を支助して怠ることなく、勤勉力行、長ずるに及びては職を鍛工に求め生家を出で、師家に其の技を修め、夙夜精勵怠らず、夜間と雖も寸暇あれば生家に歸へりて、老父母の生業を扶けたりと云ふ。徵兵として入隊するや、軍務に精勵優秀の成績を収め、其の卓越せる技能は遂に階級工たるの免許を

得、更に獸醫部下士適任證書並に善行證書を附與せらる。滿の性行、推して知るべし。(澁川)

陸軍々屬勳八等 重山藤一



重山藤一は、山口縣熊本市布田施町大字上布田施の出身にして、父を勇吉、母をタケと云ひ、明治十九年七月七日其の二男として生る。明治三十九年三月山口中學校を卒業し、同年十二月騎兵第五聯隊に入隊、同四十一年十二月騎兵伍長に任ぜられ、翌四十二年十一月軍曹に進み、同四十四年六月獨立守備第五大隊に編入せられ、大正二年十月除隊、翌三年七月より出雲大社に就職し、同年七月大連神社會計係書記を命ぜらる。大正六年南滿洲工業學校附設支那語科及び支那時文科を卒業し、大正六年十一月大社教權少補を命ぜられ、大正十二年九月滿鐵會社支那語試験に合格、昭和二年十一月大社教中講義を拜命せり。

昭和六年十二月三十日陸軍通譯として、混成第八旅團騎兵第十聯隊第二中隊附を命ぜられ、同月三十日以降打虎山附近の警備に従事し、諜報の蒐集を擔任し、時としては危険を冒して自ら出で、搜索を實施し、又舍營に關する各種の事務に

執掌し、熱心精勵常に積極的に任務を遂行し、功績見るべきもの多し。翌七年一月三日小黒山附近の搜索を命ぜられ、敵情及び地方物資に關する調査を行ひ、良く状況を明かにして中隊長の任務遂行に便ならしめ、其の功績顯著と認められたり。

昭和七年一月十一日新立屯附近の警備に就くや、同日五臺子附近に於て不意に敵と衝突し不期戰を惹起す。此時藤一敵彈を冒して村内に入り、村長を呼び出して兵匪の状況を尋問し大に努力したる際、約二千の兵匪より全く包圍せられ、騎兵中隊は襲撃するに決したり。藤一は中隊長の直後に隨ひ軍刀を抜き、五臺子より出撃して牛馬の近くに迫りたる敵匪約三百に向て乘馬襲撃を決行し、此際頭部に敵彈を被りて壯烈なる戦死を遂げたり。此の勇敢なる襲撃に依り中隊の主力は容易に乗馬し、五臺子の敵は退却したるを以て、中隊は其の他の敵を撃破することを得たり。藤一の功績優秀と認められ、左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。
藤一性質温厚にして豪快氣概に富み、事に當りて精勵、責任觀念旺盛なり。妻キミと共に廣明、文明、清子、安正、和子の三男二女を遺せり。一同の健在と共に將來一心協力して家運の隆昌を圖り、亡父の靈を慰籍せんことを切望して筆を擱く。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 寺前彌七

寺前彌七は、和歌山縣東牟婁郡北山村大沼の出身にして、父を常三郎、母をむらと云ひ、明治十九年二月七日生なり。

明治三十二年三月郷里尋常小學校を卒業し、爾後家業に従ひしが、後、家郷を出で各地に轉じて奮闘せしも不幸にして志を得ず、遂に滿洲に移り日露戦殉國の志士沖貞輔の表忠塔建設等に關して奔走したることあり。又昭和三年頃關東軍のたぬ吉林蒙古等の物資調査をなし受賞せり。昭和六年九月二十二日臨時通譯を命ぜられ、歩兵第二十九聯隊に配屬せらる。性質豪放淡白にして責任觀念強く、義侠心に富み辯論風發的の快男兒なりき。

昭和六年十月十八日聯隊本部に於て勤務中、一標樹北方萬大福の攻撃に任じたる第五中隊に臨時配屬せられ、該部落の敵を攻撃するに先だち、途中支那人より同部落内に在る兵匪の状況を詳細に聞き取り、之を報告して中隊長の攻撃計畫に便ならしめ、次で攻撃開始の後は中隊長と共に、中央第一線たる第二小隊の先頭に立ちて活躍し、中隊長重傷を負ひて仆るゝや、率先土壁を跳越へて部落内に進入し、拳銃を以て敵匪致命を射殺す。小隊の志氣大に振ひ、遂に敵を撃退したり。彌七の功績優秀と認めらる。

同年十一月十八日昂々溪附近の戦闘に方りては、聯隊本部と共に三間房の敵陣地の南方約三百米を前進中、右第一線たる第一大隊の突撃の時機切迫するや、彌七同大隊と共に突撃参加を願出でて、許可せられ雀躍、彈丸雨飛の中を第一線に急進して同大隊に合し、午前九時四十分大隊突撃に移るや、彌七拳銃を發射しつつ敵陣に突入したる殺那、敵彈左眼を貫き遂に壯烈なる戦死を遂げたり。此の勇猛なる動作は大に聯隊將兵の志氣を鼓舞し、遂に敵を撃退せり。彌七功績優秀と認められ、左の恩賞あり。

戦功に依り勲八等に叙し、白色桐葉章を授け賜はりたり。(佐藤)

陸軍々屬 鈴木孝政



鈴木孝政は、秋田縣仙北郡雲澤村西長野宇熊堂の人にして、豫備役騎兵上等兵なり。父を多吉郎、母をリヨと云ひ、明治四十三年十月一日生なり。大正六年四月西長野小學校に入校し、大正十一年三月同校卒業、直に角館高等小學校に入校し、大正十三年同校を卒業す。爾後家に在りて農業に従ひしが、後自動車の運轉を修得し、樺太に於て運轉手として活動し、以て家計を補助したることあり。昭和六年一月徴兵として盛岡なる騎兵第二十四聯隊第二中隊に入營し、同七年十一月下士適任證を附與せられ、伍長勤務上等兵を以て除隊満期となる。同年十二月十七日より關東軍參謀部に屬し、傳令として滿洲事變に關する業務に従事したりしが、翌八年六月二十七日解備、同日事變の勤務を離れ、同年九月五日滿洲國首都警察警士として、寛城子游動警察隊に屬し、寛城子西

方北六軒なる四間房に於て、匪賊討伐中戦死せり。左に其の勤務状態を記さんに。孝政其の資格は臨時傭人たりしも、軍參謀部第四課に在りて勤務し、書類の送達、宣傳材料の蒐集整理等、作戦の指導上頗る緊要なる事務に當り、又勤務甚だ繁劇多端なりしに拘らず、精勵倦むを知らず、悉く迅速確實に處理し、其の功績を認めらる。殊に熱河作戦に際しては、

昭和八年二月十五日より同年三月十三日に至る間、宣撫工作指導のため奉天に出張せる藤本參謀に隨行し、克く上官の命を體して傳令其他の要務に服し、恪勤精勵にして其功績顯著と認められたり。尙ほ滿洲國警士として四間房附近の討伐に参加して勇戦せり。即ち此日（大同二年九月四日）午後四時四十分頃四間房東方約八百米附近高粱畑中に塹壕を設け、之に據りて頑強に抵抗せる約五十名を攻撃するに方り、終始第一線に在りて率先奮闘せしが、午後八時二十分頃突撃に移りたる際、孝政勇敢、衆に先んじて敵前約十五米突に肉薄したる時、敵彈を右側腹部に受け、天皇陛下萬歳を叫びつつ昏倒せしも、覺醒するや自ら所命の地點に後退して手當を受け、後新京醫院に入院せしも、出血多量のため、翌五日午後七時遂に絶命せり。

孝政、性質溫良、頭腦明敏にして元氣澄潤たり。帝國軍に屬して精勵し、滿洲國警官として其成績優良なるを得、終りに於ては匪賊と激戦を交へて遂に斃る。重傷死に瀕して尙ほ陛下の赤子たる名譽を重んじ、大和民族の精華を發揮して終りを完うす、忠魂永遠に滿洲國土を護り、其の芳名は千古を輝すべし。嗚呼。（佐藤）

陸軍々屬勳八等 鳥居音吉

鳥居音吉は福井縣敦賀郡栗野村金山の出身にして、父を鶴之助、母をマストと云ひ、大正元年十月二十八日に生る。昭和二年三月、粟野尋常高等小學校高等科を八ヶ年皆勳賞を受けて卒業し、四年三月粟野小學校補習科を卒業、六年三月名古屋金城自動車學校に入學し五月卒業、七年九月志を立て、渡滿、同十四日陸軍々屬自動車運轉手として、第八師團騎兵第八聯隊に備入せられ同日より奉天警備に任じて三十日に及びしが、此の間在兵工廠の中隊と在駐劄隊内の警備隊本部との

連絡に任じ、殆ど連日兵站倉庫より糧秣運搬に任じ、些少の事故をも生ぜしめず、業務を極めて圓滑に實施せしめたり。次いで奉天に轉じて同地の警備に任じ、十月七日より二十二日に至るまでは騎兵第一旅團に従ひ、東邊道の討伐に参加し、引續き歩兵第三十聯隊長の指揮下にありて、柳河の警備に従事し、十一月二日より、錦州の警備に轉じて同十四日に亘り、完全に其の責務を遂行せり。



十一月十五日より十二月十八日に亘りては、索倫支隊に屬し、索倫大興安嶺方面に出動し、同支隊本部自動車運轉手として兵員及び器材の輸送に任じ、支隊の行動を容易ならしめて功あり。而して八年一月一日より錦州警備並に九門の占領及び永安堡附近の掃蕩に参加し、同十三日に及びり。更に一月十四日より同二十

六日に至る迄は、錦州警備及び遼河地帯の討伐に参加し、二月二十一日よりは熱河作戦に従ひ、四月四日に及びしが輜重兵中隊を基幹とする師團輜重の編成せらるゝや二月二十日より、第八師團輜重兵中隊に配屬せられ、師團輜重自動車小隊の運轉手として、危険を冒し屢々夜を徹して活動し。特に古北口附近の戦闘に於ては敵彈雨飛

附近に達するや、突如迫撃砲を有する優勢なる敵の襲撃を受け、其一弾は同人の運轉せる自動車に命中し、同乗者、海和藤三郎と共に重傷を負ひしも責任觀念旺盛なる晋吉は輸送品の保全を期すべく、小隊主力の位置に追及せんと、尙も操縦を續けしも、及ばずして自動車は方向を失ひ路外に放出せられたり。而して殘虐なる敵は之れを見るや、更に射撃を集中し、且つ一部の敵は青龍刀を鑿して肉薄せんとせり。晋吉は致命的重傷を負ひながら、尙ほ銃剣を抜いて之れに應戦せんとせしも、更に頭部及び胸部に數發の敵彈を蒙り遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至れり。悲壯なる哉。然れども、晋吉の勇敢なる行動に依り小隊の志氣を鼓舞し、且つ輸送品をして安全なるを得しめ小隊の任務を完うせしめたる功績は實に拔群にして偉大なりと謂ふべきなり。

功により勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。(濠川)

陸軍々屬勳八等

金鐘日

金鐘日は、朝鮮慶南昌原郡上南而加音丁里の出身なり。昭和七年八月二十五日通譯委員として雇傭せられ、同日滿洲派遣歩兵第五十九聯隊第十一中隊に配屬、同年九月三十日に亘る間は同隊通譯として泰安附近の警備に任じ、日夜熱心誠實に精勵以て中隊の守備勤務をして圓滑に遂行せしめ、此の間の勤務大なりと認めらる。次いで十月六日より、富海及び泰安附近の戦闘に参加し同九日に及びしが、此の間克く幹部の命に従ひ彈雨の間にありて彈藥の運搬に或は通譯等に奔走して中隊攻撃戰鬥を有利に發展せしめ、遂に完全に任務を遂行するを得しめたり。此の間の勤務亦大なりと認めらる。斯くて十月二十日午前六時泰安守備地に向ひ優勢なる敵は、襲撃を試み其の兵力は數團となりて刻々に増加猛威を振ひ、死

傷續出するの情況に迫りしが、通譯は中隊の危機を察知し、斷然死傷者の銃を執りて第一線警備に就き或は彈藥を補充し或は傳令として勇敢に小隊長を輔け、二十一日午後三時頃第一線に糧食運搬中、兵營西側地區に於て不幸敵彈を蒙り右肩脚部に首管銃創を負ひ、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。然れども通譯の勇敢なる行動に依り兵員減少の折柄、第一線をして憂なく活動せしめ以て中隊を有利ならしめたる功績は偉大なりと謂ふべきなり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。兄、金鐘吉は吉林省哈爾濱道裡田三九に居住せり。

附記、鐘日の生年、學歷其の他に關し遺族に照會したるも回答に接せざるを以て以上戰歴の概要を記するに止む。(濠川)

陸軍々屬勳八等

中村一二三

中村一二三は、群馬縣新田郡笠懸村西鹿田の出身にして、父を喜一郎、母をツタと云ひ、明治四十年三月十六日生なり。大正八年三月笠懸尋常高等小學校を卒業し、次で大間々普通學校へ入學、同九年八月同校を退學し、同月より大連市なる正隆銀行店員となり、旅順支店詰となる。爾後哈爾濱を中心として銀行の業務に従事したりしが、昭和七年九月二十五日より囑託(通譯)として陸軍に雇傭せられ、歩兵第六十三聯隊に配屬せられて、九月二十六日出發、勃利方面の討伐として出動し、主として地方住民との接觸に當り、道路不案内の土地に於て、部隊の行動に不安なからしめたり。殊に行軍宿營に際しては、滿洲國家の建國に關する所要の宣傳に勉め、又は兵要地誌の資料を蒐集し、或は苦力を使役して道路の改善等を行ひたり。然して二道河子に於て敵より夜襲を受けたる際は、危険を顧みず敵情を偵察し、この功績顯著なるもの

と認められたり。

昭和七年十月より翌八年二月に亘りては、佳木斯に在りて、警備隊通譯として服務し、警備隊長の要人面接、情報蒐集、情報書類の翻譯等從事し、又宋竹梅、陶純基、王勇等の歸順工作に關し、通譯に任じて隊長の任務遂行を補助し勳功あり。



同八年七月中陸家崗格木蘇嶺等の戰闘に際しては、通譯として精勵し、十月中大平川の戰闘、寶清方面の討伐に参加し、周到なる用意と機敏なる動作を以て、通譯に任じ、且つ諜報勤務を補助して功績を認められ、十月より翌八年一月に亘る間、鶴立嶺、鎮山鎮附近等の戰闘に参加して戦功あり。又八年一月中吉林省東境方面の作戦間は留守隊に在りて通譯並諜報の勤務に服し、同年五月中は孫家店附近の戰闘、八月中は賓州東南方地區の討伐に参加し、次で九年一月二月の間は佳木斯附近の警備に任じ通譯、諜報の勤務に服し、日夜

兼行恪勤にして此間の功績優秀と認められたり。

同九年三月十日飯塚聯隊長に従ひ、土龍山附近の匪賊を討伐のため出動し、同日午前十一時頃土龍山西方に於て俄然約五百名の匪賊兵團と衝突し、戦況惨烈を極めたり。此時一二三は其の所持せる拳銃を以て、身を挺して奮闘に参加し、聯隊長を庇ひつゝ奮闘し、次で戦死者の銃を執りて、雲霞の如く四面肉薄する敵を猛撃したるも、衆寡敵せず、敵弾のため

左胸部を貫通せられ、聯隊長以下全員と共に萬斛の恨を呑みて、同地に於て壯烈なる戦死を遂げたり、一二三の行爲たる友軍の危急に際し、身命を顧みずして之に馳せ、聯隊長を中心として他の軍人一同と共に其の職に殉じ、大和男子の本領を現はし、皇軍の威武を發揚したるものにして、眞に軍屬の龜鑑たるべきものなり、後日左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

一二三性質温厚實直にして進取の氣象に富み、幼時より學業を勵み、常に滿洲に雄飛せんことを企望したり。雄志半ばにして噫れたるの憾なき能はずと雖も國家非常の際、然も東洋永遠の平和を招來すべき基礎を確立せんがため、遂に其職に殉じたり。盡忠報國の名譽は以て千載の後に輝くべし。一二三たる者亦以て瞑すべきなり。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 大月安男

大月安男は岡山縣吉備郡富山村大字宇山の出身にして、父を久一、母を政野と云ひ、明治四十二年五月十六日に生る。富山尋常高等小學校を卒業し、昭和五年一月十日、朝鮮龍山騎兵二十八聯隊に入隊せり。資性温厚にして精勤特に射撃に長じ、射撃競技會に於て聯隊長より賞を受け、昭和六年九月滿洲事變勃發するや、混成第三十九旅團騎兵第二十八聯隊第二中隊に編入せられて龍山を出發し、直ちに關東軍司令官の部下に入りて各地の警備及び戰闘に参加し、赫々たる偉勳を奏して昭和七年五月十一日原隊に復歸し、同十六日善行證書を手にしてに隊せり。

七年七月十日再び渡滿、傳手を求め軍屬となり、八月一日より奉天憲兵隊に職を奉ぜり。十月五日よりは、東邊道方面の警備並に治安警察の援助に任じ、混成第十四旅團、歩兵第二十七聯隊第一大隊配屬の陸軍憲兵軍曹杉本森平の馬丁とし

て困難なる行軍に従事し、危険なる戦闘に参加すること、南山城子邊沿、向陽鎮附近等大小、十一回に及び、其の勤勞大なりと認めらる。

而して十一月三日より、八年五月十日に亘りては、山城鎮附近の警備並に治安警察の援助に任じ、此の間東邊道方面匪



賊討伐一段落と共に、同地に出動憲兵の一部を山城鎮に駐屯し、十一月三日より山城鎮派遺憲兵の事務を開始するや引続き同地に駐まり、馬丁として奉天城内憲兵分隊長、坂元正の指揮下にありて、克く上司の命に従ひ、軍馬の保育衛生に熱心精勵し、非常時の使役に遺憾なからしめ、就中匪賊討伐出動等の際には、常に寡少なる隊員と行動を共にし、危険を顧みず、警戒傳令に任ずる等、終始派遺憲兵の任務を援助せり。次いで八年五月十日には、山城鎮東大街附近の戦闘に参加し、午前零時頃、山城鎮東大街十字路附近に匪賊襲來して、敵情を偵察せしむるに當り、偶々「サイドカー」運轉手、病臥中に依り、日常運轉の心得ある安男、之が運轉出動を命ぜらるゝや、勇躍「サイドカー」を操縦し、派遺憲兵と共に、現場に急行中、同日午前零時十分頃、前記十字路西方約百米の地點、街路南側小路に差懸かゝるや、突如五、六名の敵匪に遭遇、射撃せられしかば、久保田軍曹指揮下に勇敢

し、目滿兩軍出動せりとの情報あり、當時山城鎮憲兵分隊長は、部下全員の出動を命ずる一方、久保田軍曹中上等兵をして、敵情を偵察せしむるに當り、偶々「サイドカー」運轉手、病臥中に依り、日常運轉の心得ある安男、之が運轉出動を命ぜらるゝや、勇躍「サイドカー」を操縦し、派遺憲兵と共に、現場に急行中、同日午前零時十分頃、前記十字路西方約百米の地點、街路南側小路に差懸かゝるや、突如五、六名の敵匪に遭遇、射撃せられしかば、久保田軍曹指揮下に勇敢

陸軍々屬勳八等 金 重 義

金重義は、朝鮮平壤府柳町の出身にして、金雲鶴の男なり。昭和七年八月二十日陸軍備人を命ぜられ、獨立守備歩兵第四大隊第二中隊に配屬せらる。同七年十二月より翌八年一月下旬に亘れる、第一次三角地帯の討伐に際しては、通譯として参加し、密偵を指導し、或は地方土民を利用して、匪賊の所在動靜を探索し、之を中隊長に報告して、中隊の討伐行動に多大の便宜を興へ、同年四月中旬より六月に亘れる第二次三角地帯の討伐に方りては、又之に従ひて、五月七日高嶺附近の戦闘に於て傳令の勤務に服し、敵中を通過して、重要な命令報告の傳達を爲し、此功績顯著と認められたり。

同七年六月以降龍王廟の戦闘並に同地の警備をなし、七月三十日馬家堡子の戦闘、次で龍王廟の戦闘に参加し、同年十月中は西部三角地帯の討伐に於て、第四中隊長の指揮下に入りて岫巖縣下に行動し、同年十二月以降東邊道の討伐開始せらるや、橋頭分遣隊長の許に在りて、討伐網を脱逸したる匪賊團に關する情報の蒐集に任じ、同地附近匪賊の横行出沒頻繁にして、或は橋頭を襲撃する等の風聞盛なるに際し、密偵を指導して匪賊の動靜を確かめ、分遣隊長の警備方針を定め地方自衛團等の指導に便ならしめ、又中隊長の指示に従ひて沿線の巡邏を爲し、又治安局村長等を指導して、地方の治安維持に盡力し、以て中隊の警備勤務遂行に貢献せる所多大なり、以上の功績優秀と認めらる。

同九年二月十七日より三月十五日に亘れる冬期討伐に際し、通譯として之に参加し、極寒を冒し尺餘の積雪を踏破し峻なる山嶽地帯を越へ、連日連夜不眠不休を以て活動し、常に隊の先頭にありて情報の蒐集に努め、又潜伏匪賊を逮捕する等に依り、有利なる情報を得て中隊の行動を利する所少からず、偶々五龍背附近の討伐に方りては、病を推して之に参加し、篠原小隊に屬し常に危険を冒しつゝ活動せしが、三月十五日孫家堡子附近に於て多數匪賊の潜伏疑はしき一家屋を搜索するに方り、金は單身其の門内に進入し、同家屋内に敵匪の潜伏しあるを確知し之を報告せんとしたる際、匪賊等の發する一斉射撃に依り數彈を被り「匪賊在り匪賊あり」と連呼しつゝ遂に斃れたり。中隊は直に敵を包圍、之を殲滅せり。金の功績抜群と認められ、後日左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

金性質溫和にして沈勇、責任觀念旺盛、事に當り熱心精勵なり。内地語は勿論、支那語に通曉し、巧みに土民を使用し常に有利なる情報を蒐集し、中隊の任務達成に貢献せる所多大なり。又服従心篤く、將兵皆之を愛撫し、又其の人物と力量とに信頼する所甚大なりしが、遂に其職に殉じて今や亡し、惜むべきなり。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 五十嵐定吉

五十嵐定吉は、新潟縣西頸城郡上早川村大字土鹽の人にして、昭和七年滿洲事變に關し、同年二月十九日陸軍備人を拜命し、獨立守備歩兵第五聯隊第三中隊に配屬せらる。昭和七年一月二十一日は馬家寨附近の匪賊情況偵察に、同二十二日は史家堡附近の匪賊の狀況偵察に任じ危険を冒し、大膽なる行動に依り、其任務を完うせり。又一月二十八日より同二十

九日に至りては、中固平頂堡東方地區、同三十日より三十一日に亘りては新臺子西方地區の偵察を行ひ、匪賊の情況を明にして歸還報告せり。

同年二月中は開原得勝臺間、二月六日七日は得勝臺亂石山以東地區の情況、二月九日十日は鐵嶺平頂堡以西に於ける匪賊の情況偵察を行ひ、同十一日より同月十七日に亘る間に於ては、殷家屯遼海屯附近、小高刀屯中固平頂堡東方地等の匪情を偵察し、同月十八日は新臺子より東方に至り匪徒の情況を偵察し、遼陽は百官屯以東地區に蟠居して暴威を振ひ、附近一帯に於て掠奪を行ひあり、其數二千を下らざることを確知して之を中隊長に報告し、中隊の策動上多大の貢献を爲し以上の功績優秀と認められたり。斯くて李千戸屯附近一帯に於ける匪賊は其の多數を待みて暴威を振ひ、鐵嶺を襲撃せんとする徵候あり。同七年二月十九日中隊長は定吉を密偵として、匪徒の情況を更に詳細に偵察すべく李千戸屯附近に派遣したり。是に於て定吉は先づ得勝臺より殷家屯を経て李千戸屯附近に到り一泊の豫定を以て匪賊の動靜を探知し、以て我軍の行動に便ならしめんとし、勇を鼓して敢然危地に進入せり。然るに同月二十一日に至るも、歸還せず其の生死の程も亦不明なる情況となれり、中隊長は手段を盡して各方面より偵察せし結果に依れば、定吉は李千戸屯附近に於て匪賊の爲に射殺せられたること稍々確實となり其後引續き調査せしに、三月二十三日李千戸屯西方約二軒の地點に於て死體を發見し、檢視の結果其の定吉なること確實となり、右前頭部及び胸部に貫通銃剣を受けあり。二月二十日戦死せるものと認定せられ、其の功績優秀と認めらる後日左の恩賞あり。

戦功に依り勳八等に叙し、白色桐葉章を授け賜はりたり。

定吉性質溫和にして豪膽、思慮周密にして事に當り熱心精勵す。支那語に精通し、奉職の日月長からずと雖も密偵として常に適切なる行動を爲し、有力なる情報を齎して中隊の行動に貢献せる所甚大なり。武運拙くして遂に匪賊の兇手に墮

れたるは洵に惜しむべきなり。(佐藤)

陸軍々屬勳八等 荒木貞雄

荒木貞雄は明治三十三年九月二十八日熊本縣天草郡志岐村大字志岐に生る。父は朝吉母はキリ、妻はサキヨ、喬、サダ子、キヨの一男二女あり。大正二年三月志岐尋常小學校卒業、性質温厚にして世人の信頼篤かりき。



昭和三年三月六日關東軍兵器部職工として採用せられ、旅順に在りて精勵し居りしが、六年九月十八日夜滿洲事變突發するや、翌十九日火工作业手要員として急遽奉天に出動を命ぜられ、彈藥調製作業に従事せし外、其後事變の擴大に依り、引き続き到着する兵器の受領、集積、發送等に従事し、又兵器部に於て押收兵器整理を擔任するや、事變突發直後有ゆる困苦と危険とを冒しつゝ、廣汎なる地區に亘り該兵器の調査に任ず

る等、連日業務に奮勵し功を奏せり。

次いで十月三日より旅順に轉じ、兵器部留守部に在りて野戰兵器特に銃器關係の中堅職工として、率先之が整理、手入、

發送等に従事すると共に、屢々彈藥の調製作業に従事し、常に精勵し業務の進捗に努め、翌七年五月十九日より再び奉天に轉じて、繁雜なる野戰兵器の受領、發送、還送、整理等に當り、常に人夫を適切に使用し、率先業務の遂行に勵み、功を顯はせり。

斯くて六月七日更に轉じて旅順支廠に在りて、頻繁なる兵器の發送、受領、彈藥の調整並に兵器の整理に服し、始終一貫奮闘努力し、多大の功績を残せり。然るに偶々公務に基因し細菌性赤痢に冒され、翌八年十一月十六日旅順衛成病院に入院し、手當を盡したれ共、遂に十二月二日公病死を遂げたり。其責任觀念の旺盛なる、倒るゝ迄任務に邁進し、誠に衆の模範たるべし。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬 白勢太郎

白勢太郎は新潟縣北蒲原郡佐々木村大字佐々木の出身なり。昭和七年六月一日齊々哈爾濱兵隊馬丁として、採用せられ、馬の衛生保育に努め、七月中旬以降李海青、張殿九其他の匪首、反日反滿分子と策應齊市攻略を企圖せんとし居るの情況に鑑み、憲兵特別警戒を行ふに方り、太郎は人員寡少の爲不寝番及び分隊の警備に服し、傳令、彈藥運搬に従事し、熱心積極的に活動して治安の維持に貢献せり。

十一月二十八日より十二月九日に亘り歩兵第二十八旅團配屬憲兵長馬丁として、大興安嶺に鞏固なる陣地を構築し積極的に抗日反滿の舉に出づる蘇炳文、張殿九軍の攻撃に出動するや、沈着克く軍馬の保育に留意し、其活動に遺憾なからし

め、又常に危険を冒して部隊の前方に出で、敵情、道路の偵察並に部落の檢索に従事して憲兵の業務を補助し、十二月十日より二十九日迄滿洲里にあり、蘇炳文敗退後にして治安は全く擾亂せられ、市内に敗殘兵密偵潜入し、我軍情を探知せんとする者あるの状況に處して奮勵、克くその任務を完うせり。爾後翌八年八月下旬に在り海拉爾警備に服し、將校馬丁として克く職員の命を奉じ、馬の保育、管理に奮勵して分隊の活動に貢献せしが、八月二十九日遂に變死を遂ぐるに至れり。(加藤)

陸軍々屬(通譯)勳八等

菅 龍 彌

菅龍彌は香川縣高松市西濱町の出身なり。昭和七年六月十九日關東陸軍倉庫齊々哈爾支庫開設せらるゝや、通譯勤務要員として採用せらる。龍彌は幼時より遼陽城内にて支那兒童と共に成長せし爲、滿洲國語の機微に通曉せるのみならず、奉天中學校三學年修業後、遼陽商業實習所に入り二箇年の課程を終了せるを以て、商取引の知識を有し、同支庫通譯として苦力、商人の取扱並に物資調査等に於て、特殊の能力を發揮し、且つ屢々倉庫の現業勤務を補助し、殊に齊克鐵道不通の際に於ては糧秣輸送を補助し、支庫の業務遂行に多大の貢献を致し、功を顯はせり。

斯くて同年九月十九日解備せられしが、翌八年二月二十日錦州に於て野砲兵第八聯隊第二大隊通譯として採用せられ、直に熱河作戰の爲沈家臺を経て二十五日朝陽附近に集中せり。此間連日零下二十餘度の酷寒と險惡なる天候を冒し、三十里に亘る峻峻なる山地を踏破し、行軍間は克く情報蒐集並に行進路の誘導に任じ、宿營に際しては設營並に物資調達等に積極的に活動して、設營者の任務達成を容易ならしめたり。特に二十四日鱗牛營子附近蕭福亭車の攻撃に於ては、彈雨中

情報の蒐集及び砲兵陣地の偵察に隨行し、三月一日朝陽出發、建昌、平泉を経て、七日承德に到る間、連日四十軒餘の行程を、而かも零下二十餘度の寒氣は骨を刺し、險惡なる道路は徒に行軍を遲滞せしめ、夜遅く宿營地に到着し、拂曉前に出發せし事一再ならず、難行に次ぐ難行を續行し、人馬の疲勞其極に達せしも、率先設營及び物資調辦等の爲東奔西走して任務の遂行を容易ならしめたり。

而して八、九日長山峪の戰鬪に當りては、彈雨下に情報の蒐集及び物資の調達に隨行して目的の達成に遺憾なからしめ、十日より十二日に亘れる古北口附近の戰鬪に於ても同様に活動し、引続き十二日より古北口警備に服するや、或は宿營設備、或は物資調辦、或は陣地偵察等に隨行し、指揮官の任務遂行を容易ならしめたり。然るに四月一日陣地構築材料運搬の爲部隊と共に午前九時半古北口を出發、同十時頃豫て集積し置きたる古北口北方二里塞西側凹地に到るや、同地に六名の便衣を着用せる支那人を認め、運搬班長は之を怪しみ通譯を介して之を調査せんと、武装兵及び通譯を伴ひ警戒しつゝ之に近づき、約二十米の距離に接近せしに、突然四、五發の手榴彈を受け、其一彈は通夜の脚下に破裂し、不幸顔面及び胸部其他數箇所に破片を浴び、即死を遂げたり。

身を捨て、難局に赴きしは、是克く大和魂を發揚せる者にして、其功績甚だ大なり。功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。(加藤)

陸軍々屬(測夫)

田 倉 幸 吉

田倉幸吉は東京府北多摩郡國分寺村大字戸倉新田の出身なり。明治四十一年十月十日磯五郎の男として生る。母をイチ

と云ふ。大正十二年三月國分尋常高等小學校高等科を卒へ、同年十一月國分農業公民學校に入學、昭和三年三月同校を卒業。此間大正十五年七月國分青年訓練所に入所、昭和三年五月同所を終了、其性質温良、言語明瞭にして活潑、又友情厚く、青年團員として活動し、競技に次いで模範青年たりき。昭和三年十二月一日徴兵として近衛歩兵第一聯隊第五中隊に入營、専心軍務に精勵し、翌四年十二月精勵章を受け、五年五月上等兵に果進、同三十一日普行證書を受け歸休除隊せり。

其後陸地測量部測夫を拜命し、八年三月二十二日滿洲へ出張を命ぜられ、二十八日下關港を出帆、二十九日奉天に到着、直に奉天—四平街間の水準測量に日夜精勵其任を果し、引續き齊々哈爾附近の三角作業に服するや、率先奮勵し、又警備に奮闘中、偶々七月八日西哈拉屯附近の測量に際し、嫩江中の洲に目標旗設立の爲、小船にて任務を完うし歸航するに當り、恰も増水中にて水流急劇にして船動搖し、不幸墜落水死を遂ぐるに至れり。身を捨て、其任務を全うせるは、帝國軍人の精神を遺憾なく發揮せる者と云ふべし。(加藤)



陸軍々屬勳八等 小野寺秀雄

小野寺秀雄は宮城縣本吉郡大島村の出身なり。昭和六年九月十八日夜滿洲事變突發し、所屬獨立守備步兵第二大隊第三中隊は直に出動、北大營を攻撃せり。秀雄は之に加はらず中隊に殘留しありしが、鈴木軍曹の命を受け、暗夜危險を冒し、モーターカーに依り、彈藥を旺官屯に運搬して徳永曹長に交付すると共に、自ら進んで其指揮下に入り、重き彈藥箱を擔ひ、泥濘及び水壕を突破し、彈雨を滑り幾度か敵に遭遇格闘後、遂に克く中隊長の許に運搬し補充の任を全うし、中隊の士氣を振興して戰勝の基を拓きたり。

次いで第一小隊第四分隊に加はり益々勇戦、兵舎内の掃蕩に努め、中隊が敵の包圍を受け家屋防禦をなすや、沈着克く後方警戒に任じ、或は屢々逆襲する敵を撃退し、數時間の孤立中其位置を確保し、以て大隊主力の攻撃を容易ならしめたり引續き北部兵營を攻撃するや、率先前進し、疾風の攻撃を以て敵を潰走せしめて小隊の戰闘を有利ならしめ、殊に第四兵營攻撃に於ては、彈雨中右第一線に進出し、敵の左側方より猛射を浴びせて第三小隊の突撃を容易ならしめたる上、更に水壕を涉り敵營門に突入奮戦、遂に之を撃退せり。又彈藥庫の攻撃に際しては、不意に中隊を射撃せし、右側兵營の敵を掃蕩せる後、圍壁を破壊して敵の左側方より猛射し、遂に我機關銃射撃と相俟つて其一庫を爆破し、以て敵軍主力の心膽を奪ひ其總退却を促せり。

十九日朝新兵營を掃蕩して其東側に進出するや、敗走する敵に猛射を加へて多大の損害を與へ、中隊が北大營守備に服するや、掃蕩隊となり。到る處潜伏せる殘敵の危險を冒し勇戦力闘、之を殲滅し、且つ多數の武器彈藥を押收して偉功を奏せり。爾後翌七年六月末日迄鐵道守備及び沿線警備の爲日夜精勵し、或は分遣隊として渾河、京河陸橋、柳條湖、新城